

# 第1章 生涯学習のあゆみ

## (1) 生涯学習の伝統

### 1. 沖縄県の位置

日本地図を広げて目を南に向けていくと、南九州から台湾までの間に多くの島々が点在している。その島の数はおよそ60とも100あまりともいわれているが、大きな島を中心にして、あるまとまりをもっていることから群島、もしくは列島とよばれている。九州に近いところから奄美群島、沖縄群島、宮古群島、八重山群島などがそれで、この地理的条件が沖縄県の歴史や教育・文化においても大きな影響を与えており、沖縄の地域性を語るとき宿命的ともいえる重みをもっている。

この地理的条件は、沖縄は本土から遠く離れた不便なところという印象を強く与えるが、それは東京という大都市を中心にして沖縄をみているからである。沖縄県は日本の最南端に点在する交通不便な島の連りのようにみえるけれども、東南アジアという広域な視点から見ると、東南アジアのセンターの一つとして位置づけることができる。それは海という交通、交易をとおして、ひろく東南アジアや東アジアとつながっており、その地理的ひろがりや沖縄の歴史や文化に大きな影響を与えているのである。

沖縄の15世紀は東南アジアにおける貿易の中継地として繁栄していた。それは沖縄が北と南をつなぐ地点、万国の架け橋という地点にあったからである。とくに南中国には最も接近した位置にあるので、中国の産業や文化が直接沖縄に導入されたものが少なくない。産業面では唐芋や砂糖の製法技術が、直接南中国から沖縄にはいつてきているが、文化面では三味線、唐手なども中国から学びとったものであった。そればかりではなく、日本や東南アジアとの交流の足跡も広く認められているところである。

今日、私たちは東京を中心にして日本を見る、また、太平洋側を中心にして日本海側を見る、という見方が一方でおこなわれている。このようなものの見方はたいへん片寄ったものであり、正確にその地域の歴史や文化を見ることはできないことは、すでに定着しているように思う。今回沖縄県を調査の対象として選んだのは、沖縄を中心に据えてものを見、考えていこうということであり、島の連なりという地理的条件と、それにとまなうさまざまな文化特性を備えている沖縄県において、生涯学習がどのような形で形成されてきたかをみていこうとするものである。

### 2. しまの公民館

沖縄で使われている「しま」ということばは、自分が生まれ育ったむら（共同体、故郷）を意味している。沖縄の方言で、生まれた島という意味は「ウマリジマ」といい、故郷、もしくは限られた地域社会をさすことばとして使われてきた。このほかシマンチュウ（同郷出身者）、シマグミ（土地で産した米）、シマザキ（島酒、村むらでつくられた地酒）、シマウタ（島唄・土地土地の民謡）なども、しまのもつ意味をよくあらわしている(1)。周囲を海に囲まれた沖縄では、海外とのさまざまな文物の交流があったが、そのような環境のなかにおいても、しまを中心にして地域文化や共同体での営みが、醸成されてきたといえる。

ムラヤ（村屋、現在の自治公民館・字公民館）を中心にした自治組織の運営もその一例で、沖縄県において古くは、このムラヤが社会教育的役割をはたしてきた。これが他の都道府県の社会教育のあり方と異なる点で、沖縄の大きな特色といっている。ムラヤはむらの館、むらの公民館であり、いかえればしまの館である。古くはむら（村落共同体）の行政をおこなう場であったか、もしくは支配者の館であったといわれているが、いずれにしても村落共同体の中心的な建物であったことはうかがうことができる。このしまの館は木造平屋建ての小さな建物であったと伝えられているが、シマンチュウの共同出資、共同作業で建築され、管理・運営されてきたものであった。そして、しまでおこなわれるすべての行事や祭祀は、このムラヤが拠点になっていた。



ムラヤを彷彿とさせる建物（国頭村奥）



国頭村奥の全景



自治公民館（西表島古見）



自治公民館（大宜味村白浜）

現在、生涯学習の拠点になっている沖縄県の公民館は、このムラヤが原型になっており、ムラヤの性格を明らかにしていくことが、沖縄県における生涯学習社会の形成過程や共同体の性格を明らかにしていくことにつながるように思う。また、このムラヤ（自治公民館）を維持管理してきた人々の意志を受け継いでいくことが、将来にむけて沖縄県の生涯学習を進展させていく力になるのではないかと思います。この公民館でおりなすすべての行事や祭祀は「シマンチュウ文化」として保存・継承していく価値が高いばかりでなく、今後の生涯学習を考えていく上でも大きな意味をもっていると考えている。

### 3. 石垣市の自治公民館

#### ①ムラヤの慣習を残している自治公民館

沖縄県の公民館について、石垣市を例にしてさらに具体的にみていく。石垣市には中央公民館的な役割をしている平得（ヒラエ）地区公民館を含めて、41ヶ所の自治体（行政区）があり、そのうち36の自治体で自治公民館をもっており、いずれも活発な活動をしている。自治公民館の利用状況をみていくと、その多くは季節ごとにおこなわれる行事（神事）と、地域に伝わる伝統芸能の継承と開催を軸にして運営されている。神事に係わる行事はほとんどすべてが自治公民館とかかわりをもっており、地区住民の伝統的行事を大切にしようという意識が高いことがうかがえる。

自治公民館という名称は第二次世界大戦後に名づけられたもので、それ以前は地域の人々はムラヤ、ヤカタなどと呼んでいたことはすでに述べたが、現在活用されている自治公民館の3分の2以上は、米国の占領時代に高等弁務官資金で建て替えられたものを使用しているという。

しかしながらムラヤが自治公民館に変わっても、その精神は変わっていないことは、公民館の頭に自治という言葉がつけられていることでもわかる。本土の公民館とは異なった性格をもっているのである。その大きな違いは運営の方法である。36館の自治公民館の年間の活動費は、すべて地域住民の分担によるもので、行政からの補助金はほとんど受けていない。ただ旧暦の7月におこなう豊年祭と、石垣市の主催でおこなう産業共振会に関しては、市の農政課から補助金が支給されているという。自治公民館の年間の維持管理費は地域によって異なるが、1戸あたり数千円の分担金でまかなっているという。かつてのムラヤの建物が、地域の人々の共同出資、共同作業で建てられたものであったころの伝統を受け継いでいるのである。

「自治」とは本来、受益者負担が前提として合意されていたものである。その建物を利用する人々が建物のつくり、維持管理をおこなう。労働力、もしくは資金の分担なしでは、共同体の自治は成り立たなかった。その代償として建物を使用する。使用のあり方もある秩序を以ておこなわれ、それに反したものは共同体から排除される。これが現在の本土の公民館との大きな違いである。

現在、中央公民館的な役割をしている平得地区公民館も、かつては自治公民館であった。しかしながら、この公民館は一部補助金を使って建てられたために、地区住民が管理することができないでいる。公民館の設置基準によると、住民が管理する場合は、たとえ建設費の一部の補助金であっても補助の対象にはならないからである。したがって、この公民館だけは市が管理することになり、石垣市でただ一つの市立公民館として利用されている。沖縄にはこのような事情で行政が管理している公民館が少なくないという。

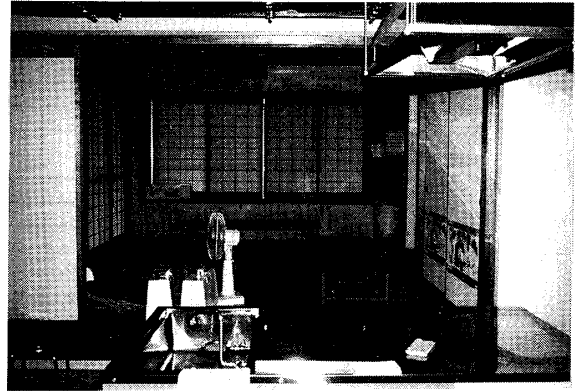
平得地区公民館が建設されるまでのいきさつが興味深いので、もう少し具体的に追ってみる。平得地区は戸数654戸の石垣市では比較的大きな自治組織をもっている。公民館の建築費は約12,000万円かかっているが、そのうち約8,000万円が地元負担、そして約4,000万円あまりが文部省からの補助金でまかなわれた。8,000万円の資金の内訳は、平得地区の字有地（農地と原野）の売却費、1戸あたり3万円の分担金、残りの不足分は平得地区の出身者で他の地域に移住していった人々や、一般からの寄付金、それに市役所からの補助金でまかなったという。

当初、平得地区の人々が建築費の2/3を拠出するという一方で、地区住民による管理運営を

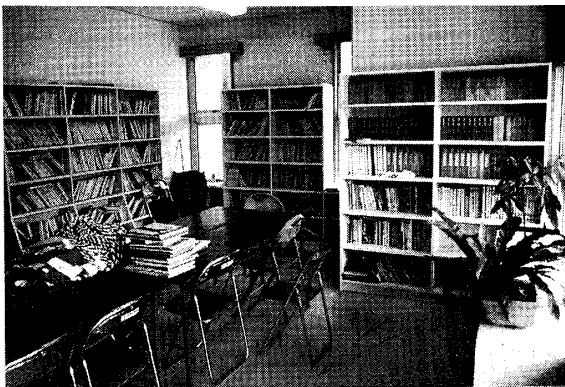
希望したが、文部省の指導で市の管理に移ることになった。特典として、個人で使う場合は有料であるが、平得地区の行事をおこなうために使用する場合、使用料は無料となる。この管理方法は石垣市にとっては都合のよい方法であった。地域の行事にかかわりのない団体や住民から使用届がだされれば、許可することができる。また市が主催しておこなう行事や講座、サークル活動なども開催することが可能になるからである。



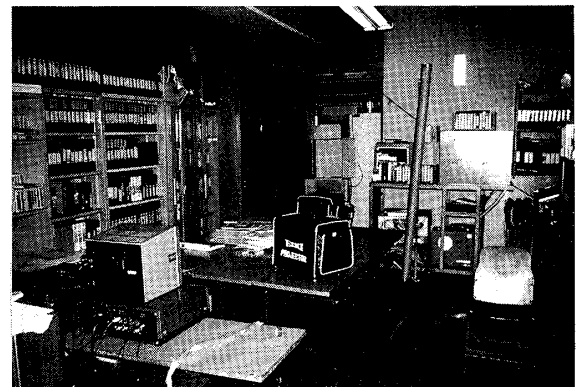
平得公民館（石垣市）



調理実習室と和室



平得公民館の図書室



視聴覚機材及び資料室

このように、自治公民館は本来地域の人々が地域の行事をおこなうために建て、使用する建物であって、言い替えれば、村落共同体を維持していくために、最も重要なまつりごとをおこなう場であったと考えることができる。ムラヤ（自治公民館）を維持管理してきた人々は、ムラヤにたいして特別な思いを抱いている。したがって、地域住民にとっては、そのような重要な場を確保するために、建築費や管理・運営費の自己負担を続けてきたもので、そのような思いが今日も続いているのである。

## ②まつりごとをおこなう場

石垣市には平得地区を含めて41の自治体（村落共同体、本土でいう区、もしくは区会）をかかえているが、そのうちムラヤをもっていない自治体が10カ所ほどある。大川地区は現在1417戸の所帯をかかえ、比較的大きな集落であるが、ムラヤをもっていない自治体の一つである。ちなみに、石垣市のなかで一番大きな自治体は登野城の3410戸、一番小さな自治体は3戸であ

る。

さて、ムラヤをもっていなかった大川地区では、どのようなかたちで地域の祭事や行事をおこなっていたか、という疑問がわいてくる。そして地域のまつりごとをおこなう場として有力な場所は、御嶽（地域によってウタキ・オタケ・オガン・ンガン・オン・ワンなどの呼び方がある）であったと考えている人は少なくない。ウタキは丘陵、または山腹の小高いところを選んで祭られている神聖な場で、周囲はうっそうとした森に囲まれている。森の中にはいと神庭と呼ばれるきれいに整地された広場があり、ここでは祭りの奉納行事や芸能が演ぜられる。神庭の奥に拝殿をもっているウタキもあり、大川地区のウタキもその一つである。沖縄の村落はこのウタキを中心にして形成されている例が多い。

八重山におけるウタキの成立伝承はさまざまであるが、ムラの氏神的性格をもつものが主流を占めているようである。そして村落のいっさいの社会的活動がこのウタキを中心にして営まれてきたという。ウタキには村人の保護者であり、支配者である神が棲み、神は血縁関係で村人と結ばれているという。いわゆる氏神と氏子との関係である。信仰的には豊年祈願を中心として豊漁祈願、悪疾などが流行しないようムラの安全平和、人々の健康息災、長寿など、もろもろの願い事を祈願する。古くはそのほかに雨ごいの行事が非常に多かったといわれている。また、ウタキの祭祀にかかわる経費は、古くは各戸から米を少量ずつ集めて充当していたが、現在では字会の年間予算に組み入れ、祭祀は神司、ムラの祭事係、氏子の三者の協力によって運営されているという(2)。

ここでは、八重山地方の民間信仰、及び年中行事について具体的に述べることはしないが、民間信仰は地域の共同体のなかで、民衆の間に成立し、育成されてきた日常的な庶民信仰であり、社会秩序の維持、心的治療、民間医療などに関する社会的役割りを果たしてきたものである(3)。また、年中行事は豊作祈願とその感謝、豊漁祈願とその感謝、そして無病息災、家内安全等を願うために節目節目におこなう行事であり、いずれも必ず神が介在する。

神と民衆の間であって、神の意志を民衆に伝えるのが神主、宮司と呼ばれる神官で、沖縄県ではノロ、もしくはツカサと呼ばれ、多くは村落出身の女性とその役を担ってきたことから、古代日本のまつりごとのすがたを現在に残しているという説が有力である。人々はこのウタキを中心にして祭りの準備、祭りの執行、神を喜ばせるための芸能とその練習、後かたづけに至るまでいっさいを取り仕切る。共同体の祭りとともに年中行事の祭事もおこなわれるウタキもあるという。

ムラヤをもたなかった大川地区をはじめとして、そのほか10ヶ所ほどの共同体は、このウタキで諸々の祭事をおこなってきたというのであるが、祭事は言い替えればまつりごとを意味し、そこに村落における政治の原型をみることができる。村落における政治は民間信仰、及び年中行事で概観したように、社会秩序の維持、心的治療、民間医療、及び生産力の向上、そして無病息災、家内安全などを願うためにおこなわれてきたもので、まさに平和で、安全な豊かな共同体をつくり、維持していこうという、人々の意志の現れである。



仲筋御嶽（竹富島）



仲筋御嶽（竹富島）



御嶽の神庭（西表島古見）



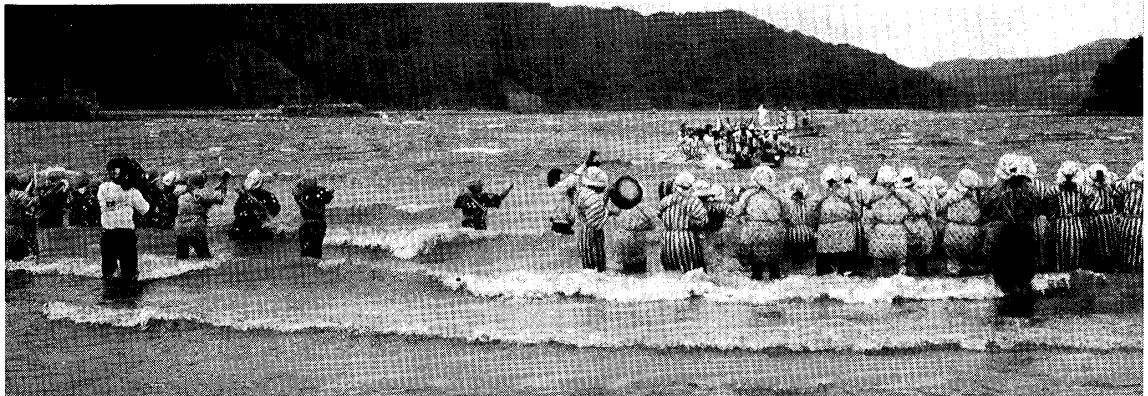
御嶽での集会（大宜味村塩谷）



盆行事アングマ（石垣市）



塩谷のウンガミ（海神楽・大宜味村塩谷）



塩谷のウンガミ（海神楽・大宜味村塩谷）

以上みてきたように、今日の積極的な意味での生涯学習活動が、古くは村落のなかで積み重ねられており、沖縄県においてはそれがムラヤ、もしくはウタキという施設（装置）が拠点になっていたことを知るのである。

なお、大川地区では平成2年度の段階で自治公民館建設計画が立てられ、その建設費と運営費は、どこからも補助金を受けないことが合意されているという。また、石垣市の兼城という戸数15戸ほどの地区では、ムラヤの建設費800万円のうち600万円を地域の分担金でまかない、残りを石垣市が補助をすることで建設された。1戸あたり50万円あまりの負担になる。兼城は沖縄本島の中・北部から移民してきた人々によって成立した集落で、移住当初、むらの人々が山から木を伐りだし、細工をして瓦葺きのムラヤを建てた。それが台風によって倒壊したために、新築をおこなったものである。新しい自治公民館は70人あまりも収容できる立派なホールを備えているという。

#### 4. 新生公民館とその運営

##### ①行政と住民との意識の違い

ここでは主として、行政主導によって整備がすすめられた公民館とその活動について、戦後のあゆみをたどっていく。結論から先に述べると、その進展ははかばかしくなかったといっている。戦後初期のころは、地域住民の集会にたいする米軍の警戒がきびしかったこと、人々は毎日の生活を立てていくために必死であった時期であり、教養や娯楽にかかわっている余裕がなかったことが大きな理由であったようである。一方では、依然として伝統的な自治公民館の活動が、活発であったことがその理由としてあげられる。

昭和21年に発足した沖縄民政府文化部は、翌年に地域公民館のあるべき姿について、たいへん興味深い見解を述べている。その要旨は次の通りである(4)。

- 収容人数が500人程度の集会場が必要である
- 映画、演劇、音楽会、展覧会等をおこなう
- 簡易図書館として使用できる施設と設備を併設する
- 将棋、囲碁、卓球などの娯楽設備を整える
- 食堂、喫茶室をつくり、珈琲、紅茶から、手軽な一品料理、和洋定食なども提供できるようにする
- 集会場と食堂の機能を使って、冠婚葬祭等の行事ができる場にする
- 郵便局、理髪所、薬局等を併設したい
- 自転車、ラジオ、農機具等の実践修理所もあっていい

この項目をみていくと、行政側が考えていた公民館は、地域における一大文化センターとして構想されていたことがわかる。地域の公民館や公会堂で、冠婚葬祭等の行事がおこなえる施設は、今日では当たり前のこととなっているが、当時の沖縄では斬新なアイデアであったに違いない。このほかに郵便局、理髪所、薬局の設置、さらに自転車、ラジオ、農機具などの修理までおこなえる施設として考えていたのは、地域の生活環境を踏まえたうえでの構想であったと受け取れる。生活改善運動の一環として、冠婚葬祭に大きなお金をかけることなく、また日

常生活や生産生活において、便利な施設として活用できるように配慮したものであった。昭和22年といえば、まだまだ戦争の爪痕を深く残していた時代であり、地域住民に大きな希望を与えるような構想であった。

しかしながら、この構想は実現することなく歳月を重ねていくのであるが、昭和28年に公民館に関する条文を作成し、それにもとづいて広報を重ねた結果、昭和30年には全琉球に109館の公民館が誕生する。が、いずれも地域の住民によって管理・運営されていたものであって、政府や地方自治体からの助成はなかったという。

活動の内容も産業振興に関する活動に力を入れる公民館があれば、生活改善、映画、レクリエーション、青年学級、婦人学級等の講座、地域の行事等に力を入れているものなどさまざまであり、各公民館、及び地域の事情によって、その活動内容は大きく異なっていた。この時期に誕生した公民館の多くは、ムラヤ時代の使い方を踏襲つつ、新しい事業を取り入れていたものと推測され、それは中央教育委員会が提唱してきた公民館の活動方針とは、大きく異なるものであった。

昭和30年をすぎた頃になると徐々に法律が整備され、琉球政府からの助成金が受けられる仕組みが整っていくのであるが、それを受ける団体はなく、したがって公民館の建物もさほど立派なものではなかった。全県の109の公民館のうち、優良公民館に選ばれた9館の建物の状況は、建坪20坪から60坪ほどの木造平屋建てで、建物の一室に集会室、図書棚、備品室、それに公民館を利用する各種団体の事務室を兼ねた部屋があるというもので、これも教育委員会の理想としていた公民館の姿とは、はるかにかけ離れたものであった。このため当時教育委員会では、公民館とよばずに公民館類似施設、また部落（自治）公民館などとよんでいた。

昭和46年当時の公民館類似施設の状況は次のように報告されている。

- 地区総数819のうち、公民館を設置している地区は645地区で、そのうち自治公民館638館、市町村公民館7館（このうち公民館設置規則(5)の基準に達しているものが1館ある）
- 建物の種類は茅葺き11館、瓦葺き208館、トタン葺き31館、鉄筋コンクリート造り364館で、建坪は大部分が100坪未満となっている。
- 管内の設備は放送施設のあるもの297館、録音機を所有している館139館、ステレオを所有している館115館、図書蔵書総数は13万3818冊となっている。
- 職員は専任の職員をおかず、地区の代表者が兼任する。

沖縄は昭和47年に本土復帰をする。その前年の公民館の設置状況は、全地区（村落共同体）の8割ほどであるが、そのほとんどは小規模な自治公民館であり、公民館設置規則の基準に達しているものが1館ある、という報告である。

公民館設置基準についての概要は参考資料で示したが、その主な基準は、公民館は区教育委員会が設置し、管理運営も教育委員会でおこなうこと、事業を円滑におこなうために館長、主事、及びその他必要な職員をおき、館長の諮問機関として公民館運営審議会を置くこと、公民館の規模に応じて教室、談話室、講堂、図書室、陳列室、作業室、娯楽室、運動場等を備え、備品としてラジオ、幻灯機、蓄音機、新聞、雑誌、産業指導用具、各種運動器具等を備えていること、事業主体として、教養部、図書部、産業部、集会部等を置き、各部会には部長を配置



することなどである。

この設置基準は各市町村の単位で、相応な予算が組まれなかつたとなかなかクリアできない基準であり、自治公民館の財力ではとうてい成し得ないことであつた。沖縄においては、昭和44年に公民館に対する政府（日本政府、及び琉球政府）の助成の道が開け、昭和45年に政府補助金と区教育委員会の負担金によって、読谷村中央公民館が誕生する。この公民館が設置基準に達した第1号の公民館であり、沖縄における中央公民館の先駆けとなつた。なお、自治公民館638館のうち、高等弁務官資金によって建てられたものが、沖縄本島に56館、宮古12館、八重山11館、合計83館あり、全体の1割あまりが助成を受けている。

## ②自治公民館の現状

ムラヤの時代から公民館設置基準に達した公民館誕生までの過程を、簡単にたどってきた。たいへん苦しい状況のなかで、緩やかなテンポではあつたが、地域の人々の力と行政側の努力によって、社会教育施設としての公民館を維持・管理してきたことがうかがえる。この過程を踏まえたうえで、今日の一連の公民館の活動をみていくと、大きく分けて二つの方向がでてきているように思う。その一つはムラヤ時代を色濃く残している自治公民館の活動である。石垣市の自治公民館については先に述べてきたところであるが、今日においても、地域の行事を優先させている自治公民館が多くを占めているようである。

その活動状況の概略をみていくと、公民館を会場にして1カ月に3回～4回の年中行事がおこなわれるという。行事をおこなうだけでなく、行事の練習や伝統芸能の練習などおこなうので、一般のサークル活動や会合が著しく制限される。なかでも旧暦の7月におこなわれる豊年祭（プーリ）は、奉納踊りや仮装行列がともなうので、その練習を含めて1カ月間は公民館が貸し切りになる。お盆におこなう獅子舞もかなりの練習期間を必要とするという。沖縄の年中行事を調べてみると、その数の多さと、たいへん厳粛であり、一方では華やかな歌や踊り、競技などがあることを教えられるのであるが、その行事自体だけでなく練習も公民館が使われているのである。

一方、市の教育委員会の立場にたってみると、このような自治公民館では困つた状況もおこるといふ。石垣市では多くの人々になるべく平等に使えるよう、その年の利用計画は年度始めに受け付けている。自治（地区）公民館を利用したい人々は多く、たとえば各種のサークル活動の団体、石垣島製糖協会など地域で営業している企業の新年会、成人祝賀会、各離島出身者の集まりである郷友会の新年会をはじめとした会合などである。これらの団体は、年度のはじめに利用計画をだして承認を得ているのであるが、地域の行事が近づいてくるとその練習のための利用届けが、直前に飛び込んでくるのだという。そのために前もって申し込んでいた団体やサークルとのトラブルがおこることも珍しくなかつた。そういう場合は他の団体の活動は休んでもらわざるを得ないという。したがって、今日利用されている自治公民館は地域以外の人々や、市の催しものが介入する余地がきわめて少なく、市町村が企画する生涯学習の場として活用することが、狭められてきているのが現状のようである。

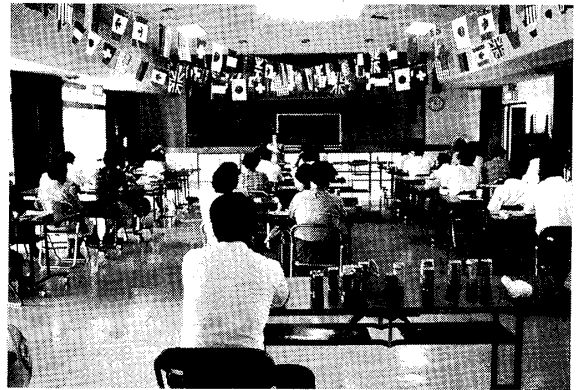
第二の方向は、農水省等からの助成金を受けて集落センターを建設し、それを自治公民館として使用している地区もでてきたことである。石垣市では川平、川原など4つの集落で助成金

による集落センター建設、及び増築がおこなわれたが、建物の管理は地域に任せられているので、評判は悪くないという。

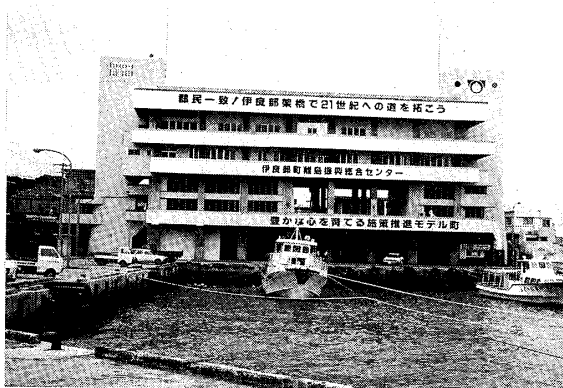
竹富町においても、自治公民館が老朽化していたので、国や県の補助金を得て、本土復帰後に次々と新しい多目的施設を建設していった。竹富島には老人コミュニティーセンター、黒島には農村婦人の家、小浜島には農村構造改善センター、波照間島には農村集会センター、鳩間島にはコミュニティーセンター、西表島には東部に離島総合センターが建設され、現在西部に2カ所コミュニティーセンターを計画中であるという。このような施設は従来のムラヤ的使い方から脱皮していくのではないかと思われる。



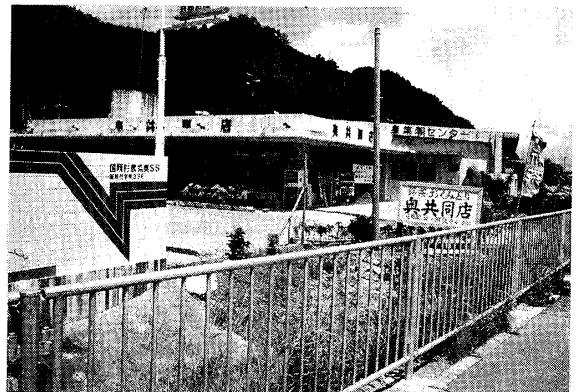
平良市中央公民館



平良市老人福祉センターでの講演会



伊良部町離島振興総合センター



集落センターと共同店（国頭村奥）

少々余談になるかも知れないが、石垣市の公民館関係者から興味深い話を聞いているので、ここに付け加えておきたい。古くから石垣市にあって、伝統的行事を続けている地域と、新たに石垣市に移住して集落を形成した地域とでは、同じ自治公民館であっても、市の行事に対する反応が異なるという。つまり新しい集落では、さほど伝統にこだわることなく、市の主催する行事やサークル活動なども比較的スムーズに受け入れているというのである。

石垣市の北部や西部に立地している集落は、沖縄本島からの移民してきた人々によって成立した集落が少なくない。第二次世界大戦後沖縄本島が米軍の基地建設にともなって、家屋敷や農業用耕地を接収された人々が、八重山地方に移住し、耕地の開拓をおこなって生活基盤を整えていくのである。これらの人々の移住、開拓については屋敷地と耕地にすべき土地が配分さ

れ、開拓費、住宅建設費、就農費、開拓団運営費等が支給された。このようにして石垣島内に成立した集落は17、戸数597戸、人数2700人あまりにのぼっている(6)。

前述した兼城という集落もその一つで、移住当時は28戸であったが、今日では15戸ほどに減少しているという。移住当初、むらの人々が山から木を伐りだし、力をあわせて瓦葺きのムラヤ（自治公民館）を建てたが、建物が老朽化したり、自然災害によって倒壊したりしたムラヤが少なくなき、そういう地域では建て替えがおこなわれている。その時点で、国や市町村から助成金をもらう地域が増えており、市の生涯学習の方針を受け入れる公民館も増えているという。沖縄県では現在なお、古い形の生涯学習と、新しい形の生涯学習が混在しているといえる。

なお、現在の公民館の設置状況は以下の通りである(7)。

#### <参考文献、及び参考資料>

- (1) 『沖縄の公民館』比嘉盛加、ゴールデン・バーバラ
- (2) 『八重山のお嶽』牧野清 1990年
- (3) 『沖縄県史22民俗1』第6章 1972年
- (4) 『沖縄の戦後教育史』沖縄県教育委員会 1977年 P797
- (5) 公民館設置規則

<定義>第一条 公民館とは、教育法（1957年米国民政府布令第165号）第14章第1節に規定する社会活動にあてがわれる市町村教育区により運営される施設をいう

（公民館の事業）第二条 公民館は、予算の範囲において又は法規に違反しない限り次の活動のために使用される。1. 成人学級、2. 講座シリーズ、3. 討論、講習会、展示会、公開討論会、4. 図書、記録、模型等のライブラリー 5. 体育、及びリクリエーションに関する集会

（公民館の設置）第三条 教育区が公民館を設置しようとするときは、区委員会規則で公民館の設置及び管理に関する事項を定めなければならない。2. 教育区が公民館を設置又は廃止したときは、その旨を別記様式の甲又は乙により中央教育委員会に報告しなければならない。

（禁止活動）第四条 公民館は次の活動に使用されてはならない。2. 特定の政治候補者政党及び政策綱領のための催し、3. 他の宗教及び宗教団体にも同様な機会を与えず或る特定の宗派及び宗教団体に使用されること、4 幼稚園として使用されること。

第五条 建物は、建築基準法により防風に耐えるものでなければならない。2. 従来の公民館を市町村教育委員会が所轄する場合は、180日以内に前項の基準に達するようにしなければならない。

- (6) 『旅農民のうた－裏石垣開拓小史』森口豁 1985年

(7) 沖縄県における公立公民館の概況（前掲書『沖縄の公民館』による）

本県の公民館設置は次のとおりで、職員は専任の館長が7人（11%）、専任主事は39人で1館あたりの専任職員は0.6人で十分な体制でない。

公立公民館の設置状況

設置者名	公民館の名称		設置年度	建物面積	国庫補助			備考
	名称	中央地区の別			補助年度	補助金	補助金の所管省庁名	
名護市	名護市民会館	中央	60	9,490	58年～67年	240,000	自治省	
石川市	石川市立中央公民館	〃	49	1,211	48	45,600	防衛庁施設	
具志川市	具志川市立 〃	〃	49	1,104	48	45,600	〃	
沖縄市	沖縄市立 〃	〃	55	2,250	52～55	234,393	〃	
宜野湾市	宜野湾市立 〃	〃	59	1,621	55～57	60,128	〃	
浦添市	浦添市立 〃	〃	54	1,550	51～53	167,161	〃	
那覇市	那覇市 〃	〃	50	672	転用			旧琉米文化会館を転用50年条例により公民館とする。
〃	〃 小椋南公民館	地区	57	1,677	56	125,400	運輸省	
〃	〃 首里公民館	〃	58	2,656	57	148,000	開発庁	
〃	〃 久茂地公民館	〃	54	2,232	転用			
糸満市	糸満市中央公民館	中央	49	1,250	47	8,700	開発庁	
平良市	平良市 〃	〃	60	2,520	59	141,000	〃	
国頭村	国頭村中央公民館	〃	48	432	47	8,700	〃	
〃	〃 中央公民館 辺野喜分館	分館	59	387	58	21,000	〃	
大宜味村	大宜味村立 喜如嘉地区公民館	地区	57	526	57	32,000	〃	
東村	東村立中央公民館	中央	52	486	51	30,000	〃	52年農民研修センター703㎡を、2階に施設庁援助で建設する。
今帰仁村	今帰仁村中央公民館	〃	51	792	49	18,000	〃	
宜野座村	宜野座村立中央公民館	〃	52	697	51	30,000	〃	複合施設、農民研修センター部分 1,230㎡
伊江村	伊江村 〃	〃	56	933	55	45,000	〃	
伊是名村	伊是名村立 〃	〃	51	486	50	24,000	〃	
与那城村	与那城村 〃	〃	53	618	52	33,000	〃	複合施設、石油貯蔵施設立地対策補助部分
読谷村	読谷村 〃	〃	47	1,126	44	13,934	日政援助	
粟国村	粟国村立 〃	〃	54	338	53	13,500	開発庁	
仲里村	仲里村公民館	〃	55	1,155	51	131,995	農林省	農村環境改善センターとして建設55年公民館として条例
南大東村	南大東村離島振興総合センター兼公民館	〃	55	1,254		(108,894) 109,694	開発庁	県費補助 32,507千円
豊見城村	豊見城村立中央公民館	〃	57	3,189	56	178,500	〃	
玉城村	玉城村立中央公民館	〃	52	1,880	50	24,000	〃	

設置者名	公民館の名称		設置年度	建物面積	国庫補助			備考
	名称	中央地区の別			補助年度	補助金	補助金の所管省庁名	
〃	玉城村立中央公民館 前川分館	分館	55	540	54	22,500	開発庁	
〃	船越分館	〃	56	450	55	21,000	〃	
知念村	知念村立中央公民館	中央	54	524	53	33,000	〃	
渡嘉敷村	渡嘉敷村立 〃	〃	53	864	52	33,000	〃	
北中城村	北中城村 〃	〃	58	2,723	57	240,947	防衛施設庁	コミュニティ供用施設として建設 58年公民館として条例制定
〃	北中城村熱田公民館	地区	58	582	58	44,841	〃	学習等供用施設として建設 58年公民館として条例制定
多良間村	多良間村立 〃	〃	53	690	52	33,000	開発庁	
本部町	本部町立中央公民館	中央	57	1,705	55	84,000	〃	
〃	具志堅地区公民館	地区	54	429	53	16,500	〃	
金武町	金武町立中央公民館	中央	59	2,440	58	112,500	〃	
〃	伊芸地区公民館	地区	59	1,361	58	73,700	〃	複合施設、学習等供用施設部分 360㎡
〃	並里地区公民館	〃	58	1,934	57	108,300	〃	複合施設、学習等供用施設部分 677㎡
勝連町	勝連町中央公民館	中央	56	608	転用			旧役場を転用 56年条例制定
嘉手納町	嘉手納町立 〃	〃	48	2,249	47		日政援助防衛施設庁	日政援助施設 50万ドル 65,465千円
北谷町	北谷町立 〃	〃	50	1,005	49-50	75,622	防衛施設庁	複合施設、学習等供用施設61,844 図書館 342㎡ 14,529千円
〃	〃 宇地区公民館	地区	57	360	57	46,100	〃	学習等供用施設として建設 57年条例公民館
〃	〃 宮城区 〃	〃	56	361	56	43,400	〃	〃 56年条例公民館
〃	〃 栄口区 〃	〃	57	360	57	46,100	〃	〃 57年条例公民館
〃	〃 砂辺区 〃	〃	56	349	56	43,400	〃	〃 56年条例公民館
〃	〃 北前区 〃	〃	55	350	55	16,800	〃	〃 55年条例公民館
〃	〃 桃原区 〃	〃	54	360	54	13,500	〃	〃 54年条例公民館
〃	〃 北玉区 〃	〃	58	358	58	46,100	〃	〃 58年条例公民館
〃	〃 上勢区 〃	〃	58	360	58	46,100	〃	〃 58年条例公民館
〃	〃 謝莉区 〃	〃	60	360	59	46,500	防衛施設庁	〃 60年9月定例議会条例制定
西原町	西原町立中央公民館	中央	54	2,166	53	84,000	開発庁	49年に設置されていた公民館を廃止し55年に建設された農改センターを条例により公館とした。
東風平町	東風平町農村環境改善センター	〃	55	1,545	54	217,683	農林省	
南風原町	南風原町立中央公民館	〃	53	2,264	51	30,000	開発庁	
〃	津嘉山地区公民館	地区	55	1,154	54	51,000	〃	
城辺町	城辺町立中央公民館	中央	48	957	47	13,476	日政援助	
下地町	下地町立 〃	〃	53	874	52	33,000	開発庁	
伊良部町	伊良部町 〃	〃	50	816	49	15,000	〃	
与那国町	与那国町 〃	〃	44	311	44	転用	米国高等弁務官資金	

沖縄県の公民館と社会教育施設（『沖縄の公民館』による）

●—設置      ●—建設中      ⊙—併用施設

	市町村立公民館・職員			自治公民館			市町村立社会教育			県立施設			私立施設							
	公民館のある市町村		公民館専任	公民館専任	公民館専任	公民館主任	公民館主任	公民館主任	公民館主任	公民館主任	公民館主任	公民館主任	公民館主任	公民館主任	公民館主任	公民館主任	公民館主任	公民館主任	公民館主任	
	地区館	分館																		公民館長
中央館	地区館	分館	公民館長	公民館主任	公民館主任	公民館主任	公民館主任	公民館主任	公民館主任	公民館主任	公民館主任	公民館主任	公民館主任	公民館主任	公民館主任	公民館主任	公民館主任	公民館主任	公民館主任	
国頭	●			○	●					●										
大宜味	●																			
東	●			○	●															
今帰仁	●			○	●															
本部	●	●		○		○					●									
名護											●									
宜野座	●			○	●															
金武																				
伊江	●			○	●															
伊平屋																				
伊是名	●			○	●															
計																				
恩納																				
石川	●			○							○									
与那城	●			○																
勝連	●			○																
具志川	●			○							●									
沖縄	●			○	●															
読谷	●			○	●						●									
嘉手名	●			○	●															
北谷	●			○	●															
宜野湾	●			○																
北中城	●			○																
中城																				
西原	●			○	●															
計																				



## (2) 学習活動の展開

このような民間の活発な動きがある一方で、行政の側が主導権を握って推進してきた社会教育に関する動きがある。本報告書では主として戦後の動きについて話をすすめていく。それは、実際に戦後の社会教育に携わってきた人々からの情報が得やすかったこと、比較的文書による資料が整っていること、そして現在の生涯学習へつながる部分が多いこと、などの理由による。

また、沖縄県の社会教育の変遷については、なるべくその全体像をおさえていくことに努めた。学習活動に関しては、成人教育、琉球大学の普及講座など、講座を中心とした学習活動に的をしぼった。また社会教育の拠点となった琉米文化会館、及び地域の公民館活動については、できるだけ具体的に追っていくよう努めた。成人教育、及び成人教室は義務教育を終えて職業についた青年男女を、対象にしておこなわれた学校開放事業であり、普及講座は主として教育現場で教壇にたっている教員の資質向上のために、琉球大学を拠点にしておこなわれた講座である。

なおこの章では、実際に戦後の社会教育に携わってきた人々からの話と、主な参考文献として『沖縄の戦後教育史』沖縄県教育委員会編 1977年、『沖縄の戦後教育史資料編』沖縄県教育委員会編 1978年、『教育行政のあゆみ』沖縄県教育委員会編 1984年、琉球大学資料を参考にしている。

### 1. 戦後初期の社会教育のあゆみ

#### ①戦争直後の社会教育の目的

昭和21年、米軍政府の下に沖縄民政府文化部が設立され、文書課（文書係、刊行係）、教化課（社会教化係、宗教係）、芸術課（美術係、芸能係）、博物館課がおかれた。文書課では、青年団、文化団体、及び宗教団体に関する行政事務、芸術課は、音楽、演芸、絵画、その他の芸術に関する活動の援助、及び指導、また博物館課では歴史的、民俗的文物の保存、管理、展覧会の開催等が主な仕事であった(1)。いずれも米軍政府の指導、許可によるものであった。

文化部が社会教育の目的にあげた事柄は、多方面にわたっている。それは、戦後の混乱期にややもすれば希望を失い、とりわけ退廃的、享樂的な方向に走りがちであった若者たちが希望をもち、自らの能力を発揮できるような社会、そして精神的にも経済的にも安定した社会を構築するために、種々の文化活動や職業教育の場をつくっていく、というものであった。

その大きな柱は、すべての国民が平等の参政権をもって政治に参加し、政治は民意にもとづいて運営されるというデモクラシーの考え方を定着させること、そして科学的な知識を基礎においた生産活動と、技術の習得という考え方を定着させることに重きをおいていたようである。したがって、非科学的な迷信を打ち壊して、科学的なものの考え方を養っていくような講座が多く開かれている。

この時期における社会教育活動のもう一つの目的は、風紀の乱れを矯正することと、科学的な眼で自らの生活を見直すことなど、生活改善運動であった。元来、沖縄の人々は規律正しい生活習慣をもっていたといわれているが、戦後の混乱期において、盗難事件が多発し、未成年者の喫煙、飲酒の増加、時間励行、公衆衛生等の公德心の低下、女子の貞操観念の希薄化など、大きな社会問題が顕在化していたという。安全な、安定した社会をめざすためには、かつて沖



縄の人々がもっていた心を取り戻すことが必要であった。

生活改善運動は家庭生活の改善をめざした。封建的なしつけや訓練を排除して、自由に、そして子供の個性を尊重して、伸び伸びとした子供を育てること、また、家庭生活においては衣・食・住の生活改善、衛生観念の普及などをめざして、講習会がひらかれ、係員による巡回指導などがおこなわれた。

芸術課や博物館課の設置は、伝統的な行事と、それにとまなう民俗芸能、歌謡、演劇、歴史的文物などを大事にする方策がとられ、沖縄の人々の心のよりどころを失わないような配慮があったと思われるのであるが、その一方では自然崇拜にみられる迷信的なものの考え方を、徹底的に排除するという方針を打ち出している。転換期にある時代においては、古いものを見直す以上に、新しい時代を背景にした新しい音楽、美術、演劇等の芸術に関心をよせることで、新たな世界を切り開いていく、という考え方である。そのために、ラジオ放送や映画の普及などの事業を精力的に展開した。

文化的活動でもう一つ重要なことは、英語教育の普及事業であった。他国の言語を学ぶことは、その国の文化を学ぶことであり、英語教育をとおして、沖縄の人々にアメリカ文化の理解させようという思惑があったものと思う。英語教育にあたっては「やさしみのある、人類愛に満ちた寛容な言葉を、家庭、及び社会に満ちあふれさせたいのである」ということをいっている。今日、振り返って考えてみると、その真の意図は2点あったとみられる。国際的に通用する英語を習得することで、沖縄の人々が狭い意味での民族主義に陥ることなく、国際的視野にたつてものごとを学び、判断することが大事であること、もう1点は沖縄のアメリカ統治を正当化させようとする目的である。

また体育の奨励も文化運動の大きな柱になっていたが、ここでは省略する。

## ②社会教育の制度化、組織化の過程

昭和23年に文化部が文教部に統合され、庶務課、学務課、編集課、成人教育課の4課の構成となり、成人教育課は成人教育に関すること、図書館、博物館、情報所に関すること、ミシン講習所に関すること、成人会、成人クラブに関すること、成人協議会、演劇、その他娯楽に関することの事務、及び指導を担当するようになるが、「男女成人にたいして英語教育と、民主的生活に必要な知識を学習し、個人の能力を伸ばして、文化人としての資質を向上させる」という目的がかかげられている。

この教育目的に沿って成人学校の設置がすすめられた。成人学校は、洋裁講習所、珠算講習所、舞踊研究所、タイプ講習所等を沖縄県下に設置し、備品としてミシン、ラジオ、蓄音機、時計、工具、その他の教育に必要な備品を整え、積極的に推し進めていったと伝えられているが、その具体的な活動内容については後に述べる。なお、昭和26年にこれまでの文教部にかわり、文教局に組織変更された。同局には庶務課、学校教育課、社会教育課が設置されたが、社会教育課における教育方針は大きな変化はなかった。

昭和27年に琉球教育法が制定され、沖縄地方の社会教育の方針がより具体的になっていく。そのなかで公立の図書館や博物館の無料開放、公民館の利用を促進すること、また教育委員会の認可を受けて学校教育に支障のない限り小・中学校の施設、および備品を一般成人に開放す

る、などの方針を明確にしている。

その方針をあげていくと、

- 公民館の設置奨励、及び施設の強化と活動の合理化（優良公民館の表彰、研究公民館の設置）
- 民主団体の育成と運営の強化（研究婦人会、青年会の設置、指導者講習会の開催、産業振興発表会の開催、優良団体の表彰、PTAの研究会）
- 成人教育の振興（成人教育振興協議会の開催、研究成人学級の設定）
- 視聴覚教育運営の強化（映画技術者講習、映画運営権休会の開催）
- 体育、リクレーションの普及、及び生活化（体育、リクレーション講習会の開催）
- 社会教育主事講習
- 図書館、博物館施設の強化（文化財保存研究調査、図書を増加充実）

となっている。このうち公民館、図書館、博物館等、社会教育施設の充実・強化対策について、どのような形で実施されかをみていく。

公民館の設置促進についてはさほど進展はなく、従来のムラヤ（自治公民館）の活動にまかせるという体制であったようである。すでに沖縄本島、宮古、八重山の各群島市町村においては、自主的に、それぞれの地域に即する形で公民館的性格をもった社会教育活動がなされている。公民館として独立の建物はなくとも、それに類似した議事堂、公会堂、青年倶楽部、区事務所等の既存の施設が活発に利用されている、という報告である。

図書館については首里図書館の建設、宮古図書館の建物修理が促進され、また博物館については、首里博物館の建設、東恩納博物館は首里博物館の完成後に合併移転し、資料充実をはかる。また、新しくおこなう文化財の収集、保存については、限られた予算で散逸している文化財の収集は容易ではなく、その道ははるか遠い、と報告されている(2)。つまり社会教育施設の充実に関しては、首里を中心にした博物館と図書館を除いて、あまり進展がなかったことになる。

これにたいして、青年会、婦人会等の社会教育関係団体の指導者養成と育成助成、勤労青少年教育、及び職業技術教育、視聴覚教育等についてはそれなりの進展があったようである。たとえば各地で開催された成人学級講座では、促成野菜の栽培、洋裁、伝統工芸品の製作、水稻栽培等の講習をおこなっている。また視聴覚教育の分野では、琉米文化会館の協力を得て、巡回映写会が活発におこなわれた。映写機は本島に4台、宮古1台、八重山1台、そして奄美大島2台が配置され、フィルムは琉米文化会館から借用した。また幻灯機、フィルム等の一般への貸与も相当実績があがっていたというが、この当時の具体的な資料は示されていない。

## 2. 成人教育の概要

### ①成人学校

成人学校については、先に戦後沖縄の社会教育の流れのなかで概略を述べたが、ここではもう少しその実態を掘り下げてみたい。成人学校は昭和24年に軍政府の指示によって、沖縄民政府文教部が「成人学校規定(3)」を制定し、その方針にもとづいて沖縄本島において実施され

た。なお、宮古、八重山群島地域においては環境整備が整わず、成人学校は未設置に終わった。

この規定によると、入学資格者は義務教育を終った16歳以上の青年男女で、現に他の公立学校に在学していない勤労青年や、家庭婦人を対象にしていた。したがって、主として仕事に支障をきたさない夜間を利用した授業がおこなわれ、単位取得のためには1週間に6時間、1年で26週、156時間を基準としている。必須科目は英語で、個人の能力に応じて普通科、中等科、高等科のランクを定め、そのほか社会科、家庭科、職業科を選択科目としていた。規定の時間数を受講し、教師が認定した者については終了証書が授与された。

この成人学校は、成人学校規定が制定された昭和24年に34校誕生し、翌25年には受け入れ学校数は156校に急増した。また学生数は31751人を数えた。講師は学校の教員と各市町村の有識者があたり、教育に必要な備品、消耗品はもちろん、照明用の燃料なども無償で現物配布されたという。開講当初は勤労青年たちに希望を与える事業として人気を呼び、授業の出席率は80%をこえるなど、盛況を極めたという。

## ②成人学級

しかしながら、この事業をすすめていくにしたがっていくつかの問題点がでてきた。その一つは学生の多くが職業をもっており、現実の生活とかけ離れた教育方針であったために、次第に講座の魅力が失われていったのである。この講座を受けていた学生たちの多くは、自らの職業に関係の深い講座、もしくは地域社会をより豊かにしていくための手がかりを得られるような講座を希望していた。たとえば農村出身の学生は農業技術や作物の改良等に興味を示していた。そのため教室での講義が中心になっていたこの講座の出席率は次第に低下していった。

そこで、昭和27年に成人学校の教育内容を見直すことになり、地域の生活と生産に結びつくようなカリキュラムの編成と、教室での講義だけでなく実習や研修等の体験学習を含めた教授方法を取り入れることが研究されることになった。そして講座の名称も成人学級と改められた。そして、地域における総合的な社会教育体系を構築するための研究と実験を目的として、沖縄本島に4ヶ所、宮古、八重山にそれぞれ1ヶ所、奄美大島に2ヶ所のモデル地区を指定して、補助金を支給することになった。

昭和28年に全琉球の教育委員会より報告された資料によると、この年に成人学級で取り上げられた講座の内容は、英語教育を中心としておこなわれていた成人学校講座とは大きく異なり、幅広い分野にわたっておこなわれていることに興味をひかれる。沖縄県全市町村における講座開催回数とテーマは次のようになっている(4)。

- 日常生活にかかわるもの（保健衛生、生活改善、料理講習、家庭教育、育児法、婦人講座、婦人衛生、礼儀作法） 合計569回
- 社会生活にかかわるもの（犯罪防止、社会道徳、年中行事） 合計 57回
- 産業と経済にかかわるもの（農業講座、産業の振興、農水産加工、畜産一般、林業、果樹及び菜園、農業共同組合の継続と運営、農村と経済、水産技術、信用組合、沖縄 経済と産業、農村と手工業） 合計453回
- 政治と法律にかかわるもの（時事問題の解説、村の実態、法規について、政治と経済、民主主義、民主政治と選挙、琉球の政治、琉球の法令について、地方自治について、税法につい

て、治安について)	合計328回
○科学と宗教にかかわるもの(宗教心の啓培、迷信打破、日常科学)	合計 48回
○一般教養にかかわるもの(移民問題、郷土史、一般教養、青年指導、純潔教育、新教育の解説、文化講座、市民講座、気象と農業、電気の知識、読書週間)	合計264回
○学校教育との連関と拡充にかかわるもの(珠算、洋裁、リクレーション、社会科、英語、文学、家庭科、和裁、音楽、職業教育、教育の諸問題、体育、簿記、活花、手芸、社会教育、社会見学、討議法、海外視察談、討論会)	合計874回

これらの講座の内容については、具体的な内容がよくわからないものもあるが、〈参考文献及び参考資料(4)〉のなかで紹介しているのも、参照していただきたい。そのなかで一番数多く開かれているのが、学校教育との連関と拡充にかかわる講座で、次いで日常生活、産業と経済、政治と法律、一般教養、社会生活、科学と宗教の順になっている。戦争が終わって間もないこの時期は、若い青年男女にとって基礎的教育、職業教育、生活改善に関する教育に関心が集まっていることがわかる。また、各市町村の教育委員会では、そのような住民の要望をよくくみ取っているように思える。

この種の講座は政府からの補助金が支給されていたが、支給される以前から各市町村や地域住民の意志によって開催されていたようである。昭和30年に議決された研究青年学級指定について(第22回中教審委で議決)という文書の中に次のような文章があることでもわかる(5)。「勤労青少年教育の重要性に鑑み、現在各地に勤労青少年の自発的な共同学習が、関係者の燃え上がる熱意によって約80学級が誕生し、自らの力で自己自身のため郷土の振興のため黙々と努力を続けているが、該施設が勤労青少年の自発的な活動としてのみ放置されるべきではなく、政府及び教育区はその責任において同学級の指導援助の手をさしのべるべきであるとの強い要望等があるので、勤労青少年教育振興の立場から、既設の成人学級講座の一環としての青年を対象とする学級として育成強化をはかることは、緊急を要する問題であると思慮されるので、これら青年学級の内から一定条件により実態を調査の上、選考の結果左記青年学級に対し研究を指定する」

この議決書は、自発的に活動をしている勤労青少年の学習活動を、政府及び各教育区で援助すべきであり、そのための方策としてある一定の条件を満たしている青年学級にたいして、研究青年学級と称して研究費を援助をしていこうというものである。その条件は、学級が30人以上で構成されていること、学級の開設期間が1年以上であること、学習時間が年間100時間以上であること、学習が継続的におこなわれていること(ただし当該地区の実状により、その継続が困難であると認められる期間については、この限りではない)、指定を受けた場合は研究発表をすること、等である。

このような経過を経て、成人学級が沖縄地方に定着していったのであるが、この時期は試行錯誤の時代であったといっている。成人の学習活動はその後、青年学級、母親学級、婦人学級、家庭教育学級、社会学級等、学習目的に応じて学級名が名付けられるようになった。その後、社会教育のための特定講座として、更新再教育講座、特別または一般教養講座、社会学級講座、

成人学級講座となり、そして昭和33年に成人にたいする講座として、文化講座、専門講座、夏季講座、社会学講座等の講座、及び学級が社会教育法によって整備され、各種学校施設や公民館を活用した学習活動が本格化していく。このような活動が青少年、青年会、婦人会、老人会等の学習活動に大きな影響を与えていった。

### 3. 青年学級の記録（読谷村の場合・昭和38・39年度）

読谷村は沖縄本島の中部に位置する人口27000人あまり、面積34.5キロ平方メートルほどの村で、北は恩納村、東は沖縄市、西は東シナ海に面している。村の北部と東部は山林地帯に囲まれ、第二次世界大戦以前は読谷山村と呼ばれ、純農村地帯であった。戦後は村の面積の約80%を米軍用地として接收され、米軍旗地の間に狭い耕地が点在している。戸数3680戸のうち約70%が農家（青年学級がさかんにおこなわれていた昭和39年現在）で、1戸あたりの耕地面積は約35アールとなっている。

村内には22の行政区があり、そのうち18の行政区に自治公民館が設置されている。自治公民館では区の行政運営全般にわたって活発な活動がなされ、また社会教育、青年会、婦人会、生活改善グループ、成人会、その他各種団体の文化、経済、教育、リクリエーションの場として活用されている。

昭和30年代後半の読谷村の青少年教育について、当時の村長であった池原昌徳氏は、青年学級の終了式のあいさつのなかで次のように述べている。

「本村は中学生と高校生で毎年400余名の卒業生がいて、新しく就職しているが、本村では総面積の80%が軍用地であるために、耕地の狭隘を示し、その上めばしい産業もないので、毎年卒業する彼らのほとんどが、那覇やコザ、嘉手納等中部一帯の商社や軍作業に就職している現状であるが、それにしても琉球内の労働事情は決して安全でないので、今後は本土就職とか、海外移民等、就職の門戸も世界に向けて考えなければならない。

また沖縄における農業経営も、近代化、合理化を推進するために、高度の知識と技術が必要であり、その他村外就職においても、英語の知識を有し、一般教養、機械操作の技術を身につけることが有利である。

とかく、現代において最も大切なのは教養であり、技術であり、人格である。そのために学校教育を振興し、家庭教育を明朗化し、社会教育活動を盛んにして、世の中の有為な人材をたくさんつくりたいものである。」

#### ①青年学級設置の主旨と研究テーマ

読谷村青年学級設置の主旨は、「昭和39年度一般青年学級研究発表集録」に次のように書かれている。

「読谷村の中学校卒業者のうち、約65%内外が高等学校へ進学し、残りの35%そこらはすぐに実社会に出て、勤労青年として各種産業で活躍している。この勤労青年に希望を与え、明日の生活に励む活力、生産の意欲を高揚するためには、どうしても生まれながら具備している個性や能力を磨き、友情によって培われていくものと信ずる。

従って教育委員会では些少なる予算額ではあるが、家庭の都合や、経済的都合で高校進学で

きなかつた青年達を中心に、一般教養を高め、技術を身につけ、科学文化の進歩した現代にふさわしい青年を育成し、明るい村、住みよい社会の形成者として活躍する人材をつくるために設置した。

幸いにして文教局の研究指定を受けた為に、最初から世話をを見て頂き、懇切なる指導助言や度々の授業参観で、生徒の感激等感謝に絶えない。

特に申し添えたいことは、委員会の計画に対して全面的に御協力下された読谷高校、読谷中校、古堅中校、嘉手納中校、嘉手納自練、読谷共進、読谷農協、読谷小校、古堅小校、村御当局の職員の御協力外、読青協、各公民館長、婦人会等の御理解の賜物で青年学級の主旨が完うしたものと確信する」

昭和39年度の村内の中学生総数が1576人と記録されているので、単純計算して1学年が約525人となり、その35%である180人あまりが中卒で就職したことになる。読谷村青年学級はこれらの人々が対象になっており、青年学級の研究テーマは「職業教育をどのようにしたらよいか」というもので、一般教養を高めるとともに、職業技術を高めることを目的にしていた。この目的にたいして各小中学校の先生方をはじめ、自動車教習所の人々、農協、公民館、青年団(会)、婦人会など、多くの人々や団体が協力していた。



山内徳信先生の社会科の時間、ユーモアの中に又真剣さ、夜など全然意識なし!

読谷村青年学級 社会科の授業



町んで製法なんでしょう。顔と顔、せつめいを聞いている。

青年学級 技術の授業



音楽の時間 岳原宜正 渡久山朝章の両先生方

青年学級 音楽の授業



授業参観 文教局

文教局の授業参観



青年会の果樹園づくり（読谷村）



中部地区婦人幹部研修会（読谷村）

（写真資料提供：読谷村中央公民館）

## ②地区青年会の協力

これらの団体のうち、青年会と青年学級は密接な関係にあった。青年学級に参加した多くの学生は青年会に所属していたからで、組織ぐるみでこの計画に取り組んでいた。読谷村の各地区に青年会が組織されたのは昭和23年のことで、結成当初の目的は、戦争で大きく破壊された村の再建・復興であった。戦争直後の読谷村は治安が乱れ、人々は生きる望みを失い、生活もままならぬ状態であったなかで、村の行政補助、治安維持等の役割を引き受けていたのが各地区に誕生した青年会であった。そして、住みよい社会の再建のためには、自ら学習活動に参加していくことに、村再建の希望をつないでいたのである。

そして、青年学級の長期講座を運営するにあたって、村長をはじめとした学級関係者と青年会役員が、地区の人々との懇談会を開催し、その骨子を説明するとともに学級開設の理解を求め、学級生として受講するよう呼びかけてまわった。この懇談会は昭和38年9月23日から10月19日までの間に、火曜日と日曜日を除いた毎日、21地区の自治公民館を巡回して、地区住民との懇談会を精力的に開いた。

懇談会の形式は、各地区青年団の連合体である読谷村青年会協議会の役員3～4名が1つのチームとなり、4つに編成されたチームが、分担して各自治公民館を巡回し、地区住民と話し合いをするというものであった。青年学級の研究テーマは「職業教育をどのようにしたらよいか」ということであったが、その具体的な内容については、①果樹園造成計画について、②家畜の多頭飼育について、という村長からの2つの提案があり、この提案について質疑応答がなされている。そして青年団員のなかから、奉仕作業を進んでおこないたい、という建設的な意見が飛び出して村長を感激させた、という記録が残っている。

このようにして青年学級の準備は進んでいったが、学級開設に際して次のような骨子がまとめられた。

- 青年学級開講 1964年11月（予定）
- 青年学級閉講 1965年 6月（予定）
- 学級生募集人員 50人
- 講師 小中学校職員、嘉手納自練、技術家
- 講義時間数 120時間（30週）

○講座内容

A 一般教養 (40時間)

社会科 (10時間)、英語科 (10時間)、珠算 (10時間)、簿記 (10時間)

B 技 術 (60時間)

自動車 (法規 30時間、実習 10時間)、木工 (20時間) 又は家庭 (20時間)

C 体育・音楽 (20時間)

体育ルール実技 (10時間)、音楽 (10時間)

③志願者受付から閉講まで

昭和38年10月、青年団役員、青年学級関係者と地域住民との懇談会が終了し、志願者の受付が始まった。志願者は受講志願書に必要項目を記入し、村の教育委員会へ提出するのであるが、志願書のなかに、職業、勤務場所、帰宅時間、開講希望日、開講希望時間、希望グループ等の項目が用意されており、仕事をもっている志願者の要望を配慮したものであることがうかがえる。また志願書には受講生の心構えとして、「私は今年度開講される青年学級に入学許可されたときは、勉学に精進し、現代社会にふさわしい青年になれるよう努力すると共に、当字青年会長、公民館長に迷惑をかけないよう閉講式まで頑張ります」という誓約書が加えられている。

この志願書が教育委員会で受理され、入学許可並びに開講式通知について、という許可書が届くと、晴れて青年学級の学生になることができる。そして昭和38年11月9日に村民会館において開講式がおこなわれた。開講式には受講生と、村長をはじめ、教育長、社会教育課長、各学校長、講師を勤める先生方が参列し、盛大におこなわれた。講座をおこなう会場は読谷中学校、古堅中学校、村民会館の三会場であった。なお、青年学級の年間計画並びに学習内容、青年学級生の実態 (性別、年齢別、職業別、出身字別受講者数、各月別出席状況、講座内容、学級行事は次の通りである。

1. 年間計画及学習内容

1994年度年間時間配当表 A 学級

場 所 読谷中学校  
時 間 7時～9時  
学級長 松 田 武 雄  
主 事 知 花 功 雄

月	曜日	1 週	2 週	3 週	4 週	5 週	
11月	木土		開 講 式	社 社	社 社	社 社	6 6
12月	木土	社 音	社 音	音 音	音 音		8 8
1 月	木土	社 社	英 英	英 英	英 英	英 英	10 10
2 月	木土	英 英	珠 珠	珠 珠	珠 珠		8 8
3 月	木土	珠 実	珠 実	珠 実	簿 実		8 8
4 月	木土	珠 実	珠 実	体 体	簿 体		8 8
5 月	木土	木/家木/家 体 . 体	木/家木/家 体 . 体	木/家木/家 木/家木/家	木/家木/家 木/家木/家	木/家木/家 木/家木/家	10 10
6 月	木土	木/家木/家 木/家木/家	発 表 会 式 閉 講				2 2



2. 青年学級生の実態（指定学級）

① 性別、年齢別分布

年 令	16才	17才	18才	19才	20才	21才	22才	23才	24才	25才	
男	5	4	1	0	2	1	1	4	0	1	19
女	4	2	1	2	5	4	7	5	0	1	31
計	9	6	2	2	7	5	8	9	0	2	50

② 職 業 別

軍 関 係	男	女	計
・サービスボーイ	2		2
・ハウスメイド		15	15
民 関 係			
・農 業	5	・家事 9	
・使 丁	3	・経 理 4	
・土 木	3	・使 丁 2	
・大 工	2	・車 掌 1	
・印 刷 工	1		
・書 記	1		
・熔 接 工	1		
・給 油 係	1		
	19	31	

③ 出身字別表

字	名	男	女	字	名	男	女
嘉	名	1	0	瀬	名 波	3	3
親	志	0	0	長	浜	1	9
座	喜 味	2	8	楚	辺	0	0
伊	良 皆	0	0	渡	具 知	0	0
上	地	0	1	比	謝	0	0
波	平	2	3	大	湾	1	0
都	屋	0	0	古	堅	0	1
高	志 保	2	2	大	木	1	3
渡	ヶ 次	2	1	比	謝 橋	0	0
儀	間	2	0	牧	原	0	0
宇	座	2	0	長	田	0	0

4. 各月別出状況

11月	32名	3月	21名
12月	31名	4月	22名
1月	24名	5月	19名
2月	18名	6月	21名

5. 行 事

- ・ 1月12日（日）真栄田岬へ遠足
- ・ 5月21日（木）懇談会（発表会について）
- ・ 6月6・7日（土・日）羽地真喜屋センター

学生の内訳を見ていくと、男性19人、女性31人で、年齢は16歳から25歳まで、平均年齢は20歳である。女性が多いのは、今日の生涯学習と同じような傾向を示している。職業は男性は農業が多く、そのほか使丁、土木、大工、印刷工、書記、溶接工、給油係、米軍関係ではサービスボーイが2名みえている。一方女性は米軍関係のハウスマイドが15名で一番多く、ついで家事手伝い、経理、使丁、車掌の順になっている。

各月の出席状況は開講直後の昭和38年11月が32名で最も多く、いちばん少ない月は昭和39年2月の18名、平均すると月23.5名となり、受講生の半分以上が何らかの理由で欠席していることになる。欠席理由は仕事との時間調節がむずかしいこと、すでに結婚している女性もおり夕方の時間は家事をしなければならないことなどがあげられている。また、出席している受講生でも遅刻をする人が少なくなかったようである。ある受講生は次のような感想を述べている。

「青年学級が開講してはや4週目の終わりになりました。私も青年学級生の一人となり、たいへん嬉しく思っています。でも今までに私が学級に通ったのはただの3日で、別の生徒たちにくらべると本当に恥ずかしく、青年学級生という名前だけ記入してあるみたいです。でも社会にでて働きながら学校を出るということは、大変むずかしいことだと私ははじめて知りました。そういうのも、学級に行くたびごとに欠席者がいるからです。」

「なかなか時間の都合が見つからないので、社会教育主事の先生に相談したところ、週に2日間通うことができないなら、土曜日だけでも出席しなさいと優しく話して下さり、勇気と希望がわいてきました。」

「月日がたつに連れて感ずることは、遅刻をする学級生が必ず2、3人いることです。仕事の都合等でしかたなく遅刻してしまうのですが、一生懸命指導して下さいる先生方や仲間のことを考えて、なるべく授業の開始時間には間に合うように登校してほしいと思う。」

働きながら学ぶということのむずかしさは今日でも同様であるが、読谷村の青年学級の学習をおこなう場合、次のような問題が浮き彫りになってきた。第1に1人1人の職業が違うこと、2. 学級生の思想や興味が違うこと、3. 学歴が違うこと、4. 家庭環境が違うこと、5. 各地区から通ってくるために通学時間が異なること、6. 開校時間が夜間であるため学習時間の制限があること、7. 夕食をとらずに職場から駆けつけてくる学級生がいること、8. 学級生が興味をもてるような講座の内容と講座の進め方に検討を要すること、9. 青年会の活動と学級活動とのかねあいを考慮すること等である。

このような感想がある反面、多くの学級生は大きな夢と希望をもって週2日の学習生活に臨んでいたことが、感想文のなかにあらわれている。

「高校に受験しなかった私も、中学卒業当時はなにか一つ身につくような勉強をしなくてはならないと思い、色々ある学校に夢見ていたのですが、思うように望みの学校にも行けず、家の手伝いをし、メイドという仕事をして2年くらいになりますが、来年あたりから自分の好きな学校にいくつもりでした。そんなとき私の耳に入ったのが青年学級の話でした。この地区からもたくさん応募して下さい、という青年会長さんの話があり喜んで応募しました。」

「私は1週間のうち木曜日と土曜日が待ちどおしくてならない。中学を出てからどんなに学校という教養の場にあこがれていたか、読谷村に青年学級が開校されたことを非常にありがたく思っています。働きながら学ぶことのつらさは、以前にもちょっと体験してきましたが、今

度の青年学級の場合は、昼間は働き、夜学ぶという自分と同じ立場の人たちですから、学校に通うのが楽しく、またみんな同じ村の人達ですので、気軽に話をすることもできますので、楽しかった中学時代に帰ったような気がします。

各科目の先生方も誠意をこめて授業をすすめて下さいます。教育委員会の先生も暇を見ては授業参観に来て下さいます。このような環境のなかで勉強できる私たちは幸せだなあとつくづく思います。最近寒さもきびしくなり、学校に行くことが億劫になりがちですが、青年学級の第1期生としての責任の重大さを感じ、自分のため、また後背のためにしっかり頑張りたいと思っています。」

#### <参考文献及び参考資料>

- (1) 『沖縄の戦後教育史』沖縄県教育委員会 1977年
- (2) 同掲書
- (3) 成人教育規定

##### 第1章 名称・目的

第1条 成人学校は市（町村）成人学校と称する

第2条 成人学校に男女成人に英語と民主主義的生活の必要なる知識を授けて徳性を滋養し、文化人としての資質を向上させるのを目的とする

##### 第2章 課程・授業

第3条 成人学校の教科は英語を必須科目として毎週4時間を課し、他に社会科、家庭科、職業科を選択科目として2時間を課する。但し科目の増設、時数の増加は差し支えないが、その場合は、予め軍情報部長の認可を受けなければならない

第4条 成人学校には左の科を置くことができる

- 1 普通科 初等学校程度の英語を授く
- 2 中等科 中等学校程度の英語を授く
- 3 高等科 高等学校程度の英語を授く

第5条 授業は夜間（昼間）に行い、1週6時間1年を通じ26週（156時間）を基準とする

第6条 修業期間は夫々1年とするも学力に応じ科を変更することは差し支えない

第7条 授業日は毎週2回、乃至3回とする

第8条 学校の始業、終業は左の通りである

- 1 始業5月1日
- 2 終業2月末日

第9条 学校長は各科教授細目を軍政府に報告しなければならない

##### 第3章 生徒

第10条 成人学校の生徒は左の該当者中の希望者とする

- 1 現に他の公立学校に在学していないもの

—中略—

##### 第16章 設備

第14条 成人学校は当該市町村の公立学校、若しくは公共建物とその設備を使用す

—以下略—

- (4) 成人学級講座の内容『沖縄の戦後教育史資料編』沖縄県教育委員会  
1978年（全琉各教育委員会より報告された教育年間計画による）

<生活関連科>

科目	講座回数	講義・実習の内容
1 保健衛生	144	健康と衛生、季節と衛生、公衆道徳、伝染病の予防と手当、救急法、個人衛生
2 生活改善	138	行事費の改善、生活設計、余暇の善用、風俗について、日常食、台所品評会
3 料理講習	83	栄養と調理の合理的配合、栄養素の機能、漬物、食品加工、料理講習、栄養について
4 家庭教育	64	子女の教育、子供の読書、家庭と学校の関連、家庭の団らんと娯楽
5 育児法	52	子供の育て方、子供の栄養について
6 婦人講座	51	男女同権と女性の心構え、婦人の教養について、婦人問題
7 婦人衛生	21	胎教、妊娠より分娩まで
8 礼儀作法	16	躰、習慣、礼法

<社会科>

科目	講座回数	講義・実習の内容
1 犯罪防止	29	犯罪の動向、青少年の不良化防止、民衆と防犯、刑法と犯罪について、戦前戦後の犯罪の比較
2 社会道徳	18	道徳上の諸問題、民主主義と道徳、戦後と道徳、人間性と道徳、道徳昂揚
3 年中行事	10	年中行事の解説、年中行事の改廃について、子供中心の行事、伝統について

<産業経済科>

科目	講座回数	講義・実習の内容
1 農業講座	148	有畜農業経営、保温折衷苗代、先進国の農業、地域に即した農業、農業薬品の取扱い方、水稻・陸稻の種粃の取り方、今後奨励すべき農業
2 産業振興	48	琉球産業の振興、村の産業、沖縄産業史、養蚕
3 農水産加工	44	農水産加工の理論と実践、糖業
4 畜産一般	42	家畜の管理、養豚、養鶏、養牛、防疫について
5 林業	31	植林運動について、山林政策、林野測定法
6 果樹・菜園	35	季節野菜の栽培、果樹の栽培、接木について
7 農業協同組合の運営	29	農業組合のあり方
8 農村と経済	28	生産経済、消費経済
9 水産技術	27	沖縄の水産業、沖縄水産業の将来、漁業について、造船技術及び製氷について
10 その他	21	信用組合について、沖縄の経済と産業、農村と手工業

<政治科>

科目	講座回数	講義・実習の内容
1 時事問題 解説	60	最近の政界情勢、南鮮の問題
2 村の実態	57	村の歴史、村行政と財政・予算
3 法規	51	琉球の立法について、民法及び刑法、日本国新憲法の精神
4 政治と経済	48	政治・経済の解説、金融機関の利用
5 民主主義	29	民主主義の本義
6 民主政治 と選挙	22	議会政治のあり方、民主政治のあり方、選挙法の解説、婦人と政治、模擬議会
7 琉球の政治	17	琉球の諸問題、沖縄統治の歴史的経過、琉球の政治と産業、対日講和条約、日米行政協定
8 琉球の法令	16	法令制度について、琉球諸法規について
9 地方自治	13	自治制について
10 税法	8	改正税について、納税について
11 治安	7	警察制度について、治安維持、警察からみた社会

<科学と宗教に関するもの>

科目	講座回数	講義・実習の内容
1 宗教心の 培養	32	人生と宗教、キリスト教、仏教
2 迷信打破	12	祖先崇拜と迷信打破
3 日常科学	4	

<一般教養講座>

科目	講座回数	講義・実習の内容
1 移民問題	55	沖縄の人口問題、南米地理、海外事情と移民の資格
2 郷土史	49	沖縄の歴史
3 一般教養	37	社会常識について、趣味と生活、家庭の民主化、ものの見方 考え方
4 青年指導	36	青年と思想、青年会の運営について
5 純潔教育	21	性教育、性病、結婚生活について、民主主義と貞操
6 新しい教育	18	新教育について、教育行政
7 文化講座	16	文化について、農村文化、郷土文化、文化と服装
8 市民講座	13	文化、政治、経済、時局講演（日本の政治・経済事情）
9 気象と農業	7	空と天気、農業と気象
10 電気の知識	6	ラジオの知識、機械文明
11 読書週間	6	読書について、読書文化について

<学校教育とその連関と拡充>

科目	講座回数	講義・実習の内容
1 珠算	145	加減乗除、競技会
2 洋裁	138	婦人ブラウス、ワンピース、男女児服縫い上げ練習、仕上げ、展示
3 リクリエーション	102	リクリエーションの意義、レコード鑑賞、映画、紙芝居、スクエアダンス
4 社会科	90	社会科一般（選挙法解説、移民の研究）
5 英語	63	やさしい会話、和訳
6 文学	47	現代文学、新かな使い、新しい言葉、文学入門
7 家庭	45	被服、料理、礼法、育児、看護法、流行の検討、婦人の体型と服装美について、衣服の種類とその用途、着用順序、繊維の鑑別法
8 和裁	37	一つ身、四つ身の縫い方
9 音楽	34	声楽と音楽の表示について、婦人愛唱歌、実施指導
10 職業教育	32	職業の選択、個性の職業、子供の進学、ミシンの使い方
11 教育の諸問題	30	民主教育について、教育委員会の運営
12 体育	27	ダンス講習、体育と保健、体育会、青年と体育
13 簿記	18	簿記のつけ方、家計簿のつけ方
14 活花	14	
15 手芸	11	あみもの
16 社会教育	10	社会教育について
17 社会見学	8	模範農家の見学、区施設の見学
18 その他	23	討議法（意見の表示、討議の進め方）、海外視察、討論会

(5) 研究青年学級指定について『沖縄の戦後教育史資料編』沖縄県教育委員会

1978年（1955年第22回中教審委で議決）

（糸満地区）

豊見城村 宜保青年学級  
東風平村 世名城青年学級  
三和村 新垣青年学級  
兼城村 座波青年学級

（知念地区）

玉城村 百名青年学級  
佐敷村 馬天青年学級  
南風原村 照屋青年学級  
南風原村 兼城青年学級

（胡差地区）

越来村 呉屋青年学級  
読谷村 波平青年学級  
読谷村 喜名青年学級  
読谷村 宇座青年学級  
読谷村 楚辺青年学級

（前原地区）

勝連村 南原青年学級  
勝連村 津堅青年学級  
与那城村 伊計青年学級  
具志川村 技芸青年学級  
美里村 登川青年学級

西原村	棚原青年学級	(名護地区)	
	(石川地区)	名護町	東江青年学級
石川市	山城青年学級	屋部村	安和青年学級
恩納村	南恩能青年学級	本部町	伊豆味青年学級
	(宜野座地区)	今帰仁村	与那嶺青年学級
久志村	三原青年学級	今帰仁村	玉城青年学級
久志村	瀬嵩青年学級	羽地村	呉我青年学級
宜野座村	青年学院	伊平屋村	我喜屋青年学級
金武村	漢那青年学級	伊江村	伊江青年学級
	(辺土名地区)	(久米島地区)	
大宜味村	塩屋青年学級	具志川村	技芸青年学級
大宜味村	田嘉里青年学級		
国頭村	奥青年学級		
国頭村	安田青年学級		
東村	川田青年学級		
国頭村	奥間青年学級		

### (3) 普及講座と琉米文化会館の活動

#### 1. 琉球大学の普及講座

##### ①普及講座の目的と位置づけ

沖縄県における生涯学習の伝統は、古くは村落共同体を軸に行われてきたもので、今日なおその形を変えつつも、年中行事や地域の公民館活動のなかで継承されている。ところが、「開かれた大学」という視点から学習活動を見ていくと、第二次世界大戦以降がその出発点となり、その中心的役割を果たしてきたのが琉球大学であった。

琉球大学は、琉球列島米軍政府の建議により、さらに大学関係者や沖縄島民の努力によって、1950年（昭和25）に開学し、沖縄が本土復帰をはたす1972年（昭和47）に、国立大学として再スタートする。開学当初から教育、研究、普及の三本の柱を設立目的として立てており、教育、研究活動とともに、大学普及活動を重視した体制を整えていた。この体制を支えていたのが校外普及部で、部長1名、講師3名、事務官4名の構成であった。この体制はアメリカのランド・グラント・カレッジをモデルとして導入したもので、本土における大学制度と著しく異なる点である。この大学普及活動については、戦後のアメリカ軍指導のもとでの民主化教育にたいする種々の議論があるが、ここでは純粋に開かれた大学についての的を絞って述べていく。

琉球大学基本法（1951年1月10日）総則によると、その第3項、第4項には次のようなことが定められていて注目される(1)。

「琉球諸島の成人に一般的情報及教育を普及する」

「琉球諸島の如何なる処においてもその事業を遂行する」

「文学、科学、及び専門的技能に関して学位を与え、その証書及び卒業証書を授与する」という規定である。



琉球大学の正規学生だけでなく、琉球諸島の成人を対象にして、琉球諸島のあらゆるところに学習の場と学習の機会をつくり、所定の成績を納め、所定の基準に達した者には学位を与え、その証書及び卒業証書を授与するというものである。その学習機会が普及講座で、大学を一般市民に公開し、正規の学生と同じ恩恵をあたえるものであった。琉球大学の普及講座は、開校以来本土復帰までの22年間にわたって行われ、第二次世界大戦後の沖縄の復興、とくに一般社会人のための教育、文化、産業面で大きな役割をはたした。その規定は「琉球大学普及講座規定」の中に具体的にもりこまれている(2)。

## ②初期の普及講座

『琉球大学十周年記念誌』『琉球大学創立二十周年記念誌』『琉球大学三十年』によると、普及講座の発足当初は討議研究会、英語教授法講習会、英語講座、職業教育ワークショップ、教育評価および測定講習、家政科講習、教育心理、教育原理の講習が開設されていた。その実績は次のとおりである。

### ●討議、研修会

講演会と参加者が自由に発言できるディスカッションの場を設け、1人1人の意見が十分に反映されるような問題解決の方法を考えていく。できるだけ多くの参加者を求め、討議を重ねることによって問題の解決をはかる方法を身につけることを目的とし、民主主義社会における討議の進め方についての研修会である。

会場は那覇、石川、名護、前原、名瀬、平良、石垣の各琉米文化会館で、参加人員は5736名を数え、開催延回数8回、17日間にわたって行われた。講師はミシガン大学教授団、琉大職員、民政府職員、その他学識経験者があつた。

### ●教員のための講習会

英語教授法：那覇高校（受講者30名）、名護高校（同36名）、講師名城嗣明氏

英語講座： 那覇市（受講者43名）、名瀬市（同40名）、平良市（21名）、石垣市（33名）、講師アンドラデー氏

職業教育ワークショップ：琉球大学、農業（受講者68名）、家政（同51名）、講師ネルソン博士  
教育評価及び測定講習：琉球大学、受講者444名、講師牛島義友博士

家政科講習：琉球大学、家事（受講者36名）、被服（同36名）

教育心理・教育原理の講習：宮古市（受講者207名）、講師島袋俊一氏他

教授法講習：八重山（受講者84名）、講師島袋俊一氏

英語講習： 八重山（受講者44名）、講師胡屋朝賞、名城嗣明氏

教員の最教育：政府等の援助で、土曜、日曜、休暇等に、首里、那覇、糸満、前原、玉城、大山、読谷、コザ、石川、宜野座、名護、辺土名、平良、石垣、名瀬の各会場場で実施、科目は教育心理、教育評価、学習指導、英語職業教育、英語、社会科学、家事、講師琉大職員、ミシガン教授団、牛島義友博士、軍情報教育部職員、政府の専門家等、受講者数5173名

### ●那覇エクステンション・センター

このセンターは職業教育を行うとともに、琉球における各種産物の分析、試験を行うために、

1951年（昭和26）に那覇市松川に設立された。当時の職員構成は助教授1名、講師9名、事務官1名で、校外学生の技術者養成と正規学生の職業指導にあっていた。講座は多種多様で、コースは電気、ラジオ、溶接、鋳物、機械の修理、内燃機関、科学分析、食品加工・醸造等である。

大学正規学生の職業指導として1951年に36人、52年に31人、夜間成人講座に52年に74人、短期の技術養成コースに51年に72人、52年に33人を訓練している。1954年（昭和29）に農家政学部に実用工学科（短期課程）が設置されるにともない、同センターは廃止された。

#### ●名瀬琉大分校

奄美大島群島の小学校教員養成を目的として、琉大の分校を名瀬に設置し、小学校教員訓練科をおく。設立当時の講師数は6人、学生数は76人であった。

#### ③普及講座の拡大・充実

1952年（昭和27年）以降の普及講座は、さらに規模を拡大し、組織的に開かれるようになり、以下のようなシステムで講座が開講されるようになった。以下前出の資料を基にして、当時開設されていた講座、および普及事業ををみていく。

現職教育：教職員の資質と資格の向上をはかるため、春、夏、冬の休暇期間に、北は辺土名地区から南は八重山地区までの広範囲にわたって開設された。発足以来10年間に51,300人が受講し、教職員の現職教育に大きな役割をはたした。

通信教育：僻地、離島等遠隔地に居住し、大学公開講座受講が困難な人々に対して、または事情により大学に就学が困難なものを対象に年2回開設された。発足以来10年間に8,600人が受講した。

夜間講座：大学に定在学できない一般市民を対象に開かれたもので、人文、社会科学の講座が年2回那覇市内の学校で開設された。発足以来10年間に18回の講座が開講され、7,300人が受講した。

夜間英語講座：現在、または将来職場において英会話を必要とする一般市民を対象に年3回、那覇とコザ（現沖縄市）で開設された。発足以来10年間に17回の講座が開講され、16回までの受講者数は3,300人。

単位取得試験：教職員の資格向上をはかるために、必要な大学単位を取得させる目的で実施された。発足以来10年間に5回の単位取得試験が行われ、3,563の単位が授与された。

ガリオア英語講習：米国留学者に対して、会話の上達とアメリカ文化の理解を深めさせることを目的として開設されたもので、ミシガン大学の教授団が担当した。

国際普及講座：外国人を対象に開設されたもので、夜間講座として日本語会話、琉球文化史等の科目が開設された。発足以来3回開講され、受講者は100人。

看護学生講座：琉球性府立那覇看護学校、コザ看護学校、講習衛生看護学校の学生のために、各学期5名の講師を本学から派遣した。看護学科の全教科に対して審査の上、大学単位を授与している。

普及叢書：大学で研究した成果を普及するために、普及叢書を刊行、配布する。

農家政学部普及事業：

農家政学部では、1955年（昭和30年）から農業普及と家庭生活改善の普及事業を開始した。この事業の目的は、農業や家庭生活について実際に役立つ知識や伝え、農業生産向上及び家庭生活の合理化を図ろうとするものであり、大学における学術研究の成果を大学を設立する地域社会に還元しなければならないという考え方に基づくものである。

主な普及事業は普及冊子（農家便り・普及叢書）刊行と各種講習会、ラジオ放送、展示会の開催であった。農家便り（1955年12月創刊）は毎月3000～5000部、普及叢書（1966年創刊）は毎年2000～5000が発行され、農家及び農業団体、学校、会社等に無償で配布された。講習会や展示会は農事講習会、病虫害防除展示会、畜産講習会、農産加工講習会、生活改善講習会等が各地域において学校または公民館を利用して頻繁に行われた。

その後琉球政府が行う農業改良普及事業の充実強化によって、これまで大学が直接農家を対象にして実施してきた普及事業に検討が加えられ、その結果大学が実施する事業は、農業、家政の指導者訓練に重点がおかれることとなり、琉球政府の改良普及員やその他の農業及び生活関係技術者に対する研修や講習会が強化された。この大学普及事業と、政府の行う農業改良普及事業との役割分担は、1956年から60年にかけて行っているようで、大学が直接携わる普及事業は、短期間に方向転換せざるを得なかったが、アメリカのランド・グラント・カレッジの精神を受け継いだ典型的な事業であった。

#### ④普及講座の科目と受講者

##### ●講座別科目

当時の受講者関係の資料から、普及講座の科目についてみていくと、実に多くの科目が講義されていたことがわかる。しかも受講者関係の資料には制限があったために、ここに示した科目は当時講義されていたすべてのものを網羅しているわけではない。主として、小中学校の先生が受講していたもので、上記の講座のなかでは「現職教育」の範疇にはいるものが多くを占めている。科目を講座別、講習別にみていくと以下のとおりである。また、受講資格、開講期間、時間、成績の判定等、講座開設要項については、資料(3)、(4)で示した。

土日講習：ガイダンス、カリキュラム、職業指導、教育心理、法学概論、日本史、社会学。

夏季講座：憲法、憲法概論、平安朝文学、英語講読、英語（米文学）、経済学原論、経済学、英文学、文学、言語学、西洋史、英語講読（Ⅲ）、英語学特殊研究（Ⅰ）、日本史、世界史、社会学、民法（Ⅳ）、人文地理学、心理学、社会心理学、青年心理、倫理学、人体美学、絵画学概論、国文学講読、国文学、国文学史、琉球文学概説、法学、教育課程、教育方法、教育心理、教育評価、教育社会学、国際問題、家政概論、家庭管理、栄養学、家庭教材研究、被服、新しい学習指導原理、体育概論、体育管理、学校体育の理論と実際、児童心理、児童の成長と発達、学校管理、中等教育課程、国語学概論、国語科教材研究、小学校教育測定及び評価、機械工学概論、電子回路特論、工業材料、図工科教材研究、生物の科学、生物学概説、植物学概論、農学概論、家畜解剖学、理科教材研究、解析学（微分学）、体育史、ダンス。

春季講座：財政学、経済学、経済学原論、経済学史、哲学史、教育行政学、自然科学（物理の科学）、物理学、数学、憲法、国際問題、国文学講読（Ⅰ）、国語（書道）、英語（英語学）、方法及び指導、論理学、家畜解剖学、体育管理。

冬季講座：憲法概論、音楽、青年心理、英語（作文、文法）、英語講読（Ⅱ）、英語発音学、日本文学、体育史、音楽通論、工芸概論、図画（工芸）、物理学、理科（動物学概論）、昆虫学総論、経済学、政治学、琉球史、社会学、社会科、教育原理、代数学（Ⅰ）、動物生理学、学校保健管理、職業指導、国語教材研究、国際問題。

夜間講座：英語（会話、作文、文法）、米文学、英語史、文学、国際問題、美術、日本文法、日本文学概説、日本史、東洋史、東洋史概説（Ⅰ）、西洋史、人文地理、音楽通論、教育方法、教育行政学、法学、民法（Ⅰ）、社会学、物理学、物理学概論、化学、数学（初等解析幾何学）、電気工学概論、トランジスター工学、運動生理学、生物の科学、数理統計、図学。

通信教育：教育原理（学習指導法）、教育心理、保険体育教材研究、体育科教材研究、国語科教育法、国語科教材研究、理科教材研究、社会科教材研究、算数科教材研究。

現職教育講習：食物の選択及び調理、小中学校国語教育教材研究及び教育方法。

教育長期研修：学校管理及び指導、教育哲学。

#### ●受講者の推移

前出の『琉球大学三十年』には、普及講座年次別受講者数の推移が表にまとめられている。この表には1952年から54年までの数字が欠落しているものの、1951年から1971年までの18年間の受講者数が示されている（表1）。これをみると現職教育関係の講座には、夏期講座43,521人、冬期講座10,833人、春季講座8,413人、単位取得試験2,666人、中部普及講座60人、合計65,493人が受講していることがわかる。夏期講座に受講者が多いのは、小中学校の先生を対象にしていたことにより、講師も受講者も比較的時的余裕があり、講義が受けやすかったことが一因であろう。夏期講座は1971年まで続いているのに対して、そのほかの講座は冬期講座が1960年、春季講座が1961年、単位取得試験は1959年で終了している。

一方、成人教育関係の講座は通信教育、夜間講座、英語講座、ガリオア英語講座、国際普及講座等が開かれていた。通信講座は1962年まで開講され、受講者は11,854人、夜間講座は1971年まで14,579人、英語講座は1970年まで9,021人、その他を含めて合計すると36,243人が受講している。これらの講座は成人講座であり、一般社会人を対象にしていたが、実際は小中学校を中心とした教員の受講も少なくなかったようである。

琉球大学の普及講座は全体の傾向として年々受講者が減少していく傾向がみられ、先に述べたように夏期講座と夜間講座に関しては1971年まで続けられたが、その他の講座は途中で開か

れなくなっている。教員の資格授与と資質の向上を主要な目的の一つとしてきたこの講座の役割が、一応果たされたという関係者の認識に基づくものではなかろうか。

それを裏付けるものとして、受講者の経歴をみていくと県内の教員養成所や教員訓練所の修了者で、教員の仮免許をもっている人が少なくない。このなかで一番多くの科目をとっていた人は、30科目、総受講時間932時間、取得単位60単位で、27科目、871時間、52単位、あるいは21科目、823時間、52単位などが比較的多くの科目を受講し、単位をとっている人であった。これらの人々は普及講座開講当時、もしくはその1、2年後に入学している人が多く、入学から10年間ほどの期間をかけて上記の単位を取得している。

一方、受講科目、取得単位の少ない人は、すでに教員免許をもっている人が多く、1960年代に入ってから受講が多いように感じられる。少ない資料での分析なので断言することはできないが、普及講座は開講後20年あまり間にこの講座を必要としていた人々は、目的としていた学習をひととおり終えたのではないかと考えていいようである。

普及講座は1971年に終了する。翌年の1972年（昭和47）は、沖縄が本土復帰を果たし、沖縄県として再出発する年であり、それにもなつて琉球大学の管轄が沖縄民政府から文部省に移管され、国立大学として再出発する年でもある。この年「琉球大学普及講座規定」および普及講座に関する諸規定が廃止され、法制上においてもその役割を終えたのである。そして本土の大学と同様、文部省委嘱による大学公開講座が1973年からスタートする。1973年以降1992年までの琉球大学公開講座については、講座名、期間、講師、受講者数等の資料を、第2章「大学公開講座」の展開で示した（P121～P131）。

#### <参考文献及び参考資料>

##### (1) 琉球大学基本法（1951年1月10日）総則

###### 第3項. 目的

本学の主要目的は芸術、科学、及び職業に関して男女学生に高等学校教育以上の教育を施すことにある。本学は又軍事占領の目的に沿うて民主主義国家の自由即ち言論集会、訴願、宗教及び出版の自由を増進するために、琉球諸島の成人に一般的情報及教育を普及する。

###### 第4項. 権能

上述の目的達成するため本学は予算の範囲内で下記の権能を行う。

イ. 部科を設け、琉球諸島の如何なる処においてもその事業を遂行する。

併せて文学、科学、及び専門的技能に関して学位を与え、その証書及び卒業証書を授与する。

ロ. 教室、実験室、製作室、研究施設及び懇談を通じ教育計画を実施する。

ハ. ニュース、娯楽、講演の伝達普及のため放送局、映画、印刷、拡声装置及びその他の施設を経営する。以下略

##### (2) 琉球大学普及講座規定

第1条 大学普及講座は、高等教育を求めながら、大学に進学する事の出来ない成人男女を教育するのを目的とする。

- 第2条 大学普及講座の教職員は、大学専属教員及び他の職域の著名な専門家を以て充てる。
- 第4条 高等学校卒業者及びこれと同等以上の学歴を有する者のみが大学普及講座において大学単位を与えられる資格がある。しかし、成人は誰でも所定の登録料を支払って単位を与えられない条件で登録する事が出来る。
- 第8条 大学正規学生の教授が採用する成績査定法は、大学普及教授にも適用される。
- 第10条 講座は、予想される聴講者に適したところで行う。
- 第11条 講座は、適格な講師及び適当な教材が得られる場合、住民の必要を満たす科目について要望があれば開講することもできる。
- 第12条 講座は、主に土曜、日曜、夜間または休暇期間中に行う。
- 第13条 通常の普及講座時間数は、一日三時間を限度とする。琉球大学は、与えられた期間内に講座を完了する必要がある場合、一日の講座時間数を延長することが出来る。
- 第15条 各学年度に開講する講座、及びその設置場所は別に公表する。

### (3) 1971年度琉球大学夏期講座開設要項

1. 目的：この講座は琉球大学普及講座規定により大学に定在学することのできない一般成人に対し高等教育を施すために開設する。
  2. 主催：琉球大学
  3. 受講資格：一般成人
  4. 開設期間：前期 自1971年8月2日 至1971年8月14日  
後期 自1971年8月16日 至1971年8月28日
  5. 開設場所：琉球大学
  6. 開設科目及び担当講師 別紙(一)のとおり
  7. 1クラスの受講人員 30人～50人
  8. 1週間の講義日数 1日の講義時間数

総時間	月～金	土曜日
60時間科目	午前3時間	午前3時間
	午後2時間	午後2時間
45時間科目	午前3時間	午前3時間
	午後1時間	
30時間科目	午前3時間	午前2時間
	午後1時間	
- 実験科目は時間を延長することもある。
- 台風、その他の理由で休講した場合は適宜補講する。
9. 成績の判定
    - (イ) 成績は筆記試験、演習実験、レポート、受講時間等を勘案して判定する。
    - (ロ) 評価は次のとおりとする。
      - A・きわめて優秀な成績
      - B・優秀な成績

- C・普通の成績
- D・普通以下の成績
- F・不合格

10・単位の授与

高等学校を卒業した者、及び高等学校を卒業した者と同等以上の学力がある者と認められた者で、所定の成績を得た者には大学単位を授与する。

11・以下略

(4) 1971年度（第41回）琉球大学夜間講座開設要項

1. 2. 3は夏期講座開設要項と同じ
4. 開講期間 自1971年11月1日 至1971年12月24日
5. 6. 7は夏期講座開設要項と同じ
8. 講義日数及び講義時間
  - (イ) 1週間の講義日数
    - 1 単位科目 毎週2日（火・木）
    - 2 単位科目 （同上）
    - 3 単位科目 毎週3日（月・水・金）
  - (ロ) 1日の講義時間
    - 2時間（18:00～20:00）
9. 以下は夏期講座開設要項と同じ

表(1) 普及講座年次別受講者数（次ページ参照）

2. 琉米文化会館の設置とその活動

琉米文化会館は、戦後沖縄における新しい形の文化活動の拠点になった施設の一つで、沖縄県には5カ所設立された。その活動の展開は新しい沖縄の社会教育にさまざまな意味をもっていたと思われるが、残っている資料は多くない。ここでは①琉球文化第19号（昭和57年9月）に掲載された伊藤松彦氏の報告「琉米文化会館と沖縄の図書館」（原文のまま掲載）と、②石垣市での聞き書きをもとにして、琉米文化会館のはたしてきた役割について述べていく。

①琉米文化会館と沖縄の図書館・・・・・・・・・・・・・・・・伊藤松彦

●琉米文化会館の設置目的と活動

米国民政府は、1947年から52年にかけて、石川、名護、那覇、八重山、宮古の順に全琉5カ所に琉米文化会館（当初の名称は文化情報会館）を開設した。「琉球民の教養、調査研究、レクリエーションの場」とし、「各種の図書、雑誌、新聞や行政資料及び視聴覚資料を揃え、また各種の行事を催す」というのが、その設立の主旨である。（『那覇琉米文化会館要覧』1956年）

沖縄では戦前から公立図書館が少なかったうえ、いずれも戦災で壊滅的打撃をうけた。占領後の復興は難航し、とくに地方においてはそうした公共施設は皆無であった。

表(1) 普及講座年次別受講者数

1971. 3現在

現職教育関係 年度 講座名	1971. 3現在																		
	'54	'55	'56	'57	'58	'59	'60	'61	'62	'63	'64	'65	'66	'67	'68	'69	'70	'71	計
夏季講座	2,767	4,888	6,481	6,160	5,567	5,037	1,891	1,456	990	1,203	1,557	1,304	576	750	921	892	595		43,035
冬季 "	2,043	1,889	1,819	1,385	1,451	1,407	839												10,833
春季 "	1,254	1,558	1,343	1,049	698	698	775	1,038											8,413
単位修得試験		976	869	271	327	223													2,666
中部普及講座																60			60
計	6,064	9,311	10,512	8,865	8,043	7,365	3,505	2,494	990	1,203	1,557	1,304	576	750	921	952	595		65,007

成人教育関係

年度 講座名	1971. 3現在																		
	'54	'55	'56	'57	'58	'59	'60	'61	'62	'63	'64	'65	'66	'67	'68	'69	'70	'71	計
通信教育	1,914	1,487	1,205	1,556	1,495	1,203	1,268	752	974										11,854
夜間講座	757	1,032	1,273	1,386	916	1,071	977	494	557	362	476	767	838	767	636	612	683	975	14,579
英語講座		150	964	1,558	1,563	714	1,094	322	573	389	150		340	378	361	329	136		9,021
ガリオリ英語講座	86	192	95	25	33	31	19												481
国際普及講座						179	56	19			15								269
M R E P													18	21					39
計	2,757	2,861	3,537	4,525	4,007	3,198	3,414	1,587	2,104	751	641	767	1,196	1,166	997	941	819	975	36,243

総計	8,821	12,172	14,049	13,390	12,050	10,563	6,919	4,081	3,094	1,954	2,198	2,071	1,772	1,916	1,918	1,893	1,414	975	101,250
----	-------	--------	--------	--------	--------	--------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-----	---------



これに対し、琉米文化会館の蔵書は1957年次には各館とも図書8400冊（うち洋書2200冊）に達し、雑誌、新聞も多く、加えてマイクロフィルム、映画、スライド、レコード（ハイファイ）、地図、写真、絵画、紙芝居等々が備えられていた。施設も当時としてはモダンであった（宮古は1961年新築）。巡回文庫も活動していた。いずれも住民がかつて経験したことの無いものばかりで、従来の図書館のイメージを一変させるものであったろう。かつて占領下の本土で、C I E図書館が少なからず青年や知識人をひきつけたことがあるが、沖縄ではおそらくそれ以上のものではあるまいか。利用者も多く石川の場合、館外貸し出しは年間1万余冊、閲覧者は延32万人、その内訳は小学生28%、中学生47%、一般16%に達している。（琉米文化会館司書長・儀部守男。『今日の琉球』1957.12）

さらに注目すべきは、伝統芸能が重視され、会館ではスクエアーダンス、コーラス、レコードコンサート、映写会、読書会、英語講座等の文化活動が毎晩催され、各地にも出かけている。

先に引用した「設立主旨」はむしろ控えめなくらい、その活動はまことに広範、多彩であった。後述するように、資料には宣伝臭のあるものが多かった。したがって、「米国の狙いに疑問をもった」という証言がある一方、「復帰闘争に参加しながら、文化会館にもよく通った」という証言もあり、相当数の住民、とくに青年がその魅力にひきつけられたのは不思議とはいえない。

ところが、「琉米文化センター図書館（英文名称）」の執務資料（英文タイプ、1968年1月11日付）は、その目的としてつぎの4項目をあげている。

- 米国に関する情報センター
- 米国の政策、方針の住民への広報
- USCAR（米国民政府）資料の効果的な普及
- 米国の相互理解政策の支持者の獲得

（この資料は那覇市立図書館で調査を許されたキャビネットの雑件ファイルの中にあった。前出の儀部司書長のメモにより、民政府の文化センター担当官、ドクトル・マニエル・向田の作成した文書であることがわかる）

『琉球資料』所蔵の「Draft（日付けなし、出所は「名護文化会館書類」とある。これも右と同性格の資料であろう）は、" Informational Capabilities of the Cultural Centers " の項のもとで次のように琉米文化会館性格、目的を述べている。

「文化センターは、宣伝活動の長い鎖の重要な一環をなし、民衆と直接接する領域の第1線にたっているという意味で、すぐれて戦略的なものである。」両資料の語ることはよく符合している。

先にあげた魅力的な活動は、占領目的を率直に表白するこれらの資料との関係でよく考えてみなければならない。－後略－

## ●図書館蔵書とその選択

成文化された選択基準と蔵書リストは、米国の図書館では必ず作成されている。琉米文化会館にも必ずあったはずである。資料選択の権限は、那覇の司書長の一手に掌握されていた。出先が本を選ぶことはまったくなかった。これは地方における本の入手難を配慮してのことだけ

とは思われない。図書館の生命である資料選択がそれだけ重視されていたのである。

こうして選ばれた本の一部は、今日でも後継施設の書架上にみることができる。しかしそれらはどこまでも痕跡以上のものではない。平良市文化センターでは、復帰後、引き継がれた本の中に沢山あった。“米国の偏った政策を示すもの”“反共主義的”なものを逐次除籍していったという証言があるからである。

また占領政策の段階に対応する変化もあったであろう。60年代後半以降、米国は琉米文化会館の経営に対する熱意を目に見えて失っていったようだと聞いた。

これらの実質をつきとめるには、各時期の選択方針や選択リスト、除籍リストの出現を待たなければならない。しかしそれ以前にやっておくべき仕事も少なくない。－後略－

### ●始まりと終わり

いうまでもないことながら、沖縄県民自体の図書館が占領期を通じて営々と活動を積み重ねてきたことを抜きにしては、琉米文化会館の問題も考えられない。沖縄県立中央図書館の再建は早くも1946年に提起され、米軍もこれを支持して1947年に開館するが、1951年に漸く本建築に移った直後に、米国はその経営を軍情報部に移し、看板を「那覇文化情報会館」（後に琉米文化会館）に変更してしまう。予算不足のため本建築にならなかった首里文館だけが民側に移り、これが、琉球政府立図書館となってゆくのである。（城間朝教「沖縄図書館の最後と復興」『沖縄図書館協会誌』2巻2号）

図書館における間接的支配から、米国直営への重点移行の背景等についてはここでは措くが、こうして始まった苦難の道程の中で、立法院図書館、琉球政府立医学図書館、琉大図書館等が相互に提携しつつ展開した活動は、幾多の制約下でありながら、ユニークである。軍・民政府からの不当な干渉には屈しなかったとも聞く。米国流図書館活動を批判的に摂取していったのだと思う。

27年間にわたる占領を通じて、琉米文化会館は、どのように住民と図書館人によって受け入れられ、あるいは拒否されたのか。この正負おり交えた体験は、その後の発展にどのような意味を持つものなのか、このことは、民族を分断した占領下において展開された“表現の自由”をめぐる壮大な取り組みの一環としても追求されなければならないだろう。－後略－

琉米文化会館の最後は惨憺たるものであった。宮古の場合、職員は全員が予告されないままに解雇された。復帰の前日、何名かは残れるかもしれぬという情報もあって、全員5時まで勤務し、庁舎の鍵を締めて出た。しかし一体鍵は誰にわたすのか。その時市役所の係長が一人近づいてきて言った。「その鍵をあずかります。」それが最後であったと言う。施設は大蔵省が買い取ったもので、1週間後には市へ譲渡されたが、そのまま半年間閉鎖され、草はぼうぼうと生い茂るに任された。市民の声が起こり、形ばかり開館されたが、不慣れた職員1人が配置されただけ。73年9月に市条例によって、「文化センター」となるが、ようやく旧琉米期のベテランが再雇用されて、実質的な仕事が始まった。その初仕事が前述のような琉米引継資料の整理であった。日米両国政府の無責任さはいうまでもないが、地元自治体にも全く用意のなかったことがわかる。はじめ悪く、終わりもまた悪かったのである。

## ②石垣市の琉米文化会館

石垣市の琉米文化会館は昭和27年4月にカルチャーセンターとして発足した。発足当初は木造の家をそれにあてていたが、昭和37年に鉄筋コンクリート2階建ての現在の建物が完成した。無料で使用できる大きな貸しホール、集会室、タイル張りの洋式水洗便所などが設備されていて、当時としてはたいへん近代的な建物であった。また、専属の日本人職員が15名ほどいて、種々の催しものの世話をしていたが、その半数が英語をしゃべることができたという。

この建物ができた当時は、島民は経済的にもまだ戦後の苦しい時代から脱却できておらず、皆苦しい生活をしてきた人が多かったので、立派な建物ができたといって感心したものであったという。

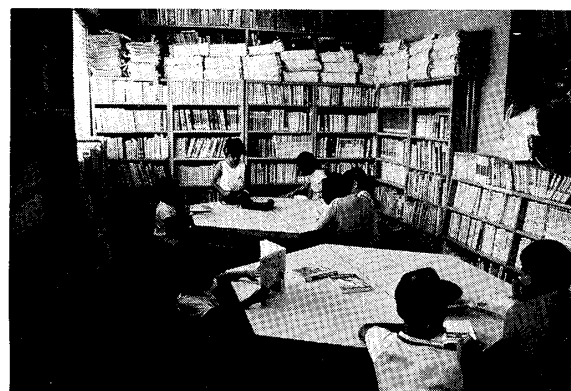
琉米文化会館の設立目的は、この会館を拠点にしてさまざまな文化的事業をおこなうことによって、親米思想を普及することであった。ギター、絵画、合唱、フォークダンスなどのサークル活動、映画会、産業まつり、のど自慢、ファッションショーなどもおこなっていたようである。映画会は文化会館で上映するだけでなく、移動映写会と称して各地区に出かけていってできるだけ多くの人々にみってもらうこともしていた。学校の運動場で映写会がよくおこなわれたという。このような事業が、復帰後に視聴覚ライブラリーとして発展していった。石垣市の視聴覚ライブラリーは昭和48年に設立され、教育映画や地元の文化記録を中心にして、300本ほどの16ミリ映画を収蔵している。

また広報誌の発行も活発におこなっていた。八重山では「守礼の光」という雑誌を発行して、アメリカ文化の紹介や郷土文化の発掘につとめている。また文化面だけではなく、マラリアの撲滅運動や、産業まつりをとおして地域の産業振興、地域を見直す運動、道路の整備など、地域振興につくした部分が少なくなかった。

このような文化会館が那覇、名護、中頭、島尻、宮古にあって、同様の活動をしていたという。しまの人々は先進的なアメリカ文化に触れ、また積極的な活動に目を見張る思いであった。本土復帰後の昭和47年に、米政府から市に移管され、石垣市の場合は文化会館として使用しているが、琉米文化会館当時の活動が、現在の文化活動に大きな影響を受けている。



石垣市文化会館（旧琉球文化会館）



文化会館の図書コーナー

## 第2章 大学公開講座の展開

### (1) 大学公開講座のあゆみ

第二次世界大戦後の昭和21年に国立、私立の大学、及び高等専門学校29校で文化講座が展開されているが、一般社会人を対象にして大学開放が積極的に押し進められて行くのは、昭和40年代に入ってからである。昭和44年に公開講座を開催した大学29校、講座数47であったものが、昭和47年には大学42校、講座数74に増加し、それにつれて受講者数も大きな伸びを示し、今日に至っている。折から高度経済成長期にあたり、国民の学歴の向上、経済的余裕、社会生活の多様化にともなって、社会人の学習要求が高度化、多様化していった時代であった。

大学教育の拡張はこのようなあゆみを続けてきたが、沖縄県内においてはこれとは異なった経過をたどってきた。もとより沖縄県は地理的条件、歴史的経過、それにともなった文化的要素等が他の都道府県とは異なっており、とくに第二次世界大戦の戦前、戦後の政治的、経済的諸条件の特殊性については、他の都道府県と同じ枠内で語ることはできない。大学開放に関しては、米軍政府の指導のもとで琉球大学が行ってきた「大学普及講座」がその代表的事例であり、これについては先に述べた。

教育基本法に規定されている「教育の目的は、あらゆる機会に、あらゆる場所において実施されなければならないし、国民はすべて等しく教育を受ける機会が与えられなければならない」という基本的な精神を、沖縄県における開かれた大学及び生涯学習活動という側面からみると、困難な点が少なくないことが容易に推測できる。このような環境のなかで、県内の国立、私立大学では「地域に根ざした大学」「地域に開かれた大学」というスローガンを掲げ、活発な公開講座が行われてきた。それが沖縄社会のなかでどのような役割をはたしているのか、また公開講座においてメディアの活用がどの程度行われているのか、大きな関心事であった。

学内で蓄積してきた研究成果を地域社会に還元し、また長い歴史をひきずっている地域社会から、大学人が学ぶことも少なくないはずである。その相互作用が大学と地域社会を活性化させ、その手段として種々のメディアが有効な役割を果たすことになる。それは従来の大学での教授法と異なるものがあり、教授法の改善、ひいては大学の将来像を考えていく上で意味のある作業であろう。

昭和60年度から放送教育開発センターが、放送による大学講座を企画、実施しているが、琉球大学においては昭和61年度からこれに参加し、沖縄本島ばかりでなく、ケーブルテレビを活用して宮古島、石垣島でもテレビとラジオの講座が開くことができるようになっている。

また平成3年度から琉球大学の図書館の一角に放送大学沖縄テレビ学習センターが誕生し、現在約700人の学生が生涯学習に熱心に取り組んでいる。数年後には放送大学の全国放送化にともなって、自宅や職場で学習できる体制が整う予定であり、それを待ち望んでいる人々も少なくない。沖縄県の地理的条件を考えると、放送による学習機会の提供は最も適した地域であることがわかるのであるが、このような新しい動きのなかで、沖縄県における開かれた大学の歴史と現状を把握しておくことが必要であると感じている。

ここでは主として琉球大学の普及講座、沖縄大学の土曜教養講座、沖縄国際大学の南島文化市民講座、沖縄キリスト教短期大学の大学公開講座をとりあげ、一般社会人に対して行ってき

た講座や授業を媒介として、大学と地域社会とのかかわりについて報告する。そして今後も、大学の重要な事業の一つになるであろう「開かれた大学」のあり方について考える。

## (2) 沖縄大学の公開講座

### 1. 土曜教養講座

#### ①土曜教養講座の目的と位置づけ

沖縄大学の土曜教養講座は昭和51年から始まっている。この年は1月に2回、翌52年に5回開催されているが、土曜教養講座として定着していくのは昭和53年からで、平成5年2月の段階で223回を数えている。この講座をはじめた目的について、運営委員会委員長である平良研一氏は『沖縄大学土曜教養講座200回のあゆみ』のなかで次のように述べている。

「沖縄大学における市民大学の出発は、復帰を境に打ち出されてきた私立大学統合政策に対し反対闘争をしたために、「廃校処分」され、そしてその後の「存続闘争」という苦しい経過をたどってどうにか存続をかちとり、「新生沖大」としての再出発をはかっていく中で、その理念の具体化の一つとして始められたものである。それは即ち、「地域に根ざし、地域に学び、地域とともに生きる開かれた大学」をめざす大学としての役割・使命の一環として行われてきたものと言うことができる。」

沖縄大学は沖縄県で最初の私立大学として昭和33年に設立された。設立当初は短期大学のみであったが、昭和36年に四年制大学としての沖縄大学が誕生する。「地域に根ざし、地域に学び、地域とともに 生きる開かれた大学」をめざしている沖縄大学の特色は、四年制一貫ゼミ、本土派遣留学制度、海外派遣留学制度であり、これらの制度と同等の扱いで市民大学と公開講座が位置づけられている。土曜教養講座と琉球弧縦断移動市民大学は市民大学活動の一環として行われているものであり、公開講座は、教師のための日本語・日本文学基礎講座、沖大ジャーナリズム講座が開催されている。

#### ②沖縄大学土曜教養講座のあゆみ

土曜教養講座のあゆみについては、その活動経過と内容は逐次マスコミによって報道されてきた。地元紙である琉球新報、沖縄タイムス、宮古新報、日刊宮古、宮古毎日、八重山日報、八重山毎日、南海日日新聞、大島新聞等に掲載された講座関係の記事は、新聞紙一面に掲載されてきた大きな記事から小さなコラムまで土曜教養講座は105本、琉球弧縦断移動市民大学は156本にのぼっている。ここでは新聞による報道をもとにして、土曜教養講座のあゆみを簡単にみていきたい。企画当初からこの事業に関係してきた沖縄大学の関係者の話、公開講座の内容や日程、会場の雰囲気、受講者の意見、今後の方向性など、興味深い記事が少なくない。

#### ●土曜教養講座を開設・あすから一般市民を対象に（沖縄タイムス1976.1.9）

沖縄大学（新屋敷幸繁学長）が、土曜教養講座を10日から開始する。これは在學生に充実した教育を行うだけでなく、大学進学希望者をはじめ地域社会に生涯教育の場を提供することによって新しい大学像を考えようとするもので、土曜教養講座のほかに公開講座、移動市民大学などが企画されている。土曜教養講座の対象は、高校上級生、大学教養課程、在學生、小、中、

高教員、一般市民、講演料は無料。

10日は、午後2時から4時までの間、同大401教室で「歴史の考え方」をテーマに安良城盛昭同大教授、17日は「法律学とは何か」とテーマに月岡利男同大教授が2時から4時まで401教室で行う。なお、5月から6月、10月から11月にかけて「経済学の役割」（狩俣真彦同大教授）、「英文学の話」宮内保七同大教授）、「科学史」大嶺哲雄同大教授）、「沖縄戦後史論」（新崎盛暉同大教授）、「障害児教育の諸問題」（宇座徳光同大教授）などを予定している。

●もっと広げたい沖大市民講座（琉球新報1977.12.7）

「地域に根ざした大学」を目指して沖縄大学が企画している市民大学・土曜講座も定着しつつあるようだ。さる3日4午後1時から玉野井芳郎東大教授が「地域主義の可能性」と題して講演した。同講演には学生をはじめ公務員や会社勤めの一般参加者ら約80人が沖大403教室に集まった。一般参加者からは「講演の内容が地域に密着していてよかったが、講演者の紹介や講演のレジュメを用意してほしい」「土曜講座は地域的な問題を考えようというものだから有料でやってもいいと思う」などの感想が聞かれた。復帰時点の沖大存続闘争のなかから生み出された市民大学講座だけに、大学側の精神が生かされた企画。「これまでの講座は大学内でやってきたが、宮古や八重山あたりまで幅を広げることも考えなければならぬだろう」と関係者は話している。また、一般の参加者を主体にするという主旨からチラシなど宣伝活動にもっと力を入れることも必要だという指摘もあった。3日の玉野井教授の講演内容はこれまでの“地域復権”という立場も経済社会学的な視点から実証するものだったが、対本土比較に関心の強い沖縄の意識を反映してか、ある会社員は「地域に密着した経済などというが、本土との経済格差をどのように考えているか、それをどのようにして解消するかということが講演の内容からわからなかった」と感想を話していた。いずれにしろ沖大の市民大学講座のテーマが関心を持たれていることは確かのようなのだ。

●100回を超した沖大土曜教養講座（琉球新報1984.11.10）

土曜講座が100回を迎えた。第1回が1978年10月だったからちょうど満6年になる。

ところで、10月19日の本誌の記事によると、土曜講座は76年に始まったことになっている。これも間違いではない。実はこのころ新しい大学像を求めて模索が始まったのであり、その中から市民大学構想が生まれた。74年には公開講座、76年には土曜教養講座、さらにこれを大学のない地域にまで広げようと、石垣市、平良市において小規模な移動市民大学が開催されている。

今日の市民大学の原型とも言うべきものだが、まだ継続的、試行錯誤的なものだった。こうした試みは、その後一時中断せざるを得なくなったが、78年9月新生沖縄大学のスタートとともに再会され、「前史」の経験をふまえて本格的な市民大学講座が開始されることになる。再開土曜教養講座の第1回目は、10月28日の「戦後改革の評価」、講師は遠山茂樹横浜国立大学教授。11月には名護市と共催で5日間わたる「なご移動市民大学」を開催。以後土曜教養講座は毎月1回のペースで順調に回を重ね、移動市民大学も、石垣市、平良市は今年で5回目、奄美は3回目を数える。

さて100回目の土曜教養講座には、日本テレビディレクターの森口裕さんをお招きした。テーマは「最後の沖縄特派員ー私は沖縄に何をみたか」。森口さんが撮った「乾いた沖縄」、「ひめゆり戦士」、「海は哭いている」の3本のビデオを間にはさみながら、話しはすすめられたが、途中から森口さんの「泡盛を飲みながら語り合いたい」という提案で、会場にはコップ酒が配られた。土曜講座の歴史で、泡盛二升抱えて登壇したのは森口さんがはじめてである。そのせいもあって会場からの発言は活発になりそうな気配もあったが、すでに3時間をオーバーし、残念だが途中で打ち切らざるを得なかった。

土曜教養講座の講師には、本学教員だけでなく、学外のいろいろな方にも登場していただいている。テーマも沖縄の歴史、文化、経済などを中心に、幅広く選ぶようにしている。聴講者は毎回平均70名というところか。ときには200名近くも集まり、教室からあふれることもある。少ないときで2、30名、こんなときは発言しやすいのか、質疑応答が非常に活発だったりする。

聴講者の大部分是那覇市民だが、勤務を終えて名護から車で駆けつけた女性もいたし、401回の「ふうしんによる難聴児の教育」(名嘉山英子)では聴力障害児をあずかる国頭村奥の幼稚園の先生がはるばるかけつけ、私たちを驚かせた。またほとんど毎回出席という方も数名いて、講座の運営等についても貴重な意見を出してくれるのがありがたい。

82回の「食生活のゆがみを正す」は、那覇市の消費者モニターをはじめ、熱心な方が大勢参加し、活気のある講座だった。このとき講師の高橋暁正さんから雑誌「葉の広場」を創刊号から寄贈していただいたが、これをもとに今後図書館に消費者問題コーナーを設け、市民も活用できるようにしたいと考えている。また森口さんの講座の際、映像ライブラリーをとという話もでたので、今後これも検討していきたいと思う。

那覇市の全面的な協力もあって、運営は初期のころに比べ、うんと楽になった。新学期からは、新校舎で開催することになるが、視聴覚機器もそろうので、よりバラエティに飛んだ講座を提供できると思う。

市民大学は、私たちにとっても地域に関心を持ち、地域の課題に目を向けるいい機会となっており、市民とともに学ぶこの講座は今後もずっと続けていきたいと思う。101回は高里鈴代さん、102回は牧野浩隆さん、103回目は柳沢文徳さんを予定している。(山門健一さん・沖大市民大学運営委員長・助教授)

#### ●200回目を迎える沖大土曜教養講座(琉球新報1991. 6. 10)

沖縄大学(佐久川政一学長)の土曜教養講座が今年22日、200回を迎える。那覇市の協力を得て1978年10月にスタート、毎月第2、第4土曜日午後2時から四時まで、沖縄の歴史、文化のほか、国際時事などタイムリーなテーマを設定し、受講者の人気を博している。大学と地域を結ぶ講座として評価も高い。198回までに11,851人が受講。1回あたりの平均受講者は60人、最高の受講者は320人だ。夏休みや入試シーズンを除き、年間15回から18回のペースで開かれている。

ー中略ー 講師もジャーナリストから大学、民間の研究者まで多岐にわたっている。受講料は一般が300円で、学生は無料。低料金にもかかわらず、新聞切り抜きなど抱負な資料を作成し、開講前に受講者に配布している。講座は2時間で、前半は講師による講演、後半は受講者

を交えて質疑応答。“参加型”の講座といえそうだ。

沖縄大学の下地和宏広報室長は「市民に大学を開放していくことは、大学の使命だと考えている。ここまで続けられたのは受講者の一人ひとりの熱意だと思う。また、貴重な時間をさいて講師を引き受けてくれる先生たちに感謝したい。学生たちにももっと参加してほしい」と話した。

23日の「慰霊の日」をひかえた8日は、篠原武夫琉球大学教授（沖縄戦強制疎開マラリア犠牲者援護会会長）を迎えて、「もう一つの沖縄戦—八重山の戦争マラリア問題」をテーマ299回目の講座が開かれた。200回目の記念講座は「沖縄、今を問い、可能性を探る」（仮題）シンポジウム・パネリストは岡本恵徳史、宮城弘岩氏、照屋輝一氏。コーディネーターは山門健一氏。

岡本恵徳史（琉球大学教授）

宮城弘岩氏（沖縄県工業連合会副会長）

照屋輝一氏（沖縄県工業試験場研究主幹）

山門健一氏（前出）

### ③土曜教養講座の内容

この講座の内容を短い文章でまとめるのはたいへんむずかしい。16年間、222回という歴史の積み重ねがあり、そのテーマ、内容も多様であるからである。講座のテーマは主として講師の先生方が決めているようであるが、ゆるやかな約束ごととして、沖縄に関するもの、という取り決めがなされているという。このゆるやかな取り決めによって222回のテーマをいくつかのカテゴリーにまとめてみると次のようになる。なお年度別講座のテーマ、担当講師、受講者数等に関しては、巻末資料として掲載した。

- |               |      |
|---------------|------|
| A. 一般教養       | (18) |
| B. 国際問題、国際文化  | (37) |
| C. 政治問題       | (6)  |
| D. 経営・経済問題    | (17) |
| E. 法律問題       | (5)  |
| F. 教育問題・子供    | (22) |
| G. 健康・医療・福祉問題 | (7)  |
| H. 地域開発・地域特性  | (26) |
| I. 沖縄の歴史と文化   | (41) |
| J. 生活・公害      | (9)  |
| K. 沖縄の自然・地理   | (9)  |
| L. 沖縄の産業      | (8)  |
| M. 女性史、女性問題   | (6)  |
| N. 沖縄戦        | (7)  |
| O. 科学技術       | (3)  |

この分類は的を得ていないかも知れないし、この分類の中に無理矢理押し込めてしまったテ



ーマもある。しかしながら当初関係者が意図していたように、沖縄に関する問題が多く講義され、討論されていることがわかる。なかでも沖縄の歴史と文化、国際問題・国際文化に関してのテーマが飛び抜けている。前者は沖縄の近世史、近・現代史、伝統工芸、民俗、芸能など多岐にわたる分野を網羅したためであり、この分野は沖縄の人々にとってとくに関心が深く、日々の生活にもかかわりの深いテーマである。

また後者の国際問題・国際文化という分野には、視野の広い国際問題や海外旅行印象記なども含まれているが、「フィリピンと沖縄」「インドネシア・沖縄・日本」「台湾からみた沖縄と日本の関係」「北京からみる琉球史」「中国からみた日本・沖縄」など、海外と沖縄との関係を強く意識したテーマが少なくない。古くから沖縄県は東南アジア、東アジアとの関係が強く、大きな視野にたつて沖縄を診ていくということが、抵抗なく受け入れられているためであろう。

沖縄の地域特性・地域開発に関するテーマも関心が深く、政治経済、経営問題においても「沖縄経済の地域特性」「沖縄の観光政策への提言」「沖縄の内発的発展と環境保全」など沖縄の地域、及び開発と具体的にからんでいる例が少なくない。土曜教養講座では223回の講座のうち13回のシンポジウムを開いているが、そのうち5回が地域問題、あるいは地域開発問題を取り上げており、主催者と受講者の関心がいかに深いかが推察できる。

教育問題、子供の問題を扱った講座も多くを数えている。教育問題については「沖縄の方言と国語教育」「沖縄の教育問題—現代からの問題提起」「シンポジウム沖縄における英語教育」といった具体的な問題を扱ったテーマと、「教育の可能性を求めて」「教科書問題を考える」「教育の根底にあるもの」「これからの教育」など、教育の根本的問題を扱ったテーマとに分かれる。また健康・医療・福祉問題、女性史・女性問題、生活・公害、沖縄戦等のテーマに関しては回数こそ少ないが、講座関係者にとっても受講者にとっても重要な課題と考えており、今後も追い続けていく意志を表明している。なお、沖縄戦に関しては本来沖縄の歴史に含めるべきテーマであるが、ここでは独立させた。

#### ④担当講師と受講者

土曜教養講座にはさまざまな講師が講演やシンポジウムに参加している。沖縄県関係者では沖縄大学の教員を中心にして、琉球大学、沖縄国際大学、沖縄キリスト教短期大学の教官、教員、高等学校の教員等が担当し、農林水産業、経済・経営問題、地域史、伝統工芸、医療等の専門的な突っ込んだ問題に関しては、県農業試験場、県工業試験場、県工業連合会、地域科学研究所、県史料編纂所、地域史協議会、県立博物館、伝統工芸指導所、病院、診療所等から講師を招いて、直面している問題を深く掘り下げていく試みをしている。

沖縄県関係の講師のほかに、県外や海外から訪れた講師も少なくなく、約3割の講師が講座を担当している。講座関係者は予算的な問題もあり、県外からの講師依頼はたいへん苦勞しているようである。事務局の話では、県内の大学に集中講義にこられる大学の先生にお願いしたり、別の仕事で沖縄を訪れた有名人や学識経験者の情報をいち早くキャッチし、忙しい仕事の合間を縫って講演をお願いすることもあるという。しかしながら、その苦勞は大変なもので、次のような新聞記事が載っている。受講者数については参考資料(7)で示した。

●講師やーいの沖大土曜講師（琉球新報1983. 9. 15）

「講師はいませんか」と会う人ごとに声をかけるのが、75回を数えた沖縄大学土曜教養講座の運営委員長を務める山門健一助教授。さる10日土曜日の西銘健三・県立伊是名診療所所長を講師に招いて聞いた「離島辺地再生への道への試み」でちょうど75回を数え、この種の事業としては110回を迎える博物館文化講座と並んで、最多記録を更新中。毎月第二、第四の土曜日に開かれているので、回数ではやがて博物館文化講座を追い越す勢い。

講師は、そのつど本を出版した人や市民運動をしている人、沖縄を訪問している人、そして沖大の教職員などを動員してさまざまなテーマで開講しているが、誰でもいいという性格のものではなく、講師探しはやはり頭痛の種のひとつ。

「沖大は人使いの荒いので知られている。本土からの講師などは日程がびっしり詰まっている中で、無理してやってもらっている。次回は、一坪反戦運動、芭蕉布づくりなどを考えている。大学行政もやってみるといろいろある。100回目には何か企画したい」と洗剤公害を訴える活動家もしばらくは二足の草鞋。26日からは一週間奄美で移動市民大学を開く。

## 2. 琉球弧縦断移動市民大学

沖縄大学の主催、地域の教育委員会の後援、そして沖大同窓会の地域支部が協力するという形で行っている琉球弧縦断移動市民大学は、1976年（昭和51年）に始まっている。鹿児島県奄美諸島から、沖縄県与那国島まで約1千キロにおよぶ琉球弧（西南諸島）を対象とした移動市民大学講座である。この年の2月7日に「大学と社会」「沖縄の歴史」「暮らしと法律」の3講座が宮古島の平良市市民会館で開かれ、よく8日には同じテーマで石垣市の八重山教育会館で開かれている。

その模様、また「移動市民大学」についての地元の受けとめかた等を宮古新報と日刊宮古は次のように伝えている。なお琉球弧縦断移動市民大学の開設場所、日時、テーマ等開設状況については資料(2)で示した。

●移動市民大学を開催 沖大、二月七日市民会館で（宮古新報1976. 1. 18）

大学の現状を広く市民の中に開放しようと、私立沖縄大学（新屋敷幸繁学長）では新しい大学像の試みとして、二月七日に平良市市民会館で第一回沖縄大学移動市民講座を開催する。

今の大学が学内での教育、研究に閉じ込め、市民とは無関係なものになりがちのため、「大学が市民の中へ、市民の中から大学へ」との構想が打ち出されている。沖大は復帰後文部省による廃校措置に対して学内外から沖大存続の闘争を経験してきただけに、「地域社会に貢献する大学」を理念に総合的な市民大学の構想を練っている。

思案の市民大学の基本理念は、大学内部の研究成果、教育内容を地域社会に広く還元させるということは当然としても「地域社会における市民の実践から学ぶ」ことをあげており、固定化されたいまの大学制度からの脱皮を目指しているのが注目される。

後援は①大学と社会「これからの大学のあり方はどのようなものでなければならないか。地域社会と大学の関係について考える」講師・新崎盛輝沖大教授、講師の重要著書は『沖縄問題20年』（共著、岩波書店）、『沖縄の歩いた道』（ポプラ社）、『戦後沖縄史』（日本評論社その他）。②沖縄の歴史「日本経済史の研究者としての立場から、沖縄の歴史を一般市民にわかりや

すいかたちでとらえなおしてみる」講師・安良城盛昭沖大教授、講師の重要著書『幕薩体制社会の成立と構造』（お茶の水書房）、『歴史における理論と実証』（お茶の水書房）、『太閤検地と石高制』（日本放送出版協会）その他。③暮らしと法律「一般市民には縁遠く感じられることの多い法律を身近かな暮らしの中の問題と結びつけて考えてみる」講師・月岡利男沖大教授、講師の重要著書『不動産登録における公信力説の形成と展望①、②』『建物の表示に関する登記』（共著、青林所員）『不動産物権変動と対抗問題』その他。

●移動市民大学の開講に思う（日刊宮古1982.10.27）

25日から、第3回沖縄大学平良市移動市民大学が始まっている。—中略— 25日の開講のあいさつで、「移動市民大学」構想の生みの親ともいわれているどう大学の崎盛暉教授は、奄美大島から与那国島までの約一千キロの海域には50をこえる有人島があるが、高校のある島は九つ、大学のある島はただ一つである。沖大は地域に根ざす大学を打ち出しているの、せめて高校のある島では、ぜひ「移動大学」を実現したいと述べ、島社会に対応する大学のあり方を模索したいとしている。

いわゆる「琉球弧文化圏」を縦断するかたちで「移動大学」を実現したいとしているのである。この「地域に根ざし、地域に学び、地域に奉仕する開かれた大学」構想は、大学本校では学外の市民に公開する公開講座は土曜日、夏休み期間などに開き、「移動市民大学」は51年から宮古、八重山などで、53年には沖縄北部の名護市で開き、そしてことし九月には奄美大島のな名瀬市、笠利、和泊町で開講している。10月には宮古、八重山で第3回の5日間にわたる「市民大学」を公開しているのである。

島社会に住むわれわれは、その地理的条件、経済的条件にはばまれて、文化的な側面で実に恵まれない状況下にある。生涯教育などといわれても、中央や地方都市とのそれとは、その享受内容の点であまりにも恵まれていない。それだけに、沖大の「移動大学」の開催はわれわれにとって有意義なものである。

講義、講習の内容が聴講するものにとって、学問することはのきっかけ、知識欲求への目覚め、ものの見方、考え方への端緒をきりひらいたのだとすれば、これほど意義深いことはまたとない。「いどうだいがく」は住民のわれわれが望むのであれば、その機会、開講時間をさらに充実したいと申し出ている。この企画の実施には、経済的負担がかかることでもある。宮古の市町村が経費の面で何らかの助成措置を講じ、今後ますます「大学」の開講の機会をつくってほしいと、多くの市民は望んでいる。

資料(1) 沖縄大学土曜教養講座開設状況

資料(2) 琉球孤縦断移動市民講座開設状況（平良市）

資料(3) 琉球孤縦断移動市民講座開設状況（石垣市）

資料(4) 琉球孤縦断移動市民講座開設状況（名瀬市）

資料(5) 琉球孤縦断移動市民講座開設状況（笠利市）

資料(6) 琉球孤縦断移動市民講座開設状況（和泊町）

資料(7) 土曜教養講座受講者状況

資料(1) 沖縄大学土曜教養講座開設状況

1976年

回数	開講日	テーマ	講師
第1回	1/10	歴史の考え方	安良城 盛昭 沖縄大学教授
第2回	1/17	法律学とは何か	月岡 利男 沖縄大学教授

1977年

回数	開講日	テーマ	講師
第1回			
第2回	10/29	減びゆく沖縄の自然	大嶺 哲雄 沖縄大学教授
第3回	11/26	変わっていく教育の常識	玉野井 真太郎 沖縄大学副理事長
第4回	12/3	地域主義の可能性	玉野井 芳郎 東京大学教授
第5回	12/18	国家権力とマスコミ	大城 光徳 沖縄県マスコミ労協議長

(注・沖縄タイムス、琉球新報より作成)

- ①土曜教養講座は1978年10月より原則として毎月第2、第4土曜日に定期的の開講され、今日に至る。但し、夏季および春季休暇中は閉講である。
- ②第1回土曜教養講座は1978年10月14日に安良城盛昭学長の「沖縄の地域的特性について日本の中の沖縄の地位-」が予定されていたが、台風接近のため中止のやむなきに至ったので、第2回目に予定していた10月28日の遠山茂樹氏（横浜市立大学教授）の「戦後改革の評価」が第1回目の講座となった。

## 1978年度

回数	開講日	テ ー マ	講 師
第1回	1978年 10/28	戦後改革の評価	遠山 茂樹 横浜市立大教授
第2回	11/11	プラトンのエロス —哲学へのいざない—	永野 善治 沖縄大学副学長
第3回	11/25	沖縄水産業の歴史的背景とその将来	上田 不二夫 沖縄水産高校教諭
第4回	12/9	沖縄の地域的特性について —日本の中での沖縄の地位—	安良城 盛昭 沖縄大学学長
第5回	12/23	地域主義からみた沖縄	杉岡 碩夫 経済評論家
第6回	1979年 1/13	くらしの中の公害を考える	山門 健一 沖縄大学助教授
第7回	1/27	沖縄の地下資源について	木崎 甲子郎 琉球大学教授
第8回	2/10	日本民衆史の問題点	色川 大吉 東京経済大教授
第9回	2/24	現代史からみた奄美と沖縄	新崎 盛暉 沖縄大学助教授

## 1979年度

回数	開講日	テ ー マ	講 師
第10回	1979年 4/14	女性史と沖縄	もろさわ ようこ 評論家
第11回	4/28	紅型の美	渡名喜 明 沖縄県立博物館学芸員
第12回	5/12	世替りの時代と民衆 —近代沖縄民衆思想から—	新川 明 沖縄タイムス「新沖縄文 学」編集長
第13回	5/26	沖縄の県民性を考える	国吉 和子 沖縄大学助教授
第14回	6/9	戦後沖縄の文学	岡本 恵 徳琉球大学助教授
第15回	9/22	沖縄の方言と国語教育	上村 幸雄 琉球大学教授

回数	開講日	テ　　マ	講　　師
第16回	10/13	泡盛の話	照屋 比呂子 沖縄県工業試験場 研究員
第17回	10/27	ソテツ地獄の実態	安良城 盛昭 沖縄大学学長
第18回	11/24	島の経済学	中村 文夫 長野大学教授
第19回	12/ 8	西表炭坑概史 —沖縄近代史の一断面—	三木 健 ジャーナリスト
第20回	12/22	沖縄開発の現状と課題  日本の防衛政策と沖縄	宮本 憲一 大阪市立大学教授 福島 新吾 専修大学教授
第21回	1980年 1/12	シンポジウム「河上肇と伊波普猷」 問題提起者 安良城 盛昭 (沖縄大学学長) コメンテーター 比屋根 照夫 (琉球大学助教授) 高良 倉吉 (沖縄県史料編集所専門員) 司 会 我部 政男 (琉球大学助教授)	
第22回	1980年 1/26	沖縄の農薬と土の話	大城 喜信 沖縄県農薬試験場土壌保 全研究室長
第23回	2/ 9	講演ウリミバエの話 映画「ウリミバエ根絶の記録」—久米島	照屋 匡 沖縄県農業試験場研究員

## 1980年度

回数	開講日	テ　　マ	講　　師
第24回	4/26	琉球古文書とその読み方	島尻 勝太郎 沖縄高校校長
第25回	5/10	沖縄・生活者の思想	幸喜 良秀 劇団「創造」演出家
第26回	5/24	沖縄経済の地域的特性 —失業問題を中心に—	真栄城 守定 沖縄地域科学研究所 常務理事

回数	開講日	テ ー マ	講 師
第27回	6/14	ユタと精神障害	田頭 政三郎 たがみ病院副院長 精神科医
第28回	6/28	シンポジウム「沖縄の振興開発を考える」 司 会：狩俣 真彦（沖縄大学教授） レポーター：「土壌と水からみた振興開発の問題点」 大井 浩太郎（沖縄大学教授） 「第1次振計と離島振興の問題点と課題」 高良 有政（沖縄大学助教授） 「中城湾開発構想の問題点」 阿部 亮一（沖縄大学助教授） コメンテーター：下地 玄栄（沖縄大学助教授） 豊岡 隆（琉球大学助教授） 佐久川 政一（沖縄大学教授） 総 括：池田 博俊（沖縄大学助教授）	
第29回	7/5	これからの世界と日本	斉藤 孝 学習院大学教授
第30回	9/27	沖縄の観光政策への提言	石川 政秀 沖縄大学助教授
第31回	10/25	フィリピンと沖縄	阿部 亮一 沖縄大学助教授
第32回	11/8	スリランカを訪ねて	玉野井 芳郎 沖縄国際大学教授
第33回	11/22	山之口獺の詩について	仲程 昌 琉球大学助教授
第34回	12/13	80年代の公害と社会状況の見直し	宇井 純 東京大学助手
第35回	1981年 1/10	シンポジウム「理想の街づくりと刑務所跡地公園化運動」 「街に緑と公園をつくる市民の会」 真喜志 好一「都市空間と建築化」 金城 幸仁「街づくりと市民運動」 末吉 栄三「都市空間のかたち」	
第36回	1/24	自主管理が創り出したもの	阿久根 良正 山科鉄工労組委員長
第37回	2/14	沖縄の教育について —現場からの問題提起—	浜元 朝雄 石川高校教諭

## 1981年度

回数	開講日	テ　　マ	講　　師
第38回	5/9	教育の可能性を求めて	安里 盛市 沖縄大学嘱託講師 元久茂地小学校長
第39回	5/23	教科書問題を考える	山吉 剛 沖縄大学講師
第40回	6/13	モンテッソーリの幼児教育に学ぶ	永野 善治 沖縄大学学長
特別講座	6/20	フィリピンの言語と 文化（風俗）について	福田 崇
第41回	6/27	ふうしんによる難聴児の教育について —障害児教育の可能性を探る—	名嘉山 英子 沖縄高校教諭
第42回	9/12	外人宣教師のとらえる沖縄の宗教性	ラサール・パーソンズ 首里カトリック教会 主任神父
第43回	9/26	首里王府と宮古・八重山	高良 倉吉 沖縄史料編纂所専門員
第44回	10/17	戦後沖縄の軍用地問題 —反戦地主調査を中心に—	新崎 盛暉 沖縄大学教授
第45回	11/14	憲法改正と教科書問題	氷井 憲一 法政大学教授
第46回	11/28	アジアにおける日本の役割 —平和に貢献する道を求めて—	山田 経三 上智大学助教授
第47回	12/12	ブータン王国の印象	玉野井 芳郎 沖縄国際大学教授
第48回	12/26	沖縄の内発的発展と環境保全	宮本 憲一 大阪市立大教授
第49回	1982年 1/9	1980年代の国際経済と日本の対応	伊志嶺 朝好 カリフォルニア州立大学 教授



回数	開講日	テ ー マ	講 師
第50回	2/13	50回記念シンポジウム「沖縄における英語教育」 司会：永野 善治（沖縄大学学長） 発言者：「現行制度下における中等教育の問題点」 永野 善治（沖縄大学学長） 「中等教育における英語教育への提言」 砂川 勝信（琉球大学教授） 「高校からの問題提起」 久保田 富雄（小禄高校教諭） 「大学における英語教育の問題点」 仲村 芳信（沖縄大学講師） 「英語を母国語としない者に対する英語教育」 リンダ・ドウピン（沖縄大学講師）	

## 1982年度

回数	開講日	テ ー マ	講 師
第51回	1982年 4/10	学歴社会のゆくえ	尾形 憲 法政大学教授
第52回	4/24	朝鮮民主主義人民共和国を訪ねて	新崎 盛暉 沖縄大学教授
第53回	5/8	復帰10年、地方行政の変遷	平良 亀之助 地方公務員
第54回	5/22	土壌動物と私達の生活	大嶺 哲雄 沖縄大学教授
第55回	6/12	沖縄戦を考える	大城 将保 沖縄史料編集所専門員
第56回	6/26	沖縄の風土と健康 —生活とは何か—	苗村 利康 厚生省那覇検疫所長 医師
第57回	7/3	改正商法とディスクロージャーの問題点	武田 隆二 神戸大学教授 経営学博士
第58回	9/11	『沖縄の染織の文化シリーズ』 文化としての手仕事 —沖縄の伝統的そめおり—	小橋川 順 沖縄県伝統工芸指導所染 織課長
第59回	9/25	『沖縄の染織の文化シリーズ』 紅型の島々の織物 —つくり方と製品—	伊元 幸春 川前 和香子 沖縄県伝統工芸指導所 研究員

回数	開講日	テ　　ー　　マ	講　　師
第60回	10/9	【沖縄の染織の文化シリーズ】 そめおりの現地講義 —生産現場における説明—	金城 純子 座間味 律子 沖縄県伝統工芸指導所 研究員
第61回	10/23	女性史を通して考える	もろさわ ようこ 女性史研究家
第62回	11/13	教科書問題を考える —沖縄戦と援護法の思想—	新崎 盛暉 沖縄大学教授
第63回	11/27	沖縄の証券と金融	金城 弘征 太宝証券社長 琉球銀行取締役
第64回	12/11	地域史の現状と課題	田名 真之 沖縄県地域史協議会 代表
第65回	12/25	平和と教育	日高 六郎 京都精華大学教授
第66回	1983年 1/22	中小企業の経営問題 —国際会議に出席して—	伊波 盛伸 沖縄大学助教授
第67回	2/12	ふたつの社会主義 —ユーゴスラヴィアの自主管理と ポーランドの計画経済—	岩田 昌征 北海道大学スラヴ研究所 教授・経済学博士

## 1983年度

回数	開講日	テ　　ー　　マ	講　　師
第68回	1983年 4/9	教育の根底にあるもの	林 竹二 元宮城教育大学長
第69回	4/23	ハブと人間	吉田 朝啓 県公害衛生研究所所長 医学博士
第70回	5/14	古生物からみた琉球列島 —最近の発掘成果から—	大城 逸郎 沖縄県立博物館 主任学芸員
第71回	5/28	沖縄における障害者の 労働保障と共同作業所	比嘉 干鶴子 若竹作業所指導員 谷口 正厚 沖縄大学助教授

回数	開講日	テ ー マ	講 師
第72回	6/11	建築・環境断章	洲鎌 朝夫 匠設計代表
第73回	6/25	沖縄の精神医療	島 成郎 玉木病院医師
第74回	8/27	平和憲法下の危機と納税者	北野 弘久 日本大学教授
第75回	9/10	龍島正池再生への試み —伊是名村健康開発会紙のねらい—	西銘 圭蔵 県立伊是名診療所所長
第76回	9/24	沖縄（人）と台湾植民地支配	又吉 盛清 歴史研究家
第77回	10/8	城（グスク）について —近年のグスク調査の成果を中心に—	当間 嗣一 沖縄県教育庁文化課
第78回	10/22	サンゴ礁は今…	吉嶺 全二 水中カメラマン
第79回	11/5	情報化社会と企業会計 —会計情報の意義と役割—	若杉 明 横浜国立大学教授 経営学博士
第80回	1983年 11/19	芭蕉紙の話紙文化の特質について	勝 公彦 工芸家
第81回	11/28	食生活のゆがみを正す	高橋 暁正 和光大学講師
第82回	12/10	彫刻を語る —地域における彫刻—	能勢 孝二郎 彫刻家
第83回	12/10	世界人権宣言35周年記念講演会 共催・沖縄人権協会 「世界人権宣言の意義」 金城 睦（弁護士・人権協会事務局長） 「米軍占領下の言論の自由」 宮城 悦二郎（琉球大学教授）	
第84回	12/17	琉球列島の動物の現状とこれから	安間 繁樹 世界野性生物基金 国士館大学講師
第85回	12/24	ベンチャー・ビジネスの時代到来 —ベンチャー・ビジネスの実状と成長 条件	後藤 幸男 神戸商科大学教授 経営学博士
第86回	1984年 1/28	沖縄の新しい国際環境	安座間 喜松 国際政治学者
第87回	2/25	沖縄の仏教 —日秀上人の事蹟を中心に—	島尻 勝太郎 沖縄大学教授

1984年度

回数	開講日	テ　　マ	講　　師
第88回	1984年 4/14	玉城 朝薫生誕300年記念講座 『沖縄芸能入門シリーズ』 「組踊の世界」	当間 一郎 芸能研究家
第89回	4/21	『沖縄芸能入門シリーズ』 明治の演劇	宜保 栄治郎 芸能研究家
第90回	4/28	『沖縄芸能入門シリーズ』 ウチナー芝居の心	北島 角子 俳 優
第91回	5/12	島の地形と開発 I —サンゴ礁—	目崎 茂和 琉球大学助教授
第92回	5/26	島の地形と開発 II —山地などの土地—	目崎 茂和 琉球大学助教授
第93回	6/2	日本史の原点として沖縄史	牧瀬 恒二 「沖縄事情」主幹
第94回	6/9	平和教育をめぐる問題	平良 研一 沖縄大学教授
第95回	6/30	狭山事件と再審	佐々木 哲蔵 弁護士
第96回	7/14	インドシナ・韓国・沖縄 —運命のトライアングル—	井川 一久 朝日新聞編集委員
第97回	9/8	近世の「琉球農書」と農薬 —亜熱帯沖縄農業の原点をさぐる—	福仲 憲 琉球大学助教授
第98回	9/22	明・清時代における中国と琉球	曹 永和 台湾大学教授
第99回	10/13	琉球漢詩の世界	上里 賢一 琉球大学助教授
第100回	10/27	最後の“沖縄特派員” —私は沖縄に何を見たか—	森口 豁 日本テレビディレクター
第101回	11/10	売春問題からみた女性解放	高里 鈴代 那覇市婦人相談員 アジアの女たちの会
第102回	11/17	戦後史と沖縄経済	牧野 浩隆 琉球銀行首里支店長
第103回	12/1	健康な生活を続けるため	柳沢 文徳 東京医科歯科大学名誉 教授
第104回	12/22	琉球王国時代の道について —道路の種別・休泊施設—	山本 弘文 法政大学教授
第105回	1985年 1/12	近世沖縄の身分制と家譜	田名 真之 那覇市史編集室

## 1985年度

回数	開講日	テ　　マ	講　　師
第106回	1985年 4/6	講演「今教育に問われているもの」 大田 堯（日本教育学会会長） 室内音楽 ROK室内合奏団（指揮 糸数 武博） 1. ヴィヴァルディ“四季”から“春” 2. 浜辺の歌 他	
第107回	4/27	世界のウチナーンチュ	山根 安昇 琉球新報社会部副部長
第108回	5/11	建築家が見た中国の少数民族 —貴州省苗施族・の住まいと生活	真喜志 好一 建築家
第109回	5/25	玉城TCM、一連の企業倒産を考える	宮城 弘岩 沖縄県工業連合会 専務理事
第110回	6/1	青い目のみた琉球の女性史	ラブ・オーシェリー 宣教師・写真家
第111回	6/22	シンポジウム沖縄戦（戦争体験）はいかに語り継がれるべきか —「ある神話の背景」にふれながら— 司　　会：新崎 盛暉（沖縄大学学長） 問題提起者：新崎 盛暉（　　　） パネリスト：牧港 篤三（ジャーナリスト） 岡本 恵徳（琉球大学教授） 大城 将保（沖縄史料編集所専門員） 仲程 昌徳（琉球大学教授）	
第112回	7/13	核時代の世界社会と日常生活	庄司 興吉 東京大学助教授
第113回	7/20	現代の問題を考えるための自分学	高橋 実 共同通信論説委員

回数	開講日	テ　　ー　　マ	講　　師
第114回	9/14	行政のアーバンデザイン事情	横山 芳春 那覇市都市計画課 景観担当
第115回	9/28	インドネシア・沖縄・日本	比屋根 照夫 琉球大学教授
第116回	10/12	これからの社会と女の生き方	青木 やよひ 評論家
第117回	10/26	沖縄南洋移民小史	赤嶺 秀光 フリーライター
第118回	11/9	私たちの地球・私たちの海	キャサリン・ミュージック 海洋学者
第119回	11/30	食品公害・食品添加物をめぐる諸問題	高橋 暁正 和光大学講師
第120回	12/21	最近の公害の状況 —日本からアジアへ—	宇井 純 東京大学工学部助手
第121回	1986年 1/11	地割制度をめぐる争点	田里 修 沖縄大学講師
第122回	1/25	琉球人の漂流物語	島尻 勝太郎 沖縄大学教授

## 1986年度

回数	開講日	テ　　ー　　マ	講　　師
第123回	4/12	日本の古代国家と南島	山里 純一 琉球大学助教授
第124回	4/26	自分史づくりの現象論	上間 常道 ジャーナリスト
第125回	5/10	「臨教審」と生涯教育	小川 利夫 名古屋大学教授
第126回	5/24	巨大開発と地域経済	金城 朝夫 ルポライター
第127回	6/14	沖縄における倒産企業の財務諸帳	山内 真樹 公認会計士
第128回	6/28	沖縄の軍用地をめぐる法律問題	金城 睦 弁護士

回数	開講日	テ ー マ	講 師
第129回	9/13	親泊大佐・その死	井川 良久 NHK沖縄放送局長
第130回	9/27	私のひめゆり戦記	宮良 ルリ ひめゆり平和祈念 資料館資料員
第131回	10/11	沖縄芝居よもやま話	真喜志 好忠 役 者
第132回	10/25	くらしの変革と地域社会	井手 敏彦 元静岡県沼津市長
第133回	11/1	討論とコンサート フィリピン・ネグロスから学ぶ	デッサ・ケサダ リカルド・ホセ フィリピン大学講師
第134回	11/22	シンポジウム「強制連行の韓国人軍夫と沖縄戦」 発言者 千澤基（元韓国人軍夫）・金潤台（元韓国人軍夫） 権丙卓（嶺南大教授）・海野福寿（明治大教授） 司 会 新崎盛暉（沖大学長） 通 訳 高崎完司（津田塾大教授）・津波高志（琉大助教授） 金東善（在日大韓民国居留民団沖縄地方支部副団長）	
第135回	1987年 1/17	世界の大学・日本の大学	宇井 純 沖縄大学教授
第136回	1/24	小年非行をめぐって	秋山 博之 那覇少年鑑別所所長

## 1987年度

回数	開講日	テ ー マ	講 師
第137回	1987年 4/7	自然保護と開発	大石 武一 元環境庁長官 反核千人委員会代表
第138回	4/25	島尻勝太郎先生退任記念 沖縄人の心	島尻 勝太郎 沖縄大学教授
第139回	5/9	売上税と私たちのくらし	糸数 哲夫 税理士
第140回	5/30	沖縄大学創立30周年記念講演 これからの教育	永井 道雄 元文部大臣
第141回	6/13	映画と講演 韓国・広島・沖縄	新崎 盛暉 沖縄大学学長

回数	開講日	テ ー マ	講 師
第142回	6/27	台湾から見た沖縄と日本の関係	黄 春明 (ホアン・チェンミン) 作 家
第143回	7/11	沖縄の地理を読む	目崎 茂和 三重大学助教授
第144回	9/12	地場産業の振興と中小企業経営	伊波 盛伸 沖縄大学教授
第145回	9/26	沖縄経済の構造	佐々木 信行 日銀那覇支店長
第146回	10/24	どう立地する、これからの産業	宮城 弘岩 沖縄県工業連合会 専務理事
第147回	11/14	現代女流文学の世界 — “産む性” としての女 —	与那覇 恵子 文芸評論家
第148回	11/28	食と健康	知念 隆一 「青い海」社長
第149回	12/12	地球の洗濯 — 福祉の道100を語る —	田村 一二 茗荷会会長 元近江学園副園長
第150回	12/26	小国論と国際関係	百瀬 宏 津田塾大学教授
第151回	1988年 1/9	超伝導研究の現状と未来	堺 英二郎 琉球大学理学部助手
第152回	1/23	新しい時代における新しい企業経営 — ホーメルの企業経営から —	末続 桂吾 ホーメル社長
第153回	2/6	沖縄の産業としてのジミー	稲嶺 盛一郎 ジミー社長

## 1988年度

回数	開講日	テ ー マ	講 師
第154回	1988年 4/2	北のはなし・南のはなし	椎名 誠 作 家
第155回	4/23	私の小説教室	駒田 信二 朝日カルチャーセンター 講師 中国文学者



回数	開講日	テ　　ー　　マ	講　　師
第156回	5/14	沖縄における文学・思想の位相 —同人誌活動の現在から—	川満 信一 詩人・ジャーナリスト
第157回	5/28	戦後沖縄社会教育の歴史と問題	平良 研一 沖縄大学教授
第158回	6/11	沖縄大学創立30周年記念講演 今、大学にもとめられているもの	木崎 甲子郎 琉球大学教授
第159回	6/25	沖縄の土地所有と土地利用	石井 啓雄 駒沢大学教授
第160回	7/16	現代日本文学入門	松本 健一 文芸評論家
第161回	7/23	現代技術の位相	星野 芳郎 帝京大学教授
第162回	9/24	南米で考えたこと	新崎 盛暉 沖縄大学学長
第163回	10/ 8	歴史と文学のこころ —在日文学と第三世界文学の可能性を 中心に—	李 恢成 作 家
第164回	10/22	言葉からみた日本と中国のちがひ	孫 薇 中国・東北工学院大学 外国語学部講師
第165回	11/22	リゾート開発をとらえる視点	原 重一 (財)日本交通公社 調査部長
第166回	11/26	未来の沖縄をどうとらえるか	喜納 昌吉 音楽家
第167回	12/10	女たちの現在	加納 実紀代 女性史研究家
第168回	12/24	市民生活と税金 —納税者から見た最近の税制「改正」 論議—	畠山 武道 立教大学法学部教授
第169回	1989年 1/14	映画「柳川掘割物語」 水と人間を考える	
第170回	1/28	バスガイドからみた沖縄観光	城間 佐智子 沖縄バスガイド

## 1989年度

回数	開講日	テ ー マ	講 師
第171回	1989年 4 / 1	最も特色ある沖縄の伝統文化・沖縄語を 生かす道	船津 好明 元沖縄総合事務局次長 日本学術会議事務局長
第172回	4 / 22	昭和における憲法の変遷	山中 康雄 元九州大学教授
第173回	5 / 13	よみがえれ沖縄農業 —沖縄における花卉栽培の歩み—	上間 良廣 沖縄県花卉園芸農業 共同組合長
第174回	5 / 27	中国の新しい波 —最新中国政治・経済事情—	天児 慧 琉球大学助教授
第175回	6 / 25	「慰霊の日」若者からの視点—5大学クロスオーバー・トークイン— 講演 大城宣武 (沖縄キリスト教短大教授) 司 会 棚原 勝也 (沖縄大学4年) 報 告 新垣 勉 (沖縄国際大学) 屋良 朝乃 (沖縄大学2年) 金城 まゆみ (琉球大学3年) 意見発表 平良 一器 (沖縄キリスト教短期大学2年) 上田 真弓 (沖縄大学1年) 外間 かおり (琉球大学4年)	
第176回	7 / 8	オキナワと写真と私	石川 真生 フリーカメラマン
第177回	10/14	シンポジウム・情報公開制度と市民生活について パネリスト：親泊 康晴 (那覇市長) 佐久川政一 (沖縄大学教授・憲法) 奥津 茂樹 (「情報公開制を求める市民運動」事務 局長) 永吉 盛元 (弁護士) 恒川 隆生 (沖縄国際大学助教授・憲法・行政法)	
第178回	10/28	シンポジウム・戦後沖縄における家族の位相 パネリスト：国吉 和子 (沖縄大学教授) 谷口 正厚 ( 〃 教授) 金城 一雄 ( 〃 助教授) 新城 将孝 ( 〃 助教授) 座間味完治 (オリブ山病院研究教育部長) コーディネーター：新崎 盛暉 (沖縄大学教授)	

回数	開講日	テ ー マ	講 師
第179回	1989年 11/25	<p>沖縄大学地域研究所創立一周年記念シンポジウム            基調講演「自立経済と三次振計の政策方向」                      高良 有政（沖大地域研究所副所長）</p> <p>パネリスト「地域自給の課題と展望」                      多辺田政弘（沖縄国際大学教授）</p> <p>「沖縄自治の課題」                      仲地 博（琉球大学教授）</p> <p>「観光振興の課題」                      白戸 伸一（沖縄大学助教授）</p> <p>「医療福祉の課題」                      岩森 龍夫（沖縄大学助教授）</p> <p>「地域自立運動をとうして」                      内海恵美子（当研究職員）</p> <p>コーディネーター                      金城 睦（弁護士・本学理事）</p>	
第180回	1990年 1/13	交通権について考える	日野 正己 長崎総合科学大学 工学部助教授
第181回	1/27	リゾート開発、観光、地域振興に関する 一視角	宮井 久男 沖縄大学教授

## 1990年度

回数	開講日	テ ー マ	講 師
第182回	1990年 4/7	移りゆく世界と沖縄	中村 哲 法政大学名誉教授 元総長
第183回	4/28	フランスで「自由」を考える —リトアニアの詩人ミロシュに ふれつつ—	大湾 宗定 沖縄大学非常勤講師
第184回	5/12	めざめよ沖縄農業	大城 喜信 沖縄農林漁業技術開発 協会事務局長
第185回	5/26	赤土汚染は今—その実態と問題点	吉嶺 全二 環境問題研究家
第186回	6/9	北京からみる琉球史	鞠 徳源 中国第一歴史档案館 研究員
第187回	7/14	犯罪と刑罰に見る近世琉球社会	豊見山 和行 日本学術振興会特別 研究員

回数	開講日	テ ー マ	講 師
第188回	10/13	映画を楽しくみる方法	神田 勲 琉球放送ラジオ放送部 チーフアナウンサー
第189回	10/27	中東危機と私たちの立場	板垣 雄三 東京大学東洋文化 研究所教授
第190回	11/10	宮城与徳とゾルゲ事件	大峰 林一 宮城与徳遺作展・ 那覇展実行委事務局長
第191回	11/24	シンポジウム What's ? 子供の権利条約 パネリスト 菅 源太郎 (子どもの権利条約の批准を求める 10代の会代表) 山吉 剛 (沖縄大学助教授) 永吉 盛元 (弁護士)	
第192回	12/ 8	久高島のイザイホー	比嘉 康雄 写真家
第193回	1991年 1 /12	俳句入門 —短さの魅力—	野ざらし 延男 俳人
第194回	1 /26	中国から見た日本・沖縄	李 徳純 中国社会科学院 大学院教授

## 1991年度

回数	開講日	テ ー マ	講 師
第195回	4 / 6	技術革新の現在と日米経済摩擦	伊東 光晴 経済学者 前京都大学教授
第196回	4 /27	ボーダー社会を考える	小浜 逸郎 評論家
第197回	5 /11	金日成主席懇談記 —自立経済とチュチェ文化の発展—	高良 有政 沖縄大学教授
第198回	5 /25	グローバル500賞をうけて	宇井 純 沖縄大学教授
第199回	6 / 8	もう一つの沖縄戦 八重山の戦争マラリア問題	篠原 武夫 琉球大学教授 沖縄戦強制疎開マラリア 犠牲者援護会会長

回数	開講日	テ ー マ	講 師
第200回 記念	1991年 6/22	シンポジウム  沖縄・今を問い、 可能性をさぐる	コーディネータ 山門 健一 沖縄大学教授 パネリスト 宮城 弘岩 沖縄県工業連合会副会長 パネリスト 岡本 恵徳 琉球大学教授 パネリスト 照屋 輝一 沖縄県工業試験場研究主 幹兼科学室長
第201回	7/13	揺れる聖域	安里 英子 フリーライター
第202回	7/27	減びゆくふるさと リゾート開発と土地買い占め	金城 朝夫 フリージャーナリスト
第203回	10/12	緑と香りのまちづくり —地域づくりの一方法—	山門 健一 沖縄大学教授
第204回	11/ 2	フィリピンの教育事情と教育運動	フィデル・ファバピエル マニラ公立学校教師 連盟議長 クリス・ブルザ ACT全国書記次長
第205回	11/ 9	ハーバードからの研究報告 米国の看護婦不足	岩森 龍夫 沖縄大学助教授
第206回	12/14	そのとき板垣は何と言ったか 公文書保存の重要性	小玉 正任 国立公文書館長
第207回	2/29	社会教育・生涯学習のあり方を問う	小林 文人 東京学芸大学教授

## 1992年度

回数	開講日	テ ー マ	講 師
第208回	4/11	そ連邦崩壊後のロシア現状と日本を 含むアジアとの関係、その将来	ウラジミール・クチコ イタル・タス通信社東京 支局長
第209回	4/25	琉球と中国の交易史	安里 進 浦添市美術館学芸係長
第210回	5/ 9	沖縄戦が現代に語りかけるもの	山本 卓 作家・演出家

回数	開講日	テ　　マ	講　　師
第211回	5/23	沖縄女性と台湾植民地支配	又吉 盛清 浦添市美術館主査
第212回	6/13	沖縄の軍用地問題 —契約拒否地主の調査をもとに—	新崎 盛暉 沖縄大学教授
第213回	6/27	中国はいま……	郭 承敏 沖縄大学教授
第214回	7/11	宮城与徳の生涯	比屋根 照夫 琉球大学教授
第215回	7/18	シンポジウム  「復帰20年を読む」	基調発言 新崎盛暉 パネリスト 大城立裕 パネリスト 木崎甲子郎 コーディネーター 金城 睦
第216回	7/25	三次振計と南北問題の神話	高良 有政 沖縄大学教授
第217回	10/17	コザ市の都市形成と沖縄市の将来像	田里 友哲 沖縄大学教授
第218回	10/24	「新しい人権」と沖縄	組原 洋 沖縄大学講師
第219回	11/7	北米におけるウチナンチュウと人権	ラサール・パーソンズ 与那原カトリック教会神父
第220回	12/12	国連障害者の10年	谷口 正厚 沖縄大学教授
第221回	1993年 1/9	「中国の書を学ぶ」	劉 炳森 中国書法家協会副主席
第222回  (視聴覚 教室)	1/9  6:00	特別土曜教養講座 ＝ '93世界の先住民のための国際年 先住民族の権利 変動する政策と法	ヒラリー・E・ラムレイ 津田塾大学 ウェスタン ワシントン大学
第223回	2/27	「私とコザと民謡」	喜納 昌吉 歌 手

資料(2) 琉球弧縦断移動市民大学開設状況 (平良市)

〈第1回〉 1976年2月7日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
新 崎 盛 暉 (沖縄大学教授)	大学と社会	2/7(土)	25
安 良 城 盛 昭 (沖縄大学教授)	沖縄の歴史		
月 岡 利 男 (沖縄大学教授)	くらしと法律		

会場：平良市市民会館 聴講料：300円

〈第2回〉 1980年1月21日～1月25日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
安 良 城 盛 昭 (沖縄大学学長)	先島におけるソテツ地獄 — 貴族院多額納税者議員互選人名簿の分 析 —	1/21(月)	71
宮 国 定 徳 (平良市文化財保護審議 委員会委員長)	宮古の文化財	1/22(火)	40
島 尻 勝 太 郎 (沖縄大学教授兼沖縄高 校長)	宮古のいも伝来	1/23(水)	56
下 地 和 宏 (考古学研究者)	宮古の考古学	1/24(木)	41
新 崎 盛 暉 (沖縄大学教授)	教育大衆化と地域社会	1/25(金)	50

会場：平良市文化センター

〈第3回〉 1982年10月25日～10月29日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
もろさわようこ (女性史研究家)	わが女性史と宮古	10/25(月)	
木崎甲子郎 (琉球大学教授)	宮古の島々はどのようにしてできたか	10/26(火)	
大嶺哲雄 (沖縄大学教授)	島の自然と私たちの生活	10/27(水)	
島尻勝太郎 (沖縄大学教授)	宮古の災害	10/28(木)	
永野善治 (沖縄大学教授)	いま学校教育に問われているもの	10/29(金)	

会場：平良市文化センター

〈第4回〉 1983年11月15日～11月19日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
島尻勝太郎 (沖縄大学教授)	人頭税について	11/15(火)	
山門健一 (沖縄大学助教授)	消費生活と地域経済	11/16(水)	
上村幸雄 (琉球大学教授)	ふるさとのことばを残そう —琉球列島の言語—	11/17(木)	
大屋一弘 (琉球大学教授)	琉球列島の土と作物	11/18(金)	
佐久川政一 (沖縄大学教授)	憲法と私たちの暮らし	11/19(土)	

会場：平良市文化センター



〈第5回〉 1984年11月27日～12月1日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
田 名 真 之 (那覇市史編集室)	家譜と身分制	11/27(火)	
平 良 研 一 (沖縄大学教授)	生涯教育と公民館の役割	11/28(水)	
福 仲 憲 (琉球大学助教授)	琉球弧の農業振興を考える —亜熱帯農業の原点をふまえて—	11/29(木)	
柳 沢 文 徳 (東京医科歯科大学 名誉教授)	健康な生活を続けるために	11/30(金)	
上 田 不 二 夫 (沖縄水産高校教諭)	琉球弧の水産業振興 —海からのシマおこし—	12/1(土)	

会場：平良市文化センター

〈第6回〉 1985年12月1日～12月6日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
比 嘉 照 夫 (琉球大学教授)	亜熱帯農業の可能性について	12/1(日)	26
高 橋 暁 正 (和光大学講師)	食生活のゆがみを正す	12/3(火)	89
田 里 修 (沖縄大学講師)	近世琉球の検地・石高と先島	12/4(水)	17
宮 城 弘 岩 (沖縄工業連合会 専務理事)	沖縄の工業振興の展望	12/5(木)	10
黒 島 為 一 (石垣市教育委員会)	八重山の人頭税 —その研究上におけるいくつかの 問題点—	12/6(金)	14

会場：平良市文化センター

〈第7回〉 1986年10月20日～10月24日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
高 里 鈴 代 (那覇市婦人相談員)	男の目線・女の視点 —21世紀を共に生きるための女性学—	10/20(月)	
金 城 一 雄 (沖縄大学助教授)	現代家族と子育て	10/21(火)	
新 垣 淑 哲 (ラジオ沖縄社長)	地域社会とラジオ	10/22(水)	
築 島 富 士 夫 (名瀬市社会課長)	地場産業活性化と行政 —大島紬の事例を中心に—	10/23(木)	
井 手 敏 彦 (元静岡県沼津市長)	くらしの変革と地域社会	10/24(金)	

会場：平良市中央公民館

〈第8回〉 1987年 11月10日～11月14日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
千 刈 あ が た (小 説 家)	女子供の感性から	11/10(火)	
田 場 美 津 子 (小 説 家)	小説・私の場合	11/11(水)	
与 那 覇 恵 子 (文 芸 評 論 家)	現代女流文学の世界 —“産む性”としての女	11/12(木)	
岡 本 恵 徳 (琉球大学教授)	戦後沖縄の文学	11/13(金)	
森 慎 一 (元高校教諭)	民主主義の現場から	11/14(土)	

会場：宮古婦人連合会会館

〈第9回〉 1988年11月8日～11月12日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
宇 井 純 (沖 縄 大 学 教 授)	離島の水と下水道	11/8(火)	45
伊 志 嶺 敏 子 (一 般 建 築 士)	住まいづくりについて	11/9(水)	21
宮 良 孫 好 RBC報道局 気象解説委員	沖縄の気候と植物	11/10(木)	12
原 重 一 (財)日本交通公社 調 査 部 長	リゾート開発をとらえる視点	11/11(金)	14
金 城 朝 夫 (レポライター)	八重山における宮古の移民	11/12(土)	6

会場：平良市中央公民館

〈第10回〉 1989年11月30日～12月2日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
羽 田 新 (明治学院大学教授)	出稼ぎの諸問題	11/30(木)	
新 城 将 孝 (沖縄大学助教授)	社会変動と離婚 —離婚の推移と実態—	12/1(金)	
高 良 有 政 (沖縄大学教授)	沖縄の開発をめぐって —離島振興と三次振計	12/2(土)	

会場：平良市中央公民館

〈第11回〉 1990年11月13日～11月15日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
金 武 正 紀 (那覇市教育委員会 文化課主幹)	考古学から見た宮古・八重山の歴史	11/13(火)	32
上 間 常 道 (沖縄タイムス社出版部 副部長)	記録のつづり方	11/14(水)	27
宮 良 高 弘 (札幌大学教授)	沖縄をとりまく世界 —沖縄・本土・韓国—	11/15(木)	25

会場：平良市中央公民館

〈第12回〉 1991年10月16日～10月17日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
比 嘉 康 雄 (写真家)	私の生き方を決定した祖神祭	10/16(水)	
松 鷹 彰 弘 (沖縄大学講師)	リゾート沖縄と観光誘客構造	10/17(木)	
崎 山 律 子 (フリージャーナリスト)	メディアと私たち	10/18(金)	

会場：平良市中央公民館

資料(3) 琉球弧縦断移動市民大学開設状況（石垣市）

〈第1回〉 1976年2月8日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
新 崎 盛 暉 (沖 縄 大 学 教 授)	大学と社会	2 / 8(日)	29
安 良 城 盛 昭 (沖 縄 大 学 教 授)	沖縄の歴史		
月 岡 利 男 (沖 縄 大 学 教 授)	くらしと法律		

会場：八重山教育会館 聴講料：300円

〈第2回〉 1980年 1月22日～1月26日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
安 良 城 盛 昭 (沖 縄 大 学 学 長)	先島の人頭税	1 / 22(火)	61
玻 名 城 泰 雄 (石垣市立博物館館長)	琉球国の印章について	1 / 23(水)	
山 門 健 一 (沖 縄 大 学 助 教 授)	公害問題	1 / 24(木)	
崎 山 直 (石垣市市史編集室長)	歴史を考える —八重山の歴史に即して—	1 / 25(金)	
新 崎 盛 暉 (沖 縄 大 学 教 授)	教育の大衆化と地城社会	1 / 26(土)	

会場：石垣市文化会館

〈第3回〉 1982年 10月26日～10月30日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
もろさわようこ (女性史研究者)	わが女性史と宮古	10/26(火)	
木崎甲子郎 (琉球大学教授)	八重山の島々はどのようにしてできたか	10/27(水)	
大嶺哲雄 (沖縄大学教授)	島の自然と私たちの生活	10/28(木)	7
島尻勝太郎 (沖縄大学教授)	規模帳にみる役人	10/29(金)	44
永野善治 (沖縄大学教授)	いま学校教育に問われているもの	10/30(土)	29

会場：八重山高等学校

〈第4回〉 1983年11月14日～11月18日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
島尻勝太郎 (沖縄大学教授)	人頭税について	11/14(月)	
山門健一 (沖縄大学助教授)	消費生活と地域経済	11/15(火)	
上村幸雄 (琉球大学教授)	ふるさとのことばを残そう —琉球列島の言語—	11/16(水)	
大屋一弘 (琉球大学教授)	琉球列島の土と作物	11/17(木)	
佐久川政一 (沖縄大学教授)	憲法と私たちの暮らし	11/18(金)	

会場：石垣市文化会館

〈第5回〉 1984年 11月26日～11月30日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
田 名 真 之 (那覇市史編集室)	家譜と身分制	11/26(月)	55
平 良 研 一 (沖縄大学教授)	生涯教育と公民館の役割	11/27(火)	26
福 仲 憲 (琉球大学助教授)	琉球弧の農業振興を考える —亜熱帯農業の原点をふまえて—	11/28(水)	20
柳 沢 文 徳 (東京医科歯科大学 名誉教授)	健康な生活を続けるために	11/29(木)	44
上 田 不 二 夫 (沖縄水産高校教諭)	琉球弧の水産業振興 —海からのシマおこし—	12/30(金)	29

会場：石垣市立文化会館

〈第6回〉 1985年 11月30日～12月4日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
比 嘉 照 夫 (琉球大学教授)	亜熱帯農業の可能性について	11/30(土)	38
高 橋 暁 正 (和光大学講師)	食生活のゆがみを正す	12/1(日)	32
下 地 和 守 (平良市教育委員会)	八重山・宮古の古代社会 —考古学を中心にして—	12/2(月)	38
田 里 修 (沖縄大学講師)	近世琉球の検地・石高と先島	12/3(火)	31
宮 城 弘 岩 (沖縄県工業連合会 専務理事)	沖縄の工業振興の展望	12/4(水)	21

会場：石垣市立文化会館

〈第7回〉 1986年10月19日～10月23日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
高 里 鈴 代 (那覇市婦人相談員)	男の目線・女の視点 —21世紀を共に生きるための女性学—	10/19(日)	29
金 城 一 雄 (沖縄大学助教授)	現代家族と子育て	10/20(月)	28
新 垣 淑 哲 (ラジオ沖縄社長)	地域社会とラジオ	10/21(火)	20
築 島 富 士 夫 (名瀬市社会課長)	地場産業活性化と行政 —大島紬の事例を中心に—	10/22(水)	24
井 手 敏 彦 (元静岡県沼津市長)	くらしの変革と地域社会	10/23(木)	28

会場：石垣市立文化会館

〈第8回〉 1987年11月9日～11月13日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
千 刈 あ が た (小説家)	女子供の感性から	11/9(月)	
田 場 美 津 子 (小説家)	小説・私の場合	11/10(火)	
与 那 覇 恵 子 (文芸評論家)	現代女流文学の世界 —“産む性”としての女	11/11(水)	
岡 本 恵 徳 (琉球大学教授)	戦後沖縄の文学	11/12(木)	
森 慎 一 (元高校教諭)	民主主義の現場から	11/13(金)	

会場：石垣市立文化会館

〈第9回〉 1988年11月11日～11月13日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
源 啓 美 (ラジオ沖縄ディレクター)	なぜ、今、うないフェスティバルか	11/11(金)	47
原 重 一 (財)日本交通公社 調査部長	リゾート開発をとらえる視点	11/12(土)	59
宇 井 純 (沖縄大学教授)	離島の水と下水道	11/13(日)	82

会場：沖縄県八重山職員会館



資料(4) 琉球弧縦断移動市民大学開設状況（名瀬市）

〈第1回〉 1982年9月27日～10月1日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
新 崎 盛 暉 (沖 縄 大 学 教 授)	大学大衆化と地域社会	9/27(月)	
上 村 幸 雄 (琉 球 大 学 教 授)	奄美と沖縄の方言	9/28(火)	
島 尻 勝 太 郎 (沖 縄 大 学 教 授)	古琉球時代における奄美	9/29(水)	
大 嶺 哲 雄 (沖 縄 大 学 教 授)	奄美・その土壌動物と山林	9/30(木)	
泉 裕 己 (琉 球 大 学 教 授)	沖縄農業の推移と奄美の農業	10/1(金)	

会場：名瀬市中央公民館

〈第2回〉 1983年9月26日～9月30日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
島 尻 勝 太 郎 (沖 縄 大 学 教 授)	近世における奄美と沖縄	9/26(月)	
山 門 健 一 (沖 縄 大 学 教 授)	内発的な経済成長への試み	9/27(火)	
木 崎 甲 子 郎 (琉 球 大 学 教 授)	奄美の島々はどのようにしてできたか	9/28(水)	
大 屋 一 弘 (琉 球 大 学 教 授)	琉球列島の土と作物	9/29(木)	
むろさわようこ (女 性 史 研 究 家)	女たちのいま・これから —歴史を通して考える—	9/30(金)	

会場：名瀬市中央公民館

〈第3回〉 1984年10月1日～10月5日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
原 口 泉 (鹿児島大学助教授)	奄美五島の歴史的対比	10/1(月)	125
高 橋 暁 正 (和光大学講師)	食生活のゆがみを正す	10/2(火)	94
佐 久 川 政 一 (沖縄大学教授)	われわれの暮らしと法律	10/3(水)	61
福 仲 憲 (琉球大学助教授)	琉球弧の農業振興を考える —亜熱帯農業の原点をふまえて—	10/4(木)	75
上 田 不 二 夫 (沖縄水産高校教諭)	琉球弧の水産業振興	10/5(金)	40

会場：名瀬市中央公民館

〈第4回〉 1985年10月7日～10月11日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
比 嘉 照 夫 (琉球大学教授)	亜熱帯農業の可能性について	10/7(月)	155
青 木 や よ ひ (評論家)	これからの社会と女の生き方	10/8(火)	124
田 里 修 (沖縄大学講師)	近世琉球研究と奄美	10/9(水)	96
比 嘉 政 夫 (琉球大学教授)	社会人類学から見た奄美と沖縄	10/10(木)	100
竹 内 直 一 (日本消費者連盟代表)	私たちの暮らしはどうなるのか	10/11(金)	82

会場：名瀬市中央公民館

〈第5回〉 1986年10月13日～10月17日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
杉 岡 碩 夫 (千葉大学教授)	地域復興の経済学	10/13(月)	
キャサリン・ミュージック (沖縄大学講師)	もし、海がなくなったら	10/14(火)	
宇 井 純 (沖縄大学教授)	環境と地域の自治	10/15(水)	
ウィル・オッフエルマンス (フルート奏者)	「フルート演奏の夕べ」	10/16(木)	
上 江 洲 均 (沖縄県立博物館 学芸課長)	民具からみた奄美と沖縄	10/17(金)	

会場：名瀬市中央公民館

〈第6回〉 1987年10月13日～10月17日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
若 尾 典 子 (琉球大学講師)	これからの暮らしと女性の生き方	10/13(火)	191
山 門 健 一 (沖縄大学助教授)	沖縄自立経済の萌芽	10/14(水)	57
金 城 朝 夫 (ルポライター)	観光・レジャー産業と島おこし	10/15(木)	84
田 名 真 之 那覇市文化振興 課 主 査	奄美と先島・沖縄	10/16(金)	45
上 田 不 二 夫 (沖縄水産高校教諭)	海浜リゾート開発と水産業	10/17(土)	51

会場：名瀬市中央公民館

〈第7回〉 1988年10月4日～12月19日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
橋 口 晋 作 (鹿児島県立短期) (大 学 教 授)	奄美の平家南下伝説	10/4(火)	167
石 橋 博 (鹿児島県立短期) (大 学 教 授)	衣服の燃焼性問題と本場奄美大島紬	10/5(水)	52
宮 城 弘 岩 (沖縄県工業連合) (会 専 務 理 事)	沖縄経済の国際化とフリーゾーン	10/17(月)	53
桑 原 守 也 (沖縄都ホテル社長)	南島の観光についておもうこと	10/18(火)	63
上 間 良 廣 (沖縄県花卉園芸) (農業協同組合長)	沖縄県における花卉栽培の歩み	10/19(水)	84

会場：名瀬市中央公民館

〈第8回〉 1989年10月2日～10月18日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
名 嘉 正 八 郎 (沖縄県立図書館) (副 参 事)	沖縄糖業の歴史 —近・現代を中心に—	10/2(月)	70
吉 田 朝 啓 (沖縄県公害衛生) (研 究 所 所 長)	ハブのはなし—ハブと人間の合理的な住 み分けをめざして—	10/3(火)	103
与 那 覇 恵 子 (文 芸 評 論 家)	女の小説と家族	10/16(月)	55
原 重 一 (財)日本交通) (公 社 調 査 部 長)	リゾート開発をとらえる視点	10/17(火)	70
知 名 洋 二 (株)リューセロ代表) (取 締 役 社 長)	地域をどう活性化させるか	10/18(水)	63

会場：名瀬市中央公民館

〈第9回〉 1990年10月4日～10月19日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
知 念 勇 (沖縄県立博物館) (学芸課長)	考古資料からみた奄美と沖縄	10/4(木)	45
真 栄 城 守 定 (沖縄地域科学) (研究所所長)	地域産業おこし —特産品づくりを通して—	10/5(金)	中止
松 崎 俊 久 (琉球大学教授)	長寿と老後の健康	10/17(水)	19
大 城 学 (沖縄県立博物館専門員)	奄美・沖縄のまつり	10/18(木)	20
国 吉 和 子 (沖縄大学教授)	メディアの中の女性	10/19(金)	中止

会場：名瀬市中央公民館

〈第10回〉 1991年10月23日～10月24日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
当 間 一 郎 (芸能研究家)	奄美・沖縄の芸能	10/23(水)	
琉舞華の会・他	奄美・沖縄の歌と踊り	10/24(木)	

会場：名瀬市中央公民館

資料(5) 琉球弧縦断移動市民大学開設状況（笠利町）

〈第1回〉 1982年9月28日～10/2日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
永 野 善 治 (沖 縄 大 学 教 授)	いま学校教育に問われているもの	9/28(火)	
上 村 幸 雄 (琉 球 大 学 教 授)	奄美と沖縄の方言	9/29(木)	
島 尻 勝 太 郎 (沖 縄 大 学 教 授)	古琉球時代における奄美	9/30(木)	
大 嶺 哲 雄 (沖 縄 大 学 教 授)	奄美・その土壌動物と山林	10/1(金)	
泉 裕 己 (琉 球 大 学 教 授)	沖縄農業の推移と奄美の農業	10/2(土)	

会場：笠利町中央公民館

〈第2回〉 1983年9月28日～10月1日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
山 門 健 一 (沖 縄 大 学 教 授)	内発的な経済発展への試み	9/28(水)	
木 崎 甲 子 郎 (琉 球 大 学 教 授)	奄美の島々はどのようにしてできたか	9/29(木)	
大 屋 一 弘 (琉 球 大 学 教 授)	琉球列島の土と作物	9/30(金)	
もろさわようこ (女 性 研 究 家)	女たちのいま・これから —歴史通して考える—	10/1(土)	

会場：笠利町中央公民館

〈第3回〉 1984年10月2日～10月6日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
原 口 泉 (鹿児島大学助教授)	奄美五島の歴史的対比	10/2(火)	
高 橋 暁 正 (和光大学講師)	食生活のゆがみを正す	10/3(水)	
佐 久 川 政 一 (沖縄大学教授)	われわれのくらしと法律	10/4(木)	
福 仲 憲 (琉球大学助教授)	琉球弧の農業振興を考える —亜熱帯農業の原点をふまえて—	10/5(金)	
上 田 不 二 夫 (沖縄水産高校教諭)	琉球弧の水産業振興	10/6(土)	

会場：笠利町中央公民館

〈第4回〉 1985年10月8日～10月12日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
比 嘉 照 夫 (琉球大学教授)	亜熱帯農業の可能性について	10/8(火)	
青 木 や よ ひ (評論家)	これからの社会と女の生き方	10/9(水)	
田 里 修 (沖縄大学講師)	近世琉球研究と奄美	10/10(木)	
比 嘉 政 夫 (琉球大学教授)	社会人類学から見た奄美と沖縄 —その類比と対比—	10/11(金)	
竹 内 直 一 (日本消費者連盟代表)	私たちのくらしはどうか	10/12(土)	

会場：笠利町中央公民館

資料(6) 琉球弧縦断移動市民大学開設状況 (和泊町)

〈第1回〉 1982年10月1日～10/3日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
島 尻 勝 太 郎 (沖 縄 大 学 教 授)	古琉球時代における奄美	10/1(金)	
大 嶺 哲 雄 (沖 縄 大 学 教 授)	奄美・その土壌動物と山林	10/2(土)	
泉 裕 己 (琉 球 大 学 教 授)	沖縄農業の推移と奄美の農業	10/3(日)	

会場：和泊町研修センター

〈第2回〉 1983年9月29日～10月2日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
山 門 健 一 (沖 縄 大 学 教 授)	内発的な経済発展への試み	9/29(木)	
木 崎 甲 子 郎 (琉 球 大 学 教 授)	奄美の島々はどのようにしてできたか	10/1(金)	
大 屋 一 弘 (琉 球 大 学 教 授)	琉球列島の土と作物	10/2(土)	

会場：和泊町研修センター

〈第3回〉 1984年10月4日～10月6日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
高 橋 暁 正 (和 光 大 学 講 師)	食生活のゆがみを正す	10/4(木)	
佐 久 川 政 一 (沖 縄 大 学 教 授)	われわれのくらしと法律	10/5(金)	
福 仲 憲 (琉 球 大 学 助 教 授)	琉球弧の農業振興を考える —亜熱帯農業の原点をふまえて—	10/6(土)	

会場：和泊町研修センター



〈第4回〉 1985年10月9日～10月11日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
比 嘉 照 夫 (琉球大学教授)	亜熱帯農業の可能性について	10/9(木)	
青 木 や よ ひ (評論家)	これからの社会と女の生き方	10/10(木)	
田 里 修 (沖縄大学講師)	近世琉球研究と奄美	10/11(金)	

会場：和泊町研修センター

〈第5回〉 1985年10月14日～10月16日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
池 宮 正 治 (琉球大学教授)	「おもろ」にみる奄美と沖縄	10/14(火)	63
キャサリン・ミュージック (沖縄大学講師)	もし、海がなくなったら	10/15(木)	64
宇 井 純 (沖縄大学教授)	環境と地域の自治	10/16(木)	37

会場：和泊町研修センター

〈第6回〉 1986年10月12日～10月14日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
若 尾 典 子 (琉球大学講師)	これからの暮らしと女性の生き方	10/12(月)	
山 門 健 一 (沖縄大学助教授)	沖縄自立経済の萌芽	10/13(火)	
金 城 朝 夫 (ルポライター)	観光・レジャー産業と島おこし	10/14(水)	

会場：和泊町研修センター

〈第7回〉 1987年10月18日～10月20日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
宮 城 弘 岩 (沖縄県工業連合会) (専務理事)	沖縄経済の国際化とフリーゾーン	10/18(火)	63
桑 原 守 也 (沖縄都ホテル社長)	南島の観光についておもうこと	10/19(水)	32
上 間 良 廣 (沖縄県花卉園芸) (農業協同組合長)	沖縄県における花卉栽培の歩み	10/20(木)	34

会場：和泊町研修センター

〈第8回〉 1989年10月17日～10月19日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
与 那 覇 恵 子 (文芸評論家)	女の小説と家族	10/17(火)	
沖縄大学郷土芸能研究 クラブ	沖縄の歌と踊り	10/18(水)	
知 名 洋 二 (株)リュウセロ代表 (取締役社長)	地域をどう活性化させるか	10/19(木)	

会場：和泊研修センター

〈第9回〉 1990年10月18日～10月20日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
田 畑 千 秋 (奄美博物館主任学) (芸員千葉大学講師)	奄美の言語、歴史、民族	10/18(木)	54
和泊町郷土芸能サークル	和泊町の歌と踊り	10/19(金)	13
国 吉 和 子 (沖縄大学教授)	メディアの中の女性	10/20(木)	27

会場：和泊町研修センター

〈第10回〉 1991年10月24日～10月25日

講 師	テ ー マ	期 日	受講者数
当 間 一 郎 (芸能研究家)	奄美・沖縄の芸能	10/24(木)	
琉舞華の会・他	奄美・沖縄の歌と踊り	10/25(金)	

会場：名瀬市中央公民館

資料(7) 土曜教養講座受講者状況

受講者数一覧 (1985年度～1992年度)

1985年度	合計	男	女	1987年度	合計	男	女
第106回	60	27	33	第137回	58	37	21
第107回	86	55	31	第138回	88	69	19
第108回	125	78	47	第139回	22	16	6
第109回	200	179	21	第140回	299	155	144
第110回	83	33	50	第141回	52	25	27
第111回	160	113	47	第142回	295	168	127
第112回	34	15	19	第143回	39	25	14
第113回	54	31	23	第144回	21	18	3
第114回	35	31	4	第145回	44	34	10
第115回	38	26	12	第146回	45	34	11
第116回	77	15	62	第147回	67	14	53
第117回	22	15	7	第148回	23	12	11
第118回	84	524	30	第149回	66	36	30
第119回	77	38	39	第150回	23	19	4
第120回	83	62	21	第151回	45	37	8
第121回	41	33	8	第152回	47	41	6
第122回	65	45	20	第153回	32	26	6
1986年度				1988年度			
第123回	41	27	33	第154回	320	112	208
第124回	52	55	31	第155回	91	48	43
第125回	67	78	47	第156回	34	19	15
第126回	37	179	21	第157回	21	11	10
第127回	62	33	50	第158回	31	26	5
第128回	37	113	47	第159回	43	36	7
第129回	47	15	19	第160回	37	16	21
第130回	36	31	23	第161回	20	16	4
第131回	44	31	4	第162回	35	20	15
第132回	20	26	12	第163回	130	62	68
第133回	78	15	62	第164回	46	22	24
第134回	123	15	7	第165回	28	23	5
第135回	74	54	30	第166回	46	24	22
第136回	25	38	39	第167回	68	12	56

第168回	22	16	6
第169回	22	14	8
第170回	27	14	13

1989年度	合 計	男	女	1991年度	合 計	男	女
第171回	40	31	9	第195回	94	83	11
第172回	38	30	8	第196回	60	40	20
第173回	43	33	10	第197回	41	34	7
第174回	84	59	25	第198回	65	42	23
第175回	83	46	37	第199回	31	18	13
第176回	19	9	10	第200回	71	53	18
第177回	122	76	46	第201回	52	33	19
第178回	50	25	25	第202回	23	20	3
第179回	37	30	7	第203回	27	16	11
第180回	51	49	2	第204回	67	40	27
第181回	34	31	3	第205回	47	8	39
				第206回	53	33	20
				第207回	34	14	20

1990年度				1992年度			
第182回	56	40	16	第208回	92	52	40
第183回	20	9	11	第209回	109	67	42
第184回	34	33	1	第210回	40	23	17
第185回	85	61	24	第211回	48	33	15
第186回	183	94	89	第212回	52	38	14
第187回	33	20	13	第213回	55	34	21
第188回	21	14	7	第214回	34	18	16
第189回	118	76	42	第215回	63	40	23
第190回	54	23	31	第216回	88	66	22
第191回	35	14	21	第217回	30	21	9
第192回	22	10	12	第218回	18	10	8
第193回	47	14	33	第219回	55	10	45
第194回	71	37	34	第220回	35	20	15
				第221回	131	71	60
				第222回	81	48	33
				第223回			

## 土曜教養講座受講者数

年 度	総 数	最 高	最 小	平 均	備 考
1978 (9回)	426	110	24	47	
1979 (14回)	791	106	28	57	
1980 (14回)	699	190	24	50	
1981 (13回)	930	122	26	72	
1982 (17回)	1,108	154	27	65	
1983 (20回)	1,029	171	23	54	83回欠
1984 (18回)	950	127	20	53	
1985 (17回)	1,324	160	22	78	
1986 (14回)	666	124	20	51	133回欠
1987 (17回)	1,267	295	21	75	
1988 (17回)	1,021	320	21	60	
1989 (11回)	601	122	19	55	
1990 (13回)	779	183	20	60	
1991 (5回)	291	94	31	58	199回欠まで
	11,882	320	19	60	

(受付名簿より)

### (3) 沖縄国際大学の公開講座

#### 1. 南島文化研究所と南島文化市民講座

沖縄国際大学の公開講座の中で古い歴史をもっているのが南島文化市民講座である。この講座は沖縄大の南島文化研究所と地元の新聞社の共催で行われるもので、1980年（昭和55年）に第1回目が始まっており、平成5年度で14回目を数える。この公開講座を含めて、南島文化研究所が市民そして地域に対して行っている活動について述べる。

この研究所は南島地域の社会と文化の総合的研究を目的として昭和53年に設立されたもので、同大学の教員を中心にして所長、副所長、専任所員がそれぞれ1名ずつ、そして所員が30名で構成されている。このほかに特別研究員として県内大学の教官、教員、学識経験者、そして県外からの学識経験者が181名加わっている。その研究分野は考古学、歴史学、民俗学、文化人類学、社会人類学、生態人類学、宗教人類学、文化生態学、言語学、地理学、書誌学、芸能史、社会学、経済学、法学、文学、建築学、家政学、社会福祉学、農学、社会心理学等幅広い分野の専門家によって構成されている。

研究所規則によると事業内容は、(1)研究および調査、(2)研究および調査の成果の発表、(3)研究資料の収集・整理および保管、(4)その他の目的達成に必要な事業、となっている。この規則にもとづいて行った1991年度の事業の報告は次のとおりである。

(1) 下地町の総合調査：沖縄県宮古郡下地町の自然・文化・社会の総合研究で、1989年からの3カ年計画で行っている。

(2) 下地町調査報告：南島文化研究所では、調査地域へのお礼と研究成果の地元還元を目的とした調査報告講演会を毎年実施している。1991年度の調査報告講演会は以下のとおり。

日 時：1991年11月20日（水）16：30～21：00

場 所：下地町中央公民館

講 師：沖宗根将二（特別研究員・平良市総合博物館館長）

テーマ：「人物を通してみる近代の下地町－盛り島明長と与儀達敏を中心に－」

講 師：喜久川宏所員（短期大学部教授）

テーマ：「宮古・下地史の成立の背景について」

(3) 調査報告の編集発行

1992年3月31日 研究紀要『南島文化』第14号を発刊

1992年3月31日 『宮古・下地町調査報告書(3)』（地域研究シリーズNo17）を発刊

(4) 1992年3月31日 『南島文化研究所報』第35号発刊

(5) 公開講座・市民講座

#### ●第13回南島文化公開講座

日 時：1991年11月10日（日）

場 所：島尻地区

テーマ：「島尻（知念・玉城村を中心に）の地域学習

参加者：学生・教職員41名

#### ●第13回南島文化市民講座

主 催：南島文化研究所

共 催：沖縄タイムス社

講 演：NHK沖縄放送／沖縄テレビ放送

日 時：1992年1月2日（土）14：00～15：00

場 所：沖縄タイムスホール

テーマ：「トートメーと先祖崇拜—東アジアにおける位牌祭祀の比較—」

講 師：竹田 旦（創価大学教授・茨城大学名誉教授）

莊 英章（台湾・中央研究院民族学研究所所長）

崔 仁鶴（韓国・仁荷大学校教授）

平敷令治（南島研所員・文学部教授）

司 会：小熊 誠、稲福みき子所員

●社会病理が位牌にも影響・トートメーでシンポ（琉球新報1992. 2. 3）

沖縄国際大学・南島文化研究所の第13回「南島文化市民講座」が一日午後2時から沖縄タイムスホールで行われた。同大の創立二十周年を記念したシンポジウムで、二百五十人が参加した。

「トートメーと祖先崇拜—東アジアにおける位牌祭祀の比較—」をテーマにして、平敷令治・沖国大教授、莊英章中央研究院民族学研究所所長（台湾）、崔仁鶴・仁荷大学校教授（韓国）、竹田旦・創価大学教授が研究発表。フロアとの質疑応答もあり、盛り上がった。

平敷教授は位牌祭祀の受容過程や形態、さらに位牌祭祀に投影された祖先観について報告した。

莊所長は「漢民族は父兄継承を通して家族系譜を継承を強調する」崔教授も「自らの位置づけに祖先との系譜が及ぼす影響は大きい」などと祖先祭祀が生活に密接にかかわっていることを指摘強調したが、その一方で都市化が受験戦争などの「社会病理」が位牌の価値観にも変化を及ぼしていると述べた。竹田教授も民俗信仰の原点として伝統を保ってきた位牌の祭りが転換期に立たされていることを明らかにした。

南島文化市民講座については、その具体的内容が報道されている上記の新聞記事を資料として掲げた。また市民に対して直接の還元事業ではないが、地域の歴史、生活、文化に関する総合的調査研究をもとに研究会が勢力的に開かれており、このような地道な積み重ねが市民、および地域還元事業に大きくかかわっているのを、参考のためいくつかの事例を掲げてみたい。

●シマ研究会「沖縄における村落社会についての総合研究」

この研究会は1985年から沖縄の特質を解明することをめざして、毎月1回ずつ研究会を開催し、1992年1月現在で48回数えている。1991年度の研究会は第42回「中国江南の村と民俗」、「県外労働移動—その動因と帰結—」、「韓国のシャーマンについて」、「老人ホームにおける『ヒヌカン』・『ヌジファー』について」、「沖縄方言“連用形”の変遷」、「沖縄におけるアイデンティティについて」、「シマと地理学」といったテーマで行われた。

1990年から学際的な共同研究の場として、また学外の研究者との交流の場として沖縄近世史研究会を発足させ、やはり月1回の割合で研究会を開き、地道な研究活動を行っている。

## 2. 学内定例講座

沖縄国際大学の公開講座は、学内定例講座、学外講座、夏期集中講座、講演会とにわけて昭和61年から形が整えられ、定例的に開かれる講座として始まっている。学内定例講座は一般、学生、職員を対象にして行われているもので、大学内で年間3～6本の講座が開かれている。

テーマは日本語、教育、婦人問題、経済問題、企業問題等、開講当初は一つのテーマに対して3本の話題で組み立てていく構成をとっている。たとえば日本語に関しては「日本語の歴史と特徴」「ことばと社会」「日本語の語彙」、教育に関しては「教育の歴史と現代」「現代学校教育の諸問題」「教育の社会的役割」というように、一つのテーマを多角的視点からみていこうという意図がうかがえる。ところが、1テーマ3本の講座を2回行うという試みは昭和61年と昭和62年で打ち切れ、昭和63年は1テーマ3本、そして平成元年は4テーマ4本、2年は3テーマ3本、3年は2テーマ4本、4年は3テーマ4本という形に変わっている。開講当初の試みがなぜ崩れたのか現在のところ不明である。

## 3. 学外講座

学外講座は社会人一般を対象にして、地域に出かけていって行う講座である。主として当大学の先生方から講座のテーマを募り、基本構想をたてる。それを文書で県内の市町村、図書館、公民館などの各機関や企業に送り、その反応をもとにしてテーマの内容、開催日時などを調整している。関係者の話では、まだ試行錯誤の段階であり、現在なおよりよい方向を模索しているという。

この講座も学内定例講座と同様、開講当時と現在とでは様変わりを見せている。昭和61年度は「沖縄の信仰と生活」（宮古会場）、「八重山の戦中と戦後」（八重山会場）、「源氏物語について」（久米島会場）の3会場で地域の生活や歴史に関連したもの、また一般教養に属する3開講座を行い、昭和62年度には経済問題を中心にして名護会場で3回、親子関係の問題について糸満会場で1回の講座を開いているが、昭和63年と平成元年度は開かれていない。平成2年度からは、沖縄国際大学のキャンパスがある宜野湾市の中央公民館の共催で、沖縄の歴史と民話をテーマにして2講座、企業の協賛によって沖縄の文化と歴史に関する講座を4講座開いている。

学外講座の方向性が見えはじめるのは平成2年度からのようで、とくに平成4年度は宜野湾市民図書館、琉球銀行、石垣市教育委員会からの要請で、合計9講座を開催し、実際実施してみるとたいへん好評であった、と関係者は喜んでいる。いずれも沖縄国際大学と各機関、企業との共催で行っているが、テーマ、内容について受講者側との調整を行い、大学側との共催システムが一つの方向性を示すものとして期待されている。ここ3年間は沖縄県と周辺地域の歴史、文化に関するものと、法律、文学等一般教養に関するテーマを中心に構成している。

## 4. 夏期集中講座

夏期集中講座は文字どおり夏期休暇に集中して行う講座で、期間は短いもので4日間、長いもので10日間行われる。この講座は受講者対象とテーマを絞り込み、それを連続して行うという実用性を重視したものである。「教師のための英会話特訓講座」「社会人のための英会話特訓



講座」「教師のためのワープロ講座」「社会人のためのワープロ講座」「社会人のためのコンピュータ講座」が、継続的に行われており、安定した受講者が集まっている。

## 5. 講演会

先に示した各講座は、主として沖縄国際大学の教員が講師として参加しているが、講演会は県外の著名な講師が時代に対応したテーマについて講演することがおおく、次第に人気を集めるようになってきているようで、講演会に関する市民の期待も小さくない。以下の新聞記事はその模様を具体的に伝えたいものである。

### ●公開講座に積極姿勢（琉球新報1992. 8. 14）

沖縄国際大学は年に2回のペースで公開講座を開催しているが、10日に開いた作家・島田雅彦さんの講座の参加者の多さにびっくりしたようだ。約200人が集まったが、押さえてあった教室は150人規模、50人近くが立っての聴講になったという。「公開講座というのは、あまり人が集まらないと思っていたのですが、ちょっと考え違いだったようですね」と担当者。回数が少ないということもあって、知名度もイマイチだったが、今回の盛況ぶりを目の当たりにして、「積極的に展開して行きたい」と前向きな姿勢を示した。

公開講座といえば、沖縄大学の「土曜教養講座」が人気を得ている。6月に200回を数え、それまでの聴講者は11,800人に上がった。多彩な講師陣とタイムリーなテーマが人気の秘密だが、大学の広報活動も見逃せない。マスコミや自治体への呼びかけが、このような実績の一助になったこともいうまでもない。7月には機構改革し、新たに広報課を新設した沖縄国際大学。島田さんの講座に関しては、広報活動に力を入れたという。沖国大が「開かれた大学」を目指して、市民講座に力を入れる日もそう遠くはなさそうだ。

資料(1) 南島文化市民講座開設状況（～1992年）

資料(2) 沖国大公開講座開設状況（～1992年）

資料(1) 南島文化市民講座開設状況

回	内容・テーマ	日時・場所	主催・後援	備考
1	<p>[学術講座]</p> <p>「南島民話圏の構想」 遠藤庄治（沖縄国際大学南島文化研究所研究員・沖縄国際大学助教授）</p> <p>「仏教と沖縄民俗」 平敷令治（沖縄国際大学南島文化研究所研究員・沖縄国際大学教授）</p> <p>[特別研究員芸能発表]</p> <p>箏曲合奏「作田節」ほか 与儀小枝子（与儀小枝子箏曲研究所師範） 同研究所門下生</p> <p>雑踊「花風」 玉城節子（玉城節子琉舞道場師匠）</p> <p>組踊道行「波平大主道行口説」 島袋光晴（紫の会琉舞練場師匠）</p>	<p>1980年2月2日(土)</p> <p>午後1時～ 沖縄タイムスホール</p>	<p>[主催]</p> <p>沖縄国際大学南島文化研究所、沖縄タイムス社、沖縄文化協会</p> <p>[後援]</p> <p>沖縄国際大学、沖縄県教育委員会、那覇市教育委員会、琉球放送、NHK沖縄放送局</p>	
2	<p>能と組踊りの鑑賞会</p> <p>[講演]</p> <p>「琉球における外来文化の受容」 宮城栄昌（前沖縄国際大学南島文化研究所所長）</p> <p>[能]「羽衣」出演 観世流佐野荒陵社 佐野善之 外12名</p> <p>[組踊]「銘苺子」出演 宮城能鳳 玉城節子 外7名</p> <p>指導（踊り） 宮城能造 〃（地謡） 宮里春行</p> <p>構成 宜保栄治郎（芸能研究家・南島研特別研究員）</p> <p>解説 池宮正治（南島文化研究所研究員・琉球大学助教授）</p>	<p>1981年1月31日(土)</p> <p>午後2時～5時 琉球新報ホール</p>	<p>[主催]</p> <p>沖縄国際大学南島文化研究所、琉球新報社、沖縄県</p> <p>[協賛]</p> <p>サントリー文化財団、日本航空</p>	
3	<p>[講座]</p> <p>『「戦果」と密貿易の時代』 石原昌家（沖縄国際大学助教授・南島文化研究所所員）</p> <p>『アジアを見る目』—琉球エンポリウム仮説— 玉野井芳郎（沖縄国際大学教授・南島文化研究所所員）</p> <p>[特別研究員芸能発表]</p> <p>箏曲「仲村渠節」ほか 与儀小枝子（琉球伝統箏曲・琉絃会師範） 同研究所門下生</p> <p>舞踊「本花風」 玉城節子（翔節会玉城節子琉舞道場師匠）</p> <p>組踊「高良万才」 島袋光晴（紫の会琉舞練場師匠）</p>	<p>1982年2月6日(土)</p> <p>午後2時～ 沖縄タイムスホール</p>	<p>[主催]</p> <p>沖縄国際大学南島文化研究所、沖縄タイムス社、沖縄文化協会</p>	

回	内容・テーマ	日時・場所	主催・後援	備考
4	<p><b>ミルク世界報と長者の大主</b> 〔講演〕</p> <p>「長者の大主と開闢神話」 島山 篤(沖縄国際大学南島文化研究所所員)</p> <p>「長者の大主」 大城学(沖縄県教育庁文化課専門員)</p> <p>長者の大主 舞台解説 宜保栄治郎(沖縄県教育庁文化課課長補佐)</p> <p>名護市字源河の「長者の大主」 出演 伊波興昌 外7名</p> <p>宜野座村字漢那の「長者の大主」 出演 仲間 毅 外4名</p> <p>南風原町字喜屋武「長者の大主」 出演 大城喜信 外12名</p> <p>竹富町竹富島の「ホンジャー」と「ユーヒキ」 出演 国吉栄二 外5名</p> <p>琉舞「老人老母の踊り」 出演 島袋光晴 玉城節子</p>	<p>1983年3月4日(金) 午後4時～7時30分 琉球新報ホール</p>	<p>〔主催〕 沖縄国際大学南島文化研究所、琉球新報社、 沖縄県</p> <p>〔後援〕 沖縄芸能連盟</p> <p>〔協賛〕 南西航空</p>	
5	<p><b>奄美と沖縄</b> 〔講演〕</p> <p>「先史時代の奄美と沖縄」 高宮廣衛(南島文化研究所所長)</p> <p>「奄美と沖縄—その基層にあるもの—」 山下欣一(南島文化研究所特別研究員・鹿児島経済大学助教授)</p> <p>〔奄美芸能鑑賞〕 解説「瀬戸内町油井の豊年祭について」山下欣一 ビデオ上映「瀬戸内町油井の豊年祭芸能」</p>	<p>1984年1月28日(土) 午後2時 沖縄タイムスホール</p>	<p>〔主催〕 沖縄国際大学南島文化研究所、沖縄タイムス社</p> <p>〔後援〕 琉球放送、NHK沖縄放送局</p>	
6	<p><b>南島の銘酒あわもり—講演と泡盛讃歌—</b> 〔第一部 講演〕</p> <p>「泡盛産業の課題と展望」 三輪隆夫(沖縄国際大学南島文化研究所所員)</p> <p>「泡盛と黒麹菌」 照屋比呂子(沖縄県工業試験場主任研究員)</p> <p>〔第二部 泡盛讃歌〕 創作曲・創作舞踊</p> <p>「男心の舞」作曲……………照喜名朝一 振り付け・出演…玉城節子 歌・三味線……………照喜名朝一・ 西江喜春・玉城正治 琴……………又吉八重子 笛……………大湾清光 太鼓……………与義タケ子</p> <p>喜劇 「棒しばり」出演 劇団「潮」 地謡 上江洲由孝</p>	<p>1985年1月26日(土) 午後2時～5時 琉球新報ホール</p>	<p>〔主催〕 沖縄国際大学南島文化研究所、琉球新報社、</p> <p>〔後援〕 沖縄県</p> <p>〔協賛〕 沖縄県酒造組合連合会</p>	

回	内容・テーマ	日時・場所	主催・後援	備考
7	<p>『国連婦人の10年』を回顧する</p> <p>〔講演〕</p> <p>「沖縄における女子労働の移り変わり」 比嘉輝幸（南島文化研究所所員）</p> <p>「女性の職業的地位の変遷」 南平勇夫（南島文化研究所所員）</p> <p>「沖縄における『国連婦人の10年』－ナイロビ 世界婦人会議に参加して－」 吉浜政子（沖縄県自治研修所教務主査）</p> <p>〔箏曲鑑賞〕</p> <p>創作曲「ゆんなんぎい」その他2曲 与義小枝子 他</p> <p>（琉球箏曲琉絃会代表・南島文化研究所特別研究員）</p>	<p>1986年2月1日(土)</p> <p>午後2時～5時</p> <p>沖縄タイムスホール</p>	<p>〔共催〕</p> <p>沖縄国際大学南島文化 研究所、沖縄タイムス社</p> <p>〔後援〕</p> <p>琉球放送、NHK沖縄 放送局</p> <p>〔協賛〕</p> <p>国際婦人年の行動計画 を实践する沖縄婦人団 体連絡協議会</p>	
8	<p>ゼミナール沖縄の農業－亜熱帯農業への模索－</p> <p>〔報告〕コーディネーター</p> <p>来間泰男（南島文化研究所所員）</p> <p>(1)「沖縄農業の現状と課題」 来間泰男（南島文化研究所所員）</p> <p>(2)「野菜の県外出荷『全県一』を果たして」 渡名喜一夫（知念村農協生産課長）</p> <p>(3)「亜熱帯農業への挑戦」 根間良雄（咲田組合代表理事）</p> <p>(4)「大規模畜産の現状と課題」 根間良雄（咲田組合代表理事）</p> <p>(5)「地域の『耕蓄複合農業』づくり」 大城勝正（伊江村経済課長）</p> <p>コメント 福仲 憲（琉球大学）、ほか4名</p>	<p>1987年1月28日</p> <p>琉球新報ホール</p>	<p>〔共催〕</p> <p>沖縄国際大学南島文化 研究所、琉球新報社、</p>	
9	<p>ベッテルハイム－人とその時代－</p> <p>〔報告Ⅰ〕</p> <p>「幕末の琉球をめぐる国際的環境」 仲地哲夫（南島文化研究所専任所員）</p> <p>〔報告Ⅱ〕</p> <p>「B. J. ベッテルハイムと琉球方言研究」 高橋俊三（南島文化研究所所員）</p>	<p>1988年1月27日(木)</p> <p>午後3時～5時</p> <p>沖縄タイムスホール</p>	<p>〔主催〕</p> <p>沖縄国際大学南島文化 研究所、沖縄タイムス社</p> <p>〔後援〕</p> <p>NHK沖縄放送局、琉 球放送</p>	
10	<p>〔講演〕</p> <p>「『南島論』と文学」 大城立裕（作家）</p> <p>「沖縄戦記録を通して考えたこと」 安仁屋政昭（南島文化研究所所員）</p> <p>〔琉舞鑑賞〕</p> <p>「稲真積節」 玉城節子（玉城流翔節会会主・南島研特別 研究員）</p> <p>「いちゅび小」（玉城節子振付） 比嘉涼子 他5名（玉城節子琉舞道場所属）</p> <p>「加那よ甘川」 又吉静枝（師範）・玉城千枝子（師範）</p>	<p>1989年1月28日(土)</p> <p>午後2時～5時</p> <p>琉球新報ホール</p>	<p>〔主催〕</p> <p>沖縄国際大学南島文化 研究所、琉球新報社</p> <p>〔後援〕</p> <p>NHK沖縄放送局、沖 縄テレビ放送(株)</p>	

回	内容・テーマ	日時・場所	主催・後援	備考
11	<p>〔講演〕</p> <p>「沖縄県のかまど神ー中国・奄美と比較してー」 窪 徳忠（東京大学名誉教授・南島文化研究所特別研究員）</p> <p>「いわゆる『沖縄の貧困』について」 山田 等（南島文化研究所所員）</p>	<p>1990年2月3日(土)</p> <p>午後3時～6時</p> <p>沖縄タイムスホール</p>	<p>〔主催〕</p> <p>沖縄国際大学南島文化研究所、沖縄タイムス社</p> <p>〔後援〕</p> <p>N H K 沖縄放送局、琉球放送（株）</p>	
12	<p>〔琉舞鑑賞〕</p> <p>伊野波節 玉城節子（玉城流翔節会家元、南島研特別研究員）</p> <p>谷茶前 我那覇則子（玉城流翔節会師範） 比嘉涼子（玉城流翔節会師範）</p> <p>〔講演〕</p> <p>「方言による命名ー琉球列島のメジロの方言を中心にー」 野原三義（南島研所長・沖縄国際大学教授）</p> <p>「東シナ海と列島文化」 中本正智（東京都立大学教授・南島研特別研究員）</p>	<p>1991年2月2日</p> <p>琉球新報ホール</p>	<p>〔共催〕</p> <p>沖縄国際大学南島文化研究所、琉球新報社</p> <p>〔後援〕</p> <p>N H K 沖縄放送局、沖縄テレビ放送(株)</p>	
13	<p>トートーメーと祖先崇拜</p> <p>ー東アジアにおける位牌祭祀の比較ー</p> <p>〔発表Ⅰ〕</p> <p>「沖縄の位牌祭祀」 平敷令治（南島研所員）</p> <p>〔発表Ⅱ〕</p> <p>「祖先崇拜：福建閩南と台湾における位牌祭祀」 莊英章（台湾・中央研究院民族學研究所所長）</p> <p>〔発表Ⅲ〕</p> <p>「祖先崇拜と位牌における韓国人の意識ー祖先の条件、子孫の資格ー」 崔仁鶴（韓国・仁荷大学教授）</p> <p>〔発表Ⅳ〕</p> <p>「東アジアにおける位牌のまつり」 竹田旦（創価大学教授・茨城大学名誉教授）</p>	<p>1992年2月1日(土)</p> <p>午後2時～5時</p> <p>沖縄タイムスホール</p>	<p>〔主催〕</p> <p>沖縄国際大学南島文化研究所、沖縄タイムス社</p> <p>〔後援〕</p> <p>N H K 沖縄放送局、琉球放送(株)</p>	
14	<p>沖縄の新たな可能性を求めて</p> <p>〔報告〕</p> <p>(1)「民族芸能とシマ興し」 大城學（沖縄県立博物館学芸員）</p> <p>(2)「ウチナー芝居の現状と課題」 幸喜良秀（沖縄県労働商工部文化振興課長）</p> <p>(3)「琉球音楽の国際性の背景」 杉本信夫（南島研特別研究員）</p> <p>(4)「沖縄の歴史と1990年代」 仲地哲夫（南島研専任所員）</p>	<p>1993年1月30日(土)</p> <p>午後2時～5時</p> <p>琉球新報ホール</p>	<p>〔主催〕</p> <p>沖縄国際大学南島文化研究所、琉球新報社</p> <p>〔後援〕</p> <p>N H K 沖縄放送局、沖縄テレビ放送(株)</p>	

資料(2) 沖国大公開講座開設状況

昭和61年度

1 学内定例講座

回	月 日	テーマ	講 師
1	5月31日(土)	日本語の歴史と特徴	沖縄国際大学文学部国文学科教授 高橋俊三 沖縄国際大学文学部教養部講師 ダグラス・ドライスダット
2	6月28日(土)	ことばと社会	沖縄国際大学文学部国文学科教授 遠藤庄治 沖縄国際大学短期大学部国文科助教授 浦田義和
3	7月19日(土)	日本語の語彙	沖縄国際大学法学部教授 嘉陽安則 沖縄国際大学文学部国文学科教授 野原三義 沖縄国際大学文学部教養部教授 山下祥枝
4	10月25日(土)	教育の歴史と現代	沖縄国際大学教養部教授 西平 功
5	11月22日(土)	現代学校教育の諸問題	沖縄国際大学教養部講師 杉山 緑
6	12月20日(土)	教育の社会的役割	沖縄国際大学文学部教養部教授 玉城隆雄

2 学外講座

回	月 日	テーマ	講 師
1	11月4日(火)	沖縄の信仰と生活	沖縄国際大学文学部社会学科教授 平敷令治
2	11月5日(水)	八重山の戦中と戦後	沖縄国際大学文学部社会学科教授 石原昌家
3	11月15日(土)	源氏物語について	沖縄国際大学文学部国文学科教授 三苦浩輔

3 集中講座

回	月 日	テーマ	講 師
1	8/7(木)～8/18(月)	英会話特訓講座 A	沖縄国際大学短期大学部英文科講師
2	8/25(月)～9/5(金)	英会話特訓講座 B	沖縄国際大学短期大学部英文科講師
3	8/25(月)～8/30(土)	国語教育のための ワープロ講座	沖縄国際大学文学部国文学科教授

4 講演会

回	月 日	テーマ	講 師
1	12月 日	未 定	放送大学教授 比嘉正範

司 会 ・ 討 議	時 間	場 所	受講料
沖縄国際大学文学部国文学科教授 遠藤庄治	14:00~16:00	7-201	無料
沖縄国際大学文学部国文学科講師 嘉手刈千鶴子 沖縄国際大学短期大学国文科講師 濱仲 修	14:00~16:00	7-201	無料
沖縄国際大学文学部国文学科教授 高橋俊三	14:00~16:00	7-201	無料
沖縄国際大学教養部助教授 大島正道 沖縄国際大学教養部講師 杉山 緑	14:00~16:00	9-	無料
沖縄国際大学教養部教授 西平 功	14:00~16:00	9-	無料
沖縄国際大学文学部社会学科教授 波平勇夫 沖縄国際大学教養部教授 堂前亮平	14:00~16:00	9-	無料

時 間	場 所	受講料	備 考
	宮 古	無料	後援会支部総会時に行う
	八重山	無料	後援会支部総会時に行う
	久米島	無料	後援会支部総会時に行う

師	時 間	場 所	受講料	人員	受付期間
ウイリアム・ランダル	9:30~12:30	3-203	9,000	25	7/1(火)~7/10(木)
ウイリアム・ランダル	9:30~12:30	3-203	6,000	25	7/1(火)~7/10(木)
遠藤庄治	14:00~17:00	ワープロ 教室	5,400	40	8/4(月)~8/16(土)

時 間	場 所	受講料
		無料

昭和62年度

区分	回	月 日	テ ー マ	講
学 内 定 例 講 座	1	4月25日(土)	婦人の法的地位について	沖縄国際大学法学
	2	5月23日(土)	婚姻に於ける婦人の地位	沖縄国際大学法学
	3	6月27日(土)	国際結婚に伴う法的諸問題	国際福祉相談所
	4	10月24日(土)	世界経済入門 －世界経済 今と昔－	沖縄国際大学商経
	5	11月28日(土)	日本経済入門 －日本経済の今後の動向－	沖縄国際大学商経
	6	12月19日(土)	沖縄経済入門 －ポスト国体・沖縄経済への提言－	沖縄国際大学短期
学 外 講 座	1	7月27日(月)	世界経済入門 －世界経済 今と昔－	沖縄国際大学商経
	2	7月30日(木)	日本経済入門 －日本経済の今後の動向－	沖縄国際大学商経
	3	8月3日(月)	沖縄経済入門 －経済とくらしの現状と展望－	沖縄国際大学短期
	4	12月13日(日)	親の在り方(親業)について	沖縄国際大学法学
集 中 講 座	1	8.3(月)～8.13(木)	英会話特訓講座 A (教師)	沖縄国際大学短期
	2	8.3(月)～8.13(木)	英会話特訓講座 B (学生)	沖縄国際大学教養
	3	8.3(月)～8.8(土)	教師のためのワープロ講座	沖縄国際大学文学
	4	8.3(月)～8.8(土)	社会人のためのワープロ講座	沖縄国際大学文学
	5	8.3(月)～8.8(土)	社会人のための初級コンピューター講座	沖縄国際大学商経
講 演 会	1	8月1日(土)	樹木崇拜の比較民俗学	清泉女子大学教授
	2	11月7日(土)	時代の潮流をどう読むか	P H P 研究所専務
総		計		



昭和62年12月19日 教学部 教学課

師	聴講者数内訳				備 考	
	一般	学生	職員	合計		
部法学科教授 大林文敏	8	18	18	44		
部法学科教授 福里盛雄	15	97	19	131		
ケースワーカー ケリー・正代	26	42	16	84		
学部経済学科教授 宮城辰男	16	104	15	135		
学部経済学科教授 久場政彦	16	62	15	93		
大学部経済科教授 喜久川宏	16	251	10	277		
学部経済学科教授 宮城辰男	13			13	名護中央公民館	
学部経済学科教授 久場政彦	16			16	名護中央公民館	
大学部経済科教授 喜久川宏	16			16	名護中央公民館	
部法学科教授 福里盛雄	60			60	糸満市中央公民館	
大学部英文科 講師 ウィリアム・ランダル	19			19		
部 講師 ダグラス・ドライスタット		20		20		
部国文学科教授 遠藤庄治	44			44		
部国文学科教授 遠藤庄治	37			37		
学部商学科助教授 大島直廣	20		5	25		
	直江廣治	44	107	22	173	
	江口克彦	40	320	15	375	
		406	1,021	135	1,562	

昭和63年度

区分	回	月 日	テ ー マ
学 内 定 例	1	6月25日(土)	国際化・情報化の中の企業のあり方 －国際化の中の企業戦略－
	2	7月16日(土)	国際化・情報化の中の企業のあり方 －情報化社会における会計人の役割－
	3	10月22日(土)	国際化・情報化の中の企業のあり方 －商業近代化と商店街の組織問題－
夏 期 集 中 講 座	1	8.8(月)～8.18(木)	教師のための英会話特訓講座
	2	8.1(月)～8.11(木)	学生のための英会話特訓講座
	3	8.1(月)～8.6(土)	教師のためのワープロ講座
	4	8.1(月)～8.6(土)	社会人のためのワープロ講座
	5	8.1(月)～8.4(木)	社会人のためのコンピューター講座
講 演 会	3	8月13日(土)	21世紀沖縄の経済・社会の政策と課題
	4	10月15日(土)	法曹生活30年をふりかえって
総 合 計			

平成元年度

区分	回	月 日	テ ー マ
学 内 定 例 講 座	1	6月22日(木)	北アイルランドから『民俗と国家』を考える
	2	7月8日(土)	現代アメリカの結婚の実情
	3	10月21日(土)	家庭教育の課題
	4	11月11日(土)	老年期の楽しみとしてのダンス
夏 期 集 中 講 座	1	8/1(火)～8/11(金)	教師のための英会話特訓講座
	2	7/31(月)～8/5(土)	教師のためのワープロ講座
	3	7/31(月)～8/12(土)	ワープロ4級をめざす社会人講座
	4	7/31(月)～8/3(木)	社会人のためのコンピューター講座
講 演 会	1	11月6日(月)	大学の国際化について
	2	12月21日(木)	言語を学ぶということ
総 合 計			

平成元年 3月15日 教学部 教学課

講 師	聴講者数内訳				備 考
	一般	学生	職員	合計	
商経学部商学科教授 宮平 進	8	26	12	46	
商経学部商学科教授 翁長良禎	15	191	21	227	
商経学部商学科教授 新城俊雄	20	39	11	70	
短期大学部助教授 ウィリアム・ランダール	32			32	
教養部 講師 ダラス・ドライスタット		19		19	
文学部国文学科教授 遠藤庄治	47			47	
文学部国文学科教授 遠藤庄治	43			43	
商経学部商学科助教授 大島直廣	18			18	
筑波大学社会学系講師 吉川博也	20	134	15	169	
福岡高等裁判所那覇支部長 大城光代	40	120	16	176	
	243	529	75	847	

平成2年 4月6日 教学部 教学課

講 師	聴講者数内訳				備 考
	一般	学生	職員	合計	
文学部社会学科教授 波平勇夫	0	128	11	139	
フルブライト交換教授 シャロン・ジョージアナ	15	114	17	146	
文学部社会学科教授 棚原健次	13	207	9	229	
文学部社会学科講師 山田 等	1	20	6	27	
短期大学部助教授 ウィリアム・ランダール	24	1	0	25	
文学部国文学科教授 遠藤庄治	46	0	0	46	
文学部国文学科教授 遠藤庄治	36	0	0	36	沖縄市商工会
商経学部商学科助教授 大島直廣	25	0	0	25	
マサチューセッツ大学教授 ラリー・ローゼンバーグ	4	113	16	133	
南山大学文学部教授 田中春美	5	103	12	120	
	169	686	71	926	

平成2年度

区分	回	月 日	テ ー マ
学 内 定 例 講 座	1	6月30日(土)	アメリカの酒と歴史
	2	7月21日(土)	イギリスと国際化
	3	10月20日(土)	沖縄の自然とその保全
学 外 講 座	1	7月9日(月) 13日(金)	市民大学講座「沖縄の歴史」
	2	11月12日(月) 12月10日(月)	市民大学講座「沖縄の民話」
	3	12月10日(月)	琉球の文化と文学
	4	12月13日(木)	近代の沖縄の歴史
夏 期 集 中 講 座	1	8/1(水)~8/11(土)	教師のための英会話特訓講座
	2	8/6(月)~8/11(土)	教師のためのワープロ講座
	3	8/6(月)~8/11(土)	社会人のためのワープロ講座
	4	7/30(月)~8/3(金)	社会人のためのコンピューター講座
	5	8/1(水)~8/11(土)	学生のための英会話特訓講座
講 演 会	1	6月8日(金)	情報ネットワーク化と市民社会の変容 －技術革新に対する法の役割－
	2	6月11日(土)	台湾の経済発展 －N I C S 生い立ちとその前途－
			総 合 計

講 師	聴講者数内訳				備 考
	一般	学生	職員	合計	
教養部教授 儀部景俊	6	49	9	64	
教養部教授 西平 功	8	12	9	29	
短期大学部助教授 宮城邦治	4	7	6	17	
教養部教授 安仁屋政昭	30	0	0	30	宜野湾市 中央公民館協賛
文学部国文学科教授 遠藤庄治	30	0	0	30	宜野湾市 中央公民館協賛
文学部国文学科教授 嘉手苺千鶴子	46	0	0	46	サントピア沖縄協賛
教養部教授 安仁屋政昭	50	0	0	50	サントピア沖縄協賛
文学部英文科助教授 ウィリアム・ランダール	28	0	0	28	
文学部国文学科教授 遠藤庄治	33	0	0	33	
文学部国文学科教授 遠藤庄治 琉球大学教育学部助教授 米盛徳一	26	0	0	26	
商経学部商学科助教授 大島直廣	30	0	0	30	
教養部講師 ダグラス・ドライスタット	0	31	0	31	
関西大学法学部教授 永田真三郎	7	19	9	35	
台湾東海大学教授 カクトウヨウ 郭東耀	9	18	11	38	
	307	136	44	487	

平成3年度

区分	回	月 日	テ ー マ
学 内 定 例 講 座	1	6月5日(水)	湾岸戦争とは何であったか
	2	6月11日(火)	日本の国際的役割
	3	10月26日(土)	幸せな結婚の5つの法則
	4	11月2日(土)	幸せな結婚のための備えとその実践訓練論
学 外 講 座	1	7月4日～ 7月11日	身近な法律
	2	9月19日～ 12月5日	文書(随筆)を書く
	3	1月16日～ 1月23日	くらしの中の遺伝学
夏 期 集 中 講 座	1	8月1日～ 8月12日	教師のための英会話特訓講座
	2	7月29日～ 8月3日	教師のためのワープロ講座
	3	7月29日～ 8月3日	社会人のためのワープロ講座
講 演 会	1	7月20日(土)	大学と地域 —その新しい流れ—
	2	8月10日(土)	「幻の図書館」〔ドストエフスキー、ポリヘス、チョイス、フロー ベル等にみられる作者と先行テキストとの関係〕
総 合 計			

講 師	聴講者数内訳				備 考
	一般	学生	職員	合計	
法学部教授 緑間 栄	2	76	5	83	
法学部教授 緑間 栄	1	113	3	117	
法学部教授 福里盛雄	10	3	2	15	
法学部教授 福里盛雄	20	6	6	32	
法学部教授 福里盛雄	30			30	
短期大学部教授 浦田儀和	26			26	
教養部教授 新屋敷文春	28			28	
教養部講師 ダグラス・ドライスタット			20	20	
文学部国文学科教授 遠藤庄治			34	34	
本学非常勤講師 米盛徳市	18			18	
立命館大学教授 堀田牧太郎	24		20	44	
作家 島田雅彦	180	20	15	215	
	339	218	105	642	

平成4年度

区分	回	月 日	テ ー マ
学 内 定 例 講 座	1	7月4日(土)	アメリカ合衆国という国—地理と歴史—
	2	7月11日(土)	アメリカ合衆国という国—経済と社会
	3	10月17日(土)	沖縄振興開発の課題と展望
	4	10月24日(土)	21世紀と女子労働
学 外 講 座	1	8月8日(土)	うちなあぐちの世界
	2	8月22日(土)	沖縄の民話
	3	9月26日(土)	うちなあぐちの世界
	4	10月24日(土)	日本語の敬語
	5	10月31日(土)	琉球文学の女性たち
	6	11月28日(土)	沖縄と中国の文化的関連性
	7	11月29日(日)	沖縄と中国の文化的関連性
	8	12月9日(水)	沖縄共同体の諸相
	9	12月19日(土)	民法への招待
夏 期 集 中 講 座	1	7/29(水)~8/8(土)	教師のための英会話特訓講座
	2	7/29(水)~8/8(土)	社会人のための英会話特訓講座
	3	8/3(月)~8/8(土)	教師のためのワープロ講座
	4	8/3(月)~8/8(土)	社会人のためのワープロ講座
	5	8/3(月)~8/7(金)	社会人のためのコンピューター講座
講 演 会	1	8月8日(土)	日本神話と琉球神話
	2		未 定
			総 合 計



講 師	聴講者数内訳				備 考
	一般	学生	職員	合計	
商経学部教授 来間泰男	15	52	12	79	
商経学部教授 来間泰男	13	12	12	37	
商経学部教授 嶺井 勇	16	35	9	60	
商経学部教授 嶺井 勇	19	21	4	44	
文学部教授 野原三義	10			10	宜野湾市民図書館共催市民講座
文学部教授 遠藤庄治	70			70	(株)琉球銀行共催土曜講座
文学部教授 野原三義	70			70	(株)琉球銀行共催土曜講座
文学部教授 高橋俊三	70			70	(株)琉球銀行共催土曜講座
文学部助教授 嘉手苺千鶴子	25			25	宜野湾市民図書館共催市民講座
文学部助教授 小熊 誠	40			40	(株)琉球銀行共催土曜講座
文学部助教授 小熊 誠	4			4	宜野湾市民図書館共催市民講座
教養部教授 玉城隆雄	15			15	宜野湾市民図書館共催市民講座
法学部教授 福里盛雄	30			30	石垣市教育委員会共催(婦人学級)
教養部講師 ダグラス・ドライスタット					開講せず
教養部講師 ダグラス・ドライスタット	15	11	4	30	
文学部教授 遠藤庄治	33	8		41	一般というのは教師のこと
琉球大学教育学部助教授, 米盛徳市	13	13	1	27	
短期大学部講師 砂川徹夫	26			26	
東京女子大学教授 大林太良	30	128	10	168	
	514	280	52	846	

平成5年度

I. 学内定例講座 (6月～11月頃)

回	月 日	テ ー マ
1	月 日 (土)	
2	月 日 (土)	
3	月 日 (土)	
4	月 日 (土)	

II. 学 外 講 座 (6月～2月頃) [公共団体・企業等へ学外講座案内文書発送後30講座]

回	月 日	テ ー マ
1	月 日 (土)	
2	月 日 (土)	
3	月 日 (土)	
4	月 日 (土)	

III. 集 中 講 座 (8月)

	月 日	テ ー マ	講
1	( ) ( )	教師のための英会話特訓講座	
2	( ) ( )	社会人のための英会話特訓講座	
3	( ) ( )	教師のためのワープロ講座	
4	( ) ( )	社会人のためのワープロ講座	
5	( ) ( )	社会人のためのコンピューター講座	

IV. 講演会 (6月～12月頃)

回	月 日	テ ー マ	講 師
1	月 日 (土)		
2	月 日 (土)		

#### (4) 沖縄キリスト教短期大学の公開講座

##### 1. 公開講座の目的と特性

沖縄キリスト教短期大学は沖縄では「キリ短」という愛称で親しまれている。ここでもその愛称を使わせていただく。キリ短の公開講座は

「大学の有する知的資産を広く社会に公開し、社会人、家庭人の参加を求めて、人々の知的能力や技能の向上と地域社会の発展をはかろうとするものである。大学のもつ閉鎖性をやぶって社会に門戸を開こうとするものであり、一般市民に対しては、大学に入学するという過程を経なくとも、必要な知識や技能を獲得できるという便益を得ることになる。

とくに、生涯学習の重要性が認識されている今日、本学の専門的教育機能を生かして、地域の学習センターとしての役割を担い、専門家の継続的学習をはじめ、社会、地域のニーズに応え、家庭人、社会人としての教養の高揚をはかり、地域の文化向上に資することを目的とする。その重要な手段としての公開講座の提供は必要である」

という主旨のもとで、1990年から公開講座がスタートした。沖縄県の大学公開講座のなかでは受講者のターゲットをしぼり、比較的時間をかけて専門的な知識や技能を習得してもらう、という試みである。他大学で行っている夏期講座や集中講座的性格をもっているが、それをさらに徹底したのが、キリ短公開講座の特性である。幅広い教養を身につける段階から一歩進んで、技能資格、単位取得ができる段階まで内容を高めていこうというものである。

キリ短公開講座は前期定例講座、夏期講座、後期定例講座、春期講座とに分かれており、開講当初の1990年はそれぞれ2講座、3講座、2講座、2講座、合計9講座が行われ、1991年度は合計12講座、そして1992年度は夏期講座だけで4講座、後期講座だけで6講座が開かれている。公開講座に対する市民の要望が高くなり、少しずつ講座回数が増えている。講座のテーマ、講師等の一覧表は資料編で掲げることにして、ここではその特性をよく表している講座を中心に事例をあげていく。

##### 2. 初級イタリア語講座

イタリア語講座は1990年度前期に初級、1992年度後期に中級の講座が開かれている。受講者数は初級が14人、中級が40人、社会人と学生を対象にしている。開講日時は不定期である。この科目は音楽等芸術を学ぶためにイタリアに留学を目指している人のためのもので、受講希望者がある程度集まると開講する。初級のときは4月から毎週火曜日の夜に12回にわたって、文法、会話、発音、文化・生活習慣、地理など、イタリア語とともにイタリアに関しての知識を教えた。中級は文法、文章の解説、応用会話を中心にして、10月から毎週水曜日の夜に15回にわたって開かれている。一つの外国語の基礎を学ぶためには12週では少ないという反省から、1992年度の中級イタリア語は回数が増やされた。

受講者数も飛び抜けて多くはなく、地味な講座であるが、イタリア語を覚えることに切実な人にとって、有益な講座になっている。

##### 3. カウンセリング

キリ短公開講座の中で人気の高い講座の一つである。1990年の前記に入門講座を開いた際、

受講者数が68名に達し、予定数30名を大幅に上回ったために、A、Bの二クラスにわけて講座を開いた。1990年度は前期に入門コース、後期、春期に初級コースを開講し、以後1991年の前期には中級コース、夏期講座には家族カウンセリング、後期講座には医療カウンセリングを開講している。以後この講座はキリ短公開講座には欠かすことのできる科目として定着している。今後は定員をさらに少なくして、密度の高い講座を目指している。

現在の講座の内容は学内の授業と同様レベルの高いもので、カウンセリングの基礎を学ぶとともに、カウンセラーの専門家養成にも力を入れている。その内容についての解説を『公開講座報告書1990～1991』の中から一部紹介する。

●**カウンセリング入門コース（12回）**：このコースはカウンセリングを学ぶ前の、いわば、準講座ともいべき内容で、第2回から第6回までは臨床心理学の基礎的学習を通して人間の精神構造や適応の仕方等を学習し、第7回から第11回までは、心理学における相談心理学の位置やパーソナリティの見方等について学習する。カウンセラーを志すものにとって、心理学の正しい理解とパーソナリティ理論を学習することは最も必要なことであり、相談心理学が心理学のなかでどのような位置にあり、どのような特質を持っているか学ぶことも重要である。このようなことをメントピックしながら、講師自身がある特定の理論と技法にたどりついたプロセスを一つの例として、カウンセリングの学び方を一緒に考える。

●**カウンセリング初級コース（10回）**：このコースでは臨床サイドからみた家族問題の病理を学習し、ロールプレイを通して問題を再現し、それを検討する。課程問題は家庭における人間関係の不調和、心のふれあいを失った時に健全な生活機能が阻害され、家族間の精神的な緊張、葛藤が出現することを学習する。とくにアルコール天国といわれている沖縄文化の中で飲酒による様々な問題が発生していることを紹介し、同時にアルコール進行性の病について学んでいく。

●**カウンセリング中級コース（10回）**：このコースは入門、初級コースを終えて、カウンセリングに対する一応の理論を学習した人を対象にする。カウンセリングの大切な点は受容と共感の姿勢であり、クライアントとの信頼関係をつくることが大事である。その中でパーソナリティ変容、感情の受容と理解、反応の種類や沈黙などの意味を学習する。とくに青少年問題、夫婦問題を中心にロールプレイを体験していく。

#### 4. キリスト教講座

キリスト教講座は、宗教法人沖縄キリスト教教団が設立母胎になっている当大学の最も重要視している講座であり、他の大学の追随を許さない講座でもある。牧師や信者、一般社会人を対象にして、1991年前期には「キリスト教平和学」、後期定例講座では「新訳聖書ギリシャ語入門」、1992年の後期講座では「近現代キリスト教史」の講座が開かれている。

「キリスト教平和学」は①旧約聖書における戦争と平和、②ローマ時代における教会と政治権力、③新訳聖書における教会と政治権力、④カルヴァンにおける教会と政治Ⅰ、⑤同Ⅱ、⑥『ハイデルベルグ教理問答』における国家と政治、⑦ドイツ教会闘争と『バルメン宣言』における教会と政治権力、⑧ドイツ教会闘争、⑨ドイツ福音主義教会の戦後のドイツ国家への影響、

⑩ Biosoma and Energy、⑪国家主義教育と沖縄戦、⑫『キリスト教平和学』の問題と課題というテーマで13回の講座が行われた。

担当講師は「この学問は、学問として体系化されていないが、平和は政治権力と直結し、優れてキリスト者（教会）の大きな課題であり、キリスト教の救いと不可分のかかわりをもっている。したがって、教会と政治権力との関係を『キリスト教平和学』の中に組み込むことを試みたのはよかった。しかし教養講座としてはかなりむずかしかつたのではないか」という感想を述べている。

また「新訳聖書ギリシャ語入門」、「近現代キリスト教史」もむずかしい内容という印象が強いが、受講者は忍耐強く講座を受けているようである。受講者は職業人や主婦が多いが、単なる教養講座ではなく、なかには日本キリスト教団の補教師受験希望者が参加していたからであろうという。したがって、この講座を受け、試験に合格した者は単位取得ができたならさらに有益であり、入門、初級、中級クラス、各15回の講義で合計3単位が出せるようになれば、この講座が社会的にも大きな意味が加わると思われる、と報告書は結んでいる。

このほか幼児教育、英語、女性問題、人権問題に関する講座も力を入れている講座の一つである。

以上みてきたようにキリ短公開講座の特色は、幅広い教養を身につける段階から一歩進んで、技能資格、単位取得ができる段階まで内容を高めていこうというものである。学外受講者が単位取得をするためには、大学教育のレベルまで内容を高め、受講資格、受験資格等もきびしくしていかなければならないが、開かれた大学の一つの方向性を示している。時代背景や学習ニーズは大きく異なっているが、琉球大学が開校後20年あまりにわたって行ってきた普及講座の考え方が踏襲されているように思える。

また、生涯学習の機会均等を目指し、離島地域への教育機会の拡大構想は、沖縄県の宿命的課題であるが、宗教法人沖縄キリスト教教団が設立母胎になっている当大学の特性を生かした方法を模索している。その一例として、沖縄各地に拠点を持っているキリスト教教会を活用することを考えているという。沖縄県には7団体、107カ所に及ぶ教会が設立されており、その9割近い教会が沖縄本島に集中しているが、宮古八重山地区においても12カ所の教会があり、そのほとんどの教会に牧師が勤務している。この教会を地域に根ざした学習センターとして活用していくことが構想されており、キリ短の特性がここでも発揮されようとしている。

資料(1) 沖縄キリスト教短期大学の公開講座開設状況（～1992年）

資料(2) 沖縄キリスト教短期大学公開講座のご案内（1992年度）

資料(1) 1990年度 沖縄キリスト教短期大学公開講座開設一覧

	講 座 名	担 当 者	対 象	受講者数
前 期 定例講座	初級イタリア語講座	島 袋 忠 雄	一般社会人・学生	13名
	カウンセリング入門講座	渡久地政順 座間味宗治	一般社会人	68名
夏期講座	保育所保育指針と保育の展開	喜友名静子	保育者	17名
	初心者のためのワープロ入門講座	渡久地初美	一般	18名
	図書館員のための英語	漢 那 憲 治	図書館員・関係者	22名
後 期 定例講座	カウンセリング初級コース	渡久地政順 座間味宗治	一般社会人	56名
	水墨画講座	儀 間 朝 健	一般社会人	26名
春期講座	カウンセリング初級コース	渡久地政順 座間味宗治	一般社会人	57名
	水墨画講座	儀 間 朝 健	一般社会人	16名
小 計	9 講座			293名

1991年度 沖縄キリスト教短期大学公開講座開設一覧

	講 座 名	担 当 者	対 象	受講者数
前 期 定例講座	やさしい英語教室	山 里 恵 子	一般社会人	22名
	カウンセリング中級コース	座間味宗治	〃	44名
	Surey of United States History I	Lyle Allison	中・高校英語教師及び同等の英語力のある方	
	キリスト教平和学	金城重明他	社会人及びキリスト者	18名
夏期講座	パソコン入門	大 城 宜 武	一般社会人	23名
	ワープロ講座 (中級)	渡久地初美	〃	14名
	家族カウンセリング	座間味宗治	〃	37名
後 期	やさしい英語教室 PART II	前 里 光 盛	一般社会人	30名
	Basic American Government	Lyle Allison	一般社会人及び中・高校英語教師	20名
	医療カウンセリング	座間味宗治	一般社会人	58名
	新約聖書ギリシャ語入門	神 山 繁 實	社会人及び学生	25名
特別講演会	国際化時代における女性と高等教育	原 喜 美	一般社会人	73名
小 計				387名
合 計				680名

# 公開講座のご案内

(1992年度後期定例講座)

講座名	内容	開設時期	時間	対象	受講料
◎カウンセリング入門 (講師：渡久山朝裕 本短大保育科講師)	対人関係の理解を深め、望ましい心理的交流の為に必要なカウンセリング・マインドについて理論学習と体験学習を交えながら解説する	10/15～2/18 毎週木曜日 (合計15回)	午後7時 ↓ 8時30分	一般社会人 (定員 30名)	9,200円 (プリント代 200円含)
◎情緒障害とカウンセリング (講師：座間味宗治 臨床心理士)	人間関係で悩み、適応困難になる人達へのカウンセリングを病理学的に学習し、カウンセリングのあり方をロールプレイを通して学習する。	10/15～2/18 毎週木曜日 (合計15回)	午後7時 ↓ 8時30分	一般社会人 (定員 30名)	9,200円 (プリント代 200円含)
◎近現代のキリスト教史 (講師：高崎毅志 本短大非常勤講師)	16世紀の宗教改革から現代までのキリスト教の歴史を学ぶ。各時代の思想的問題点が何であったかをも明らかにする。	10/6～2/2 毎週火曜日 (合計15回)	午後7時 ↓ 8時30分	一般社会人 (定員 40名)	9,200円 (プリント代 200円含)
◎現代社会と教育 (原学長以下 本短大教員 8人による チームティ칭ング)	家族の中の人間関係、進学や福祉の問題、また地域に移ってこられた外国人の方々との相互理解等について一緒に考える機会にしたい。	10/7～1/20 毎週水曜日 (合計13回)	午後7時 ↓ 8時30分	一般社会人 (定員 40名)	8,000円 (プリント代 200円含)
◎地求人・人間の生命と生活科学 (講師：野原正徳 本短大非常勤講師)	1. 宇宙科学の最近の話題 2. エネルギー源、超電動 3. 生命科学 4. 安全、快適なカーライフ 5. 環境汚染のしくみと防止	10/13～2/2 毎週火曜日 (合計15回)	午後7時 ↓ 8時30分	社会人及び学生 (定員 40名)	9,200円 (プリント代 200円含)
◎中級イタリア語 (講師：島袋忠雄 本短大英語科教授)	文法事項、読み物を経て応用会話へ	10/14～2/10 毎週水曜日 (合計15回)	午後7時 ↓ 8時30分	社会人及び学生 (定員 40名)	9,200円 (プリント代 200円含)

1. 申込方法：電話でお申し込み下さい。受講希望講座名、氏名、住所、電話番号(連絡先)をお知らせ下さい。申込み受け付け順に、定員まで受け付けます。
2. 受付期間：1992年9月28日(月)～10月5日(月)9:00～16:30(土曜、日曜、祝日を除く)
3. 受講費用：a. 受講料は開講日当日に企画課窓口で一括納入。(午後6時～6時45分)  
b. テキスト代等は別になります。一旦納入した受講料の払い戻しはいたしません。
4. 申込み先：沖縄キリスト教短期大学公開講座委員会 事務局企画課 Tel.098-946-1240

# 公開講座のご案内

(1992年度夏期講座)

講座名	内容	開設時期	時間	対象	受講料
◎ワープロ講座(初級) 講師：渡久地初美 本短大非常勤講師	文章作成に必要な機能 (入力・編集等)につ いて学ぶ 機種 IBM 5540 ソフト 一太限	8/3~8/7 毎日 (合計5回)	午後6時 ↓ 8時	一般社会人 (定員30名)	4,200円 (プリント代 200円を含む)
◎家族カウンセリング 講師：座間味宗治 臨床心理士	子供の非行、登校拒否、 夫婦問題、そしてアル コール問題等を個人ラ イフサイクルの中で理 解し、カウンセリング マインドのアプローチ を学んでいく。	8/3~9/10 毎週月・木 (合計10回)	午後7時 ↓ 8時30分	一般社会人 (定員 30名)	6,200円 (プリント代 200円を含む)
◎社会人のためのプログ ラム入門 講師 友利 廣 本短大英語科助教授	1. プログラムの基本 的仕組 2. プログラムの活用 (BASIC)	8/17~8/21 毎日 (合計5回)	午後7時 ↓ 9時	一般社会人 (定員 30名)	4,200円 (プリント代 200円を含む)
◎水墨画と造形 講師：儀間朝健 本短大保育科助教授	前回の(初心者のため の基礎から学ぶ)に続 く一段階上級の講座。 造形感覚トレーニング と作品づくり、そして 作品表装まで学びます。	8/21 ↓ 10/23 毎週金曜日 (合計10回)	午後7時 ↓ 8時30分	一般社会人 (定員 20名)	6,200円 (プリント代 200円を含む)

1. 申込期間：1992年7月27日(月)~7月31日(金) 9:00~16:30
2. 申込方法：電話でお申込み下さい。受講希望講座名、氏名、住所、電話番号(連絡先)をお知らせ下さい。  
申込み受付順に、定員まで受付けます。
3. 受講費用：a. 受講料は開講初日に企画課窓口で一括納入。(受講開始時間の1時間前より受付します。)  
b. テキスト代及び用具代は別になります。一旦納入した受講料の払い戻しは致しません。
4. 申込先：沖縄キリスト教短期大学公開講座委員会 事務局企画課 Tel. 098(946)1240



(5) 琉球大学の公開講座

資料 (1) 琉球大学公開講座開設状況

開催日	テ ー マ	講 師	(受講者数)
1973年(昭和48年度)【3回】			
	壮年の体力づくり		5人
	ファミリースポーツ		14
	ママさんバドミントン		5
1974年(昭和49年度)【4回】			
	精神病院の管理		30
	ファミリースポーツ		13
	パパさんバドミントン		6
	ママさんバドミントン		4
1975年(昭和50年度)【3回】			
	バドミントンコース		9
	体力増進コース		10
	少年ラグビーコース		8
1976年(昭和51年度)【2回】			
	ママさんバレーコース		12
	少年剣道コース		5
1977年(昭和52年度)【2回】			
	卓球コース		4
	ママさんバレーコース		22
1978年(昭和53年度)【2回】			
	ママさんバレーコース		12
	みんなの数学		24
1979年(昭和54年度)【2回】			
	沖縄お踊り実技講座		32
	みんなの数学		33
1982年(昭和57年度)【12回】			
7/28~30	沖縄の気候風土に適した住居の設計	鈴木雅夫(琉球大学教授)	38
7/1~22	沖縄の言語	中松竹雄(同 教授)	23
7/22~8/2	沖縄の踊り実技講座	金城光子(同 教授)	122
7/22~8/2	自閉症児の理解と指導の仕方について	吉川武彦(同 教授)	70
		中村哲雄(同 講師)	
7/28~31	手づくり増幅器による生物電気の測定		10

		本川達雄 (同 講師)	
8/1~10	少年・少女ホッケー教室	浜元盛正 (同 助教授)	8
8/2~7	みんなの数学	高久彰 (同 助教授)	51
8/10~16	書写指導者研修会	塚田清策 (信州大学教授)	28
		中松竹雄 (琉救大学教授)	
8/18~20	蚊と人間生活	宮城一郎 (同 教授)	5
8/23~28	集合と極限	赤堀隆夫 (同 助教授)	14
		本間正明 (同 助手)	
		志賀博雄 (同 助手)	
11/15~20	絵画の話	稲嶺 成 (同 教授)	25
12/13~18	初歩の陶器	新垣栄三郎 (同 助教授)	10

1983年 (昭和58年度) 【15回】

7/11~17	指導者のための水泳教室	平良 勉 (琉救大学助教授)	18
7/12~8/30	スペイン語	安井祐一 (同 教授)	32
7/16~23	くらしの中の地学 (A)	加藤祐三 (同 助教授)	10
7/25~29	小学校教師のための実戦講座		28
	(小学校教師のための表現レッスン)		
		竹内敏晴 (同 教授)	
		西村貞雄 (同 助教授)	
		中村 透 (同 助教授)	
7/26~28	自閉症児の理解と指導について		30
		中村哲雄 (同 助教授)	
7/29~31	造礁サンゴの観察	西平守孝 (同 教授)	16
		酒井一彦 (同 助手)	
8/1~6	水彩画	稲嶺 成 (同 助教授)	44
8/1~6	みんなの数学 (コンピューター・サイエンス)		43
		高久 章 (同 助教授)	
8/1~11	家庭婦人バレーボール指導者養成講習会		22
		浜元盛正 (同 助教授)	
8/6.13.20.27			
	沖縄の気候・風土に適した住居の設計 (A)		25
		鈴木雅夫 (同 教授)	
8/10~11	成人病講座	正義之 (同 教授)	61
8/15~19	小学校教師のための実戦講座		18
	(教材教具制作実習)	吉田一晴 (同 教授)	
		西村貞夫 (同 助教授)	
		藤原幸雄 (同 助教授)	

		比嘉善一 (同 助教授)	
8/15~19	くらしの地学 (B)	加藤祐三 (同 助教授)	6
8/29~31	沖縄の気候・風土に適した住居の設計 (B)		
		鈴木雅夫 (同 教授)	25
9/3~24	新しい町づくりの方法	池田孝之 (同 助教授)	15
1984年 (昭和59年度) 【24回】			
7/10~14	シェイクスピアのヒロインたち		1
		吉村 清 (琉教大学助教授)	
7/10~20	社会人・教師のための初心者水泳教室		30
		平良 勉 (同 教授)	
7/11~8/29	スペイン語	安井祐一 (同 教授)	28
7/16~21	初心者のためのバドミントン教室		8
		新屋信雄 (同 講師)	
7/25~30	沖縄県の方言	中松竹雄 (同 教授)	3
		名嘉真三成 (同 助手)	
7/25~8/4	家庭婦人バレーボール指導者養成講習会		15
		浜元盛正 (同 助教授)	
7/26~28	自閉児の理解と指導	中村哲雄 (同 助教授)	29
7/28~12/8	現代都市問題講座	池田孝之 (同 助教授)	58
8/1~4	園芸の基礎 (講義)	比嘉照夫 (同 教授)	16
8/1~4	同 (実習)	米盛重保 (同 助手)	16
8/1~4	森の自然	中須賀常雄 (同 助教授)	他2名 19
8/1~15	栽培ランのサイエンス	上里健次 (同 助教授)	39
8/4~9/2	くらしの中の地学	加藤祐三 (同 助教授)	14
8/6~8	植物の野外観察	烏袋敬一 (同 教授)	25
		宮城 一 (同 講師)	
		横田昌嗣 (同 助手)	
8/6~10	地方自治の現代的課題	仲地博 (同 短大助教授)	29
8/9~14	都市・住環境教育のための試み		10
		池田孝之 (同 助教授)	
8/13~15	建物の発 に関する教材作製		6
		上原剛 (同 助教授)	
8/22~23	高齢化社会への医学的対応		39
		赤松隆 (同 教授)	
		三村悟郎 (同 教授)	
		鈴木信 (同 教授)	
		奥村 夫 (同 助教授)	

8/24~29	銅版画・リトグラフ	神山泰治（同 助教授） 永津禎三（同 講師）	8
8/27~9/31	誰にでもピカソは「わかる」	小林正秀（同 助手）	13
9/14~16	造礁サンゴの観察	西平守孝（同 教授） 酒井一彦（同 助手）	14
10/15~25	理科教師のための評価技法	吉田一晴（同 教授） 他2名	13
11/17~18	くらしの中の地学	加藤祐三（同 助教授）	7
11/20~25	沖縄の踊り実技講座	金城光子（同 教授） 他1名	51
1985年（昭和60年度）【26回】			
7/1~3	造園	諸見里秀幸他（同 教授）	8
7/1~5	施設園芸の実際	米盛重保（同 助手）	6
7/8~12	家庭菜園の実際	米盛重保（同 助手）	14
7/10~13	園芸の基礎	比嘉照夫（同 教授）	25
7/14~23	教師・社会人のための初心者水泳教室	平良勉（同 教授）	29
7/20~21	現代都市問題講座（第2回）	池田孝之（同 助教授）	25
7/21~28	沖縄の踊り実技講座	金城光子他（同 教授）	67
7/23~28	理科教師のための評価技法	吉田一晴他（同 教授）	5
7/24~26	自閉児の理解と指導	中村哲雄（琉球大学教授）	30
7/25~29	ピアノってこわくない ーピアノプレイング即効法ー	瀬戸郁子（同 助手）	31
7/29~8/2	書写教育指導者養成講座	中松竹雄他（同 教授）	38
7/29~8/2	気象の理	中村功他（同 助教授）	4
7/29~8/3	みんなのバレーボール教室	浜元盛正（同 助教授）	18
8/1~4	森の自然	中須賀常雄（同 助教授）	21
8/2~30	土づくりの科学 ー土の反応についてー	大屋一弘（同 教授）	17
8/3~13	鉱物採集の旅	加藤祐三（同 助教授）	16
8/5~7	効果的な発  とスライド製作技術	川島由次（同 助教授）	14
8/5~9	栽培ランのサイエンス	上里健次（同 助教授）	36
8/17~18	沖縄の火山・地震と宅地の選び方		14

		加藤祐三 (同 助教授)	
8/19~22	石の見方・調べ方	加藤祐三 (同 助教授)	15
8/19~23	熱帯園芸詳論	比嘉照夫 (同 教授)	3
8/19~28	技術者のための有限要素法入門		9
		上野正実 (同 助教授)	
8/21~22	糖尿病と共に生きるには	三村吾郎他 (同 教授)	35
8/24~26	造礁サンゴの観察	西平守孝他 (同 教授)	16
9/7~11/2	沖縄の住宅・都市・地域環境を考える		26
		池田孝之 (同 助教授)	
11/1~2/	教師のための言語学入門	上村幸雄 (同 教授)	89

#### 1986年(昭和61年度)【28回】

6/21~8/21	役にたつ微生物		17
7/1~4	園芸の基礎		30
7/8~10	亜熱帯の蚕糸生産—桑の栽培から生糸まで—		34
7/21~30	初心者のためのバドミントン教室		30
7/23~25	農業とコンピューター		4
7/28~31	光合成からみた沖縄の有用植物		2
7/31~8/6	地学巡検—八重山—		18
8/1~4	森の自然		20
8/2~7	琉球弧の海底と地質		4
8/2~30	木の不思議		10
8/4~8	初心者のためのテニス教室		40
8/4~8	栽培ランのサイエンス		16
8/4~8	熱帯園芸詳論		12
8/4~8	野菜栽培の基本技術		41
8/4~8	科学構造式の見方・考え方		16
8/5~22	効果的な発表とスライド製作技術		6
8/6~9	わかり易い住居の指導		15
8/11~15	野菜栽培の基本技術		14
8/11~22	わかり易い測量とその実施		6
8/13~17	石の見方・調べ方		16
8/21~31	交流分析によるカウンセリング		30
8/23~24	沖縄の火山・地震と宅地の選び方		10
8/23~25	造礁サンゴの観察		9
9/3~4	ウイルス感染—最近の話題		46
10/11~11/1	バイオテクノロジー講座		12
10/13~14	都市再開発手法の仕組みと実際—沖縄の都市改善に向けて—		88

1/10~3/14	植物培養の初歩		22
2/21~3/21	きれいな牛乳のできるまで		3
1987年（昭和62年度）【22回】			
6/27~28	腎移植はなぜ遅れているか		183
7/7~8/28	スペイン語講座		47
7/8~10	亜熱帯の蚕糸生産（桑の栽培から生糸まで）		29
7/13~16	園芸の基礎		15
7/20~26, 7/31~8/3	教師・社会人のための初心者水泳教室		25
		平良勉（琉球大学教授）	
7/29~8/15	計算機科学入門	喜屋武盛基（同 教授）	24
		中前栄八郎（広島大学教授）	
		瑞慶覧長定（琉球大学助教授）	
		山下勝巳（同 助手）	
		石田力（同 助手）	
		高良富夫（同 助手）	
8/1~3	造礁サンゴの観察	西平守孝（同 教授）	18
		酒井一彦（同 助手）	
8/1~4	森の自然	中須賀常雄（同 助教授）	20
8/1~6	琉球弧の地質と海底		9
		氏家宏（同 教授）	
8/1~7	書写・書道指導者養成講座		30
		中松竹雄（同 教授）	
		塚田清策（元信州大学教授）	
8/3~5	効果的な発表とスライド製作技術		20
		川島由次（琉球大学助教授）	
8/8~9	木の不思議—木の使い方		17
	・木器のかたち	新垣吉紀（沖縄県工芸指導所）	
	・木器の化粧	伊波正和（同 教授）	
	・木を削る	藤元嘉安（琉球大学助手）	
	・木造りの家	福島駿介（同 助教授）	
	・木の強さ	林弘也（同 助教授）	
	・木の耐久性	屋我嗣良（同 教授）	
8/8~10	沖縄本島の地質巡検と海底調査入門		10
		氏家宏（同 教授）	
8/10~13	園芸の基礎	比嘉照夫（同 教授）	46
8/15, 22~24	地学巡検—久米島	加藤祐三（同 助教授）	24

8/17~21	野菜栽培の基本技術	米盛重保 (同 助手)	21
8/24~26	交流分析によるカウンセリングの実際	新里里春 (同 助教授)	62
9/5~26	バイオテクノロジー講座	与那覇和雄 (同 助教授)	11
9/12~13	沖縄の火山・地震と宅地の選び方	加藤祐三 (同 助教授)	15
10/1~3	沖縄型住宅を考える	鈴木雅夫 (同 教授)	36
11/4~5	沖縄の都市緑化とランドスケープデザイン	池田孝之 (同 教授)	70
		近藤公夫 (奈良女子大学教授)	
		小葉京子 (琉球大学講師)	
		山本紀久 (愛植物設計事務所)	
1/15~17	子ども・家庭・地域講座	浅野 誠 (同 助教授)	9
		金城 昇 (同 講師)	
		新里里春 (同 助教授)	
		新垣都代子 (同 教授)	
		花城梨枝子 (同 助手)	
		真栄城勉 (同 助手)	
		松田武雄 (同 助手)	
		小橋川久光 (同 教授)	

1988年 (昭和63年度) 【28回】

5/14~6/25	中・高校生・市民のためのわかり易い科学教室		50
6/25~26	腎移植 (特に非血縁者献腎による) の実際と推進		81
7/5~8/30	スペイン語講座		28
7/11~13	亜熱帯の蚕糸生産<特色ある琉球シルク生産のために>		28
7/11~15	農業の法学		20
7/15~24	教師・社会人のための初心者水泳教室		27
7/18~30	パソコンBASIC活用講座		20
	—プログラミングの基礎からロボット制御まで—		
7/25~8/13	計算機科学入門		18
7/26~28	園芸		31
8/1~3	効果的な発表とスライド製作技術		8
8/1~4	森の自然		25
8/1~5	栽培ランのサイエンス		17
8/1~12	わかりやすい測量誤差の処理法		6
8/3~9	書写書道指導者養成講座		36
8/6~7	木の不思議		9

8/6~14	地質巡検—栗国島	17
8/8~11	交流分析によるカウンセリングの実際	61
8/8~12	やさしい土壌学	17
8/13~15	造礁サンゴの観察	17
8/15~22	地方自治の理念と課題	37
8/22~31	健康水泳教室（喘息児対象）	13
8/27~28	サンゴ礁のフィールドウォッチング<星砂の仲間達>	13
8/29~31	園芸 —1	57
9/10~11	沖縄の火山・地震と宅地の選び方	13
9/30~10/1	まちづくりのための法律と制度	100
10/11~15	野菜栽培の基本技術	9
10/22~12/10	おもしろい物理学	10
11/10~12	園芸 —2	40
1989年（平成元年度）【24回】		
7/11~15	農業の法学	10
7/17~21	野菜栽培の基本技術	9
7/24~29	野菜の溶液栽培法	10
7/25~8/5	コンピューター科学入門	26
7/25~9/22	市民講座—スペイン語—	18
7/30~8/6	歌う生物学	24
7/31~8/4	デンドロビウム栽培のサイエンス	12
8/1~4	森の自然	22
8/1~4	土壌と土づくりのはなし	8
8/5~6	くらしの中の放射能	6
8/5~6	植物繊維と染色—木の不思議—	30
8/7~9	園芸 —1	38
8/7~9	効果的な発表とスライド製作技術	9
8/7~10	交流分析によるカウンセリングの実際	61
	新里里春（同 教授）	
	大嶺和男（県立中部商業高校教諭）	
	金城好江（防衛技官看護婦）	
8/19~22	地学巡検—宮古諸島—	20
8/20~29	教師・社会人のための初心者水泳教室	29
	平良 勉（同 教授）	
8/21~26	健康水泳教室（主として喘息児対象）	7
	真栄城勉（同 助手）	
	金城文雄（同 助手）	



8/25~27	中高校生・市民のためのわかりやすい科学教室		36
8/25~31	書写・書道指導者養成講座		21
		中松竹雄（同 教授）	
		塚田清策（元信州大学教授）	
8/26~28	造礁サンゴの観察	西平守孝（同 教授）	16
		酒井一彦（同 助手）	
9/23~24	おもしろ物理学	矢ヶ崎克馬（同 助教授）	9
		山城 健（同 助手）	
		堺英二郎（同 助手）	
9/29~30	沖縄のリゾート開発を考える		98
10/21,22,28	沖縄の火山・地震と宅地の選び方		7
		加藤祐三（同 助教授）	
11/9~17	園芸 一2	比嘉照夫（同 教授）	35
1990年（平成2年度）【33回】			
3/10	泌尿器科の新しい治療法	大澤 炯（同 教授） 他3名	10
7/11~13	園芸 1-2	比嘉照夫（同 教授）	28
7/14~21	教師・社会人のための初心者水泳教室		
7/23~27	染色の世界	片岡 淳（同 講師）	13
7/23~30	造礁サンゴの観察	西井守孝（同 教授） 他1名	9
7/23~9/20	教養講座 スペイン語	安井祐一（同 教授）	19
7/23~8/4	ドイツ語入門講座1	片岡満寿男（同 助教授） 他3名	22
7/23~8/4	ドイツ語入門講座2	片岡満寿男（同 助教授） 他3名	28
		平良 勉（同 教授）	17
7/23~8/2	コンピュータ入門	喜屋武盛基（同 教授）	24
7/26~30	養護教諭のためのパソコン実技講座		
		新屋信雄（同 助教授）	25
7/28~8/4	やさしい土壌学	渡嘉敷義浩（同 教授）	3
7/28~29	沖縄の森と樹—樹の不思議—		4
		諸見里秀宰（同 教授） 他5名	
7/30~8/3	生体成分を見る—やさしい有機科学入門		2
		国吉正之（同 教授）	
8/ 1~4	森の自然	中須賀常雄（同 助教授）	14
8/ 1~7	沖縄語会話入門	中松竹雄（同 教授）	15
8/ 2~3	プロジェクターによる演示・実験法と折紙によるモデルの作り方		

	桂 幸昭 ( 同 教授)	4
8/ 3~5	与那国島の地形と地質 氏家 宏 ( 同 教授)	5
8/ 4~5	身近な生き物の世界で遊ぶ 磯、干潟の生き物の観察 土屋 誠 ( 同 教授)	15
8/ 6~9	交流分析によるカウンセリングの実際 (初級) 新里里春 ( 同 教授) 他 1 名	50
8/ 6~8	効果的な発表とスライド製作技術 川島由次 ( 同 助教授)	3
8/6~10	デンドロビウム栽培のサイエンス 上里健次 ( 同 助教授)	1
8/14~16	交流分析によるカウンセリングの実際 (中級) 新里里春 ( 同 教授)	36
8/18~20	地学巡検徳之島 加藤祐三 ( 同 教授)	21
8/20~25	楽しいオペレッタづくり 中村透 ( 同 助教授) 他 2 名	21
8/20~28	書写書道指導者養成講座 (VI) 中松竹雄 ( 同 教授)	13
8/24~26	中・高校生と市民のためのわかりやすい科学教室 上原 剛 ( 同 助教授) 他 7 名	6
8/25~26	身近な生き物の世界で遊ぶ 植物のかたちの観察と野外観察 宮城康一 ( 同 講師)	6
9/8~10/6	少年サッカー指導者のためスポーツ指導法 真栄城勉 (琉球大学助手)	5
9/23	亜熱帯都市・沖縄の景観デザイン 池田孝之 ( 同 教授)	100
9/23~24	身近な生き物の世界で遊ぶ 陸棲動物の観察 太田英利 ( 同 助手)	6
10/15~19	園芸 1-1 比嘉照夫 ( 同 教授)	27
11/10~25	造礁サンゴの分類実習 1 西平守孝 ( 同 教授)	10
12/8~16	沖縄の火山地震と宅地の選び方 加藤祐三 ( 同 教授)	6

1991年 (平成3年度) 【23回】

2/17~22	園芸 1-1 比嘉照夫 ( 同 教授)	28
7/14~23	教師、社会人のための初心者水泳教室 平良勉 ( 同 教授)	30
7/22~8/3	ドイツ語入門講座 A (宮古) 吉井巧一 (同 助教授) 他 2 名	11
7/22~8/3	ドイツ語入門講座 B (宮古) 吉井巧一 (同 助教授) 他 2 名	15

7/22~9/9	基礎講座・スペイン語・スペイン文化		
		安井祐一 (同 教授)	18
7/23~25	中・高校生と市民のためのわかりやすい科学教室		
		酒井一彦 (同 講師) 他1名	17
7/26~30	養護教諭のためのパソコン実技講座 (初級)		20
		新屋信雄 (同 助教授)	
7/31~8/3	森の自然	中須賀常雄 (同 助教授)	20
8/3~4	沖縄本島中・南部における造成地、宅地の見分け方1 —その地質学的根拠—	氏家 宏 (同 教授)	8
8/5~8	交流分析によるカウンセリングの実際 (初級)		
		新里里春 (同 教授) 他1名	55
8/6~8	土壌の話	渡嘉敷義浩 (同 教授)	3
8/6~8	効果的な発表とスライド製作技術		7
		川島由次 (同 助教授)	
8/8~10	サンゴ礁湖の動物の採集と観察		5
		弥益輝文 (同 助教授)	
8/17~18	身近な生き物の世界で遊ぶ 植物のかたちの観察と野外観察		12
		横田昌嗣 (同 助手)	
8/17~19	造礁サンゴの観察	西井守孝 (同 教授) 他1名	13
8/26~29	養護教諭のためのパソコン実技講座 (中級)		20
		新屋信雄 (同 助教授)	
8/26~27	身近な生き物の世界で遊ぶ 磯、干潟の生き物の観察		16
		土屋 誠 (同 教授)	
8/29~9/1	地学巡検 与論、沖永良部	加藤祐三 (同 教授)	23
9/15~16	身近な生き物の世界で遊ぶ 陸棲動物の観察		2
		太田英利 (同 助手)	
9/28	リゾート開発 その後	池田孝之 (同 教授)	98
10/3~11/28	ドイツ語入門講座C (本島)	田村康夫 (同 講師) 他1名	8
10/5~6	沖縄本島中・南部における造成地、宅地の見分け方1 —その地質学的根拠—	氏家 宏 (同 教授)	
10/28~11/1	園芸1-1	比嘉照夫 (同 教授)	34
H4 3/8	腎臓を守る医学—沖縄での発展		58
		大澤 炯 (同 教授) 他7名	

## (6) 沖縄県における大学公開講座の特性

以上述べてきたように、沖縄県の「開かれた大学」という考え方は、関係者の努力によって沖縄社会のなかに深く浸透している。そして高等教育の社会還元と、教育、あるいは学習の場を、社会のなかに求めていくという考え方は、地域の大学が果たすべき役割の一つとして、大学関係者も一般市民もごく普通に受けとめているという観が深い。

沖縄県における大学公開講座にはいくつかの特性があった。その一つは何度も述べてきたように、地域に根ざした大学がその役割を充分認識し、大学設立当初から地域社会のニーズに応じて大学開放の体制をとってきたことである。それはどの大学にもみられたが、とくに琉球大学の校外普及課の設置と種々の普及講座の実践、沖縄大学の土曜講座等によくあらわれている。

第二点は、沖縄において「沖縄学」を確立していこうという試みが、はっきりあらわれていることである。各大学の公開講座のテーマをみていくと、沖縄の自然、地理、歴史、文化、生活、芸能、工芸などをテーマとしたものが卓越し、考古学、歴史学、文化人類学、民俗学、言語学、社会学、建築学、海洋学、生物学、農学などの分野から、専門的な調査研究がなされ、その成果が次から次へと公開されていく。ここでは、沖縄学の総合的研究を目指している沖縄国際大学の南島文化研究所と、その市民講座についてやや詳しく報告した。

沖縄県は自然科学の分野においても、また人文科学分野においても、その研究課題が多く、宝の島という意識をもっている研究者は多い。したがって沖縄関係の出版物は驚くほど多く、厚さ2センチほどの出版物案内（『奄美・沖縄学文献資料目録』（ロマン書房本店）には、おおよそ6400冊ほどの単行本や報告書が紹介されている。1冊1冊数えるのがいやになるほどの多さであり、全国的にみても特筆に値する。

第三点は、上記の積み重ねを単なる研究に終わらせるのではなく、地域社会に還元する姿勢が強くみられることである。それは第一点で指摘したことを確実に受けとめ、受け継いでいるように思われる。第二次世界大戦後まもなくの時期と現在とは、講座のテーマも、受講者層も、時代背景も、まったく異なっているけれども、大学も市民も地域にどっしりと根をはって、過去を見つめ将来を考える、という姿勢は変わっていない。とくに沖縄の現状と将来はきびしいものがあり、それだけに「沖縄の現在を考える」「沖縄の将来を考える」という講座やシンポジウムが精力的に開かれ、これに大学人と市民が積極的に参加している。

第四点は、上記の問題と関係が深いのであるが、どの大学においても、離島住民への配慮がなされていることである。大学内や沖縄本島での公開講座だけでなく、定例的に、またテーマによっては積極的に離島に出かけて行って、そこで講座やシンポジウムを開く。とくに沖縄大学の琉球弧多動市民大学は、沖縄県内だけでなく奄美大島を含めた地域を対象にしており、講座の開かれた地域の住民は、一応にこれを歓迎している。沖縄キリスト教短期大学の地域の教会を活用した講座の試みも、今後期待したい事業である。教育の機会均等という考え方が浸透しはじめていることを強く感ずる。

第五点以降は講座運営の技術的問題になるが、大学公開講座が地域の団体との提携によってうまく動き出していることである。大学側においては経済的負担を軽減し、一方地域においては不足している市民講座の講師を確保するという利点がある。地域の教育委員会、公民館、図書館、博物館等では、独自の市民講座を開催しているが、テーマと講師の不足によりうまく

回転していない講座が少なくない。また市民講座と称して趣味や娯楽に関するサークル活動や、催し物の比率が高いことも事実である。このような状況のなかで、大学公開講座が市民のなかに入り込んでいくことは、高度な学習を目指している市民にとっても歓迎すべきことであり、しかも地域と提携できている講座が活気を帯びているのが現状である。

第六点は地元マスコミの協力である。とくに地元の新聞社が積極的にこれらの講座をバックアップしており、公開講座に関する情報提供とともに、講座の内容についても詳しく報道する。公開講座が開かれる数日前には日時、テーマ、講師紹介が行われ、講座が終了した翌日には、その内容についての紹介、コメント等がのせられる。これによって市民が講座の所在や内容を知り、工作上必要な講座や興味のある講座の情報を容易に得ることができる仕組みができあがっている。またマスコミは情報提供するだけでなく、会場の提供、大学と共催してシンポジウムを開くなど、積極的な姿勢が強く感じられる。

沖縄県における大学公開講座についての報告はこれで終わるが、このほかに放送大学沖縄ビデオ学習センターの事業、放送教育開発センターが主要な事業として行っている「放送による大学公開講座」等がある。これらの事業は、沖縄県の「開かれた大学」をみていく上では欠かすことのできない要素であるが、紙面の関係上別の機会に報告する予定である。なお後者に対しては、年度ごとの実績報告書が刊行されている。

しかしながら冒頭に述べたように、放送大学沖縄ビデオ学習センターの役割、放送による大学公開講座の役割を考えていく上で、そして放送大学の全国放送化に向けての基礎的資料として、今日沖縄県で行われている大学公開講座の実状、およびその歴史を把握しておくことは重要である。

離島を多く抱えた沖縄県において、種々のメディアを活用して学習機会の提供は有効であり、今後放送大学や放送教育開発センターの役割はさらに大きくなっていくであろう。ゆえに、今日まで蓄積を重ねてきた県内の大学の業績を充分認識して、お互いの役割分担を確認し、沖縄県民にとってよりよい高等教育の学習の場を提供していくことが、最優先されなければならないからである。

## (7) 大学公開講座に関する意見

大学公開講座については、その記録や新聞記事のほかに、多くの人々が関心をいただいている。そのため講座にたいする注文も少なくない。しかしながら大方は肯定的に受けとめており、今後の期待度もそうとう高い。ここではその代表的な意見を若干ではあるが紹介してみたい。

### 1. 授業での活用（平山清武氏・琉球大学医学部教授）

第二次世界大戦中に青年期をむかえて、思うように勉強できなかった人たちが、たいへん熱心に受講にきている。また、米軍の占領時代はたいへん生活が苦しかったので、なかなか勉強できなかったような人々が沖縄には少なくない。50代をすぎて夜間大学に通っているサラリーマンや看護婦さんが何人か受講にきていた。このような人はテーマが変わっても勉強にきており、よく話を聞いてみると、もっと若いときに大学にいきたかったという。そして、単位の認

定をしてほしいという人がでてくる。単位認定、単位互換といった話はまだ正式に教授会で討議されていないが、いずれ考えなければならないと思う。

放送による大学公開講座を担当された先生のなかには、自分の授業のなかで使っている先生がいる。自分が担当した番組は比較的使いやすいので、主として一般教養科目を教養過程の学生にたいしておこなう。90分の講義時間のうち、45分をビデオ視聴にあて、残りの45分でいいたりなかった部分の話を補足していく。教材ビデオを使うときは、前もって講義の予告をして、学生に教科書をわたしておいて、15回の講義のうち、5回程度一緒にみる。そして試験をしてきていれば単位を与えている。講義の内容について学生の話の聞いてみると、否定的な応えはかえってきていない。しかし、一般の教室に視聴覚の設備が整っていないので、設備の問題が課題になると思う。

## 2. 地元教委の対応（石垣博孝氏・石垣市教育委員会）

宮古、八重山において開催された大学公開講座は、沖縄大学が一番早かった。沖縄大学の主催で、地域の教育委員会の後援、そして沖大同窓会の地域支部が協力するという形で行っている琉球弧縦断移動市民大学は、1976年（昭和51年）に始まっている。鹿児島県奄美諸島から、沖縄県与那国島まで約1千キロにおよぶ琉球弧（西南諸島）を対象とした移動市民大学講座である。この年の2月7日に「大学と社会」「沖縄の歴史」「暮らしと法律」の3講座が宮古島の平良市市民会館で開かれ、翌8日には同じテーマで石垣市の八重山教育会館で開かれている。

沖縄大学の大学公開講座は土曜教養講座と銘うって、1976年に沖縄大学のキャンパスで始まったが、これを大学のない奄美大島、宮古、八重山地方にまで広げていこうという試みであった。石垣市の教育委員会ではこの講座を受け入れるために、沖縄大学の公開講座委員会と役割分担をして対処した。教育委員会では予算を組み、大学側に渡し、そのほかポスターや看板づくり、会場づくり、広報や各種団体に声をかけて人集めなどをおこない、一方、大学側はその予算を使って資料づくり、講師依頼、講師派遣をする。この講座を開催するために、大学側と数回打ち合わせをおこなっているが、学長が率先して講座として来島するなど、各先生方がとても熱心に対応してくれたという。

この公開講座のいい点は、講座が修了した時点で、すべての講座を受講した人には終了証書をもらうことができるので励みがでること、沖縄大学の先生だけでなく、琉球大学や沖縄国際大学、またその道の専門家など、幅広い分野で活躍している講師を連れてきてくれるので、役にたつことが多いなど、島の人々の評判はいいようである。そのかわり教育委員会では、欠席が多く継続的に受講しない人にたいしては、次の講座から受付をしない、というきびしい措置をとっている。

一方、宮古、八重山地域における琉球大学の公開講座は、沖縄大学のそれより2年ほど遅れて発足した。そのころはすでに沖縄大学の公開講座が動き出していたので、事前の打ち合わせ、広報へ掲載してプログラムや内容の紹介をするなど、地元では全面的な協力体制ができなかった。琉球大学から連絡がくると、友人などに声をかけて参加者を集め、また会場を整えるだけで、その場その場の体裁を整えることしかできなかったという。また、流大の場合は難しい講座や地味な講座が多かったので、人の集まりは今一つであった。

宮古、八重山などの離島地域では、学問に対して積極的に取り組もうという意欲をもった人が少なくない。放送を使って番組を流すのもいい方法であるが、テレビやラジオの場合は、時間帯によってはチャンネル争いが起こる可能性が高いから、この地域ではまだ一カ所に集めて講座をひらいたほうがいいと思う。土曜日の午後など、時間を決めれば多くの人が集まるし、博物館学芸員や教員などの資格や単位が与えられれば、大変な魅力になるので皆喜んで受講に来る。この地域での公開講座は、まだまだ需要はたくさんあると思う。

### 3. 公開講座の効用 池間作一氏（宮古テレビ伊良部営業所）

琉球大学やそのほかの私立大学でおこなっている大学公開講座は、講座のテーマによっては、たいへん役にたつものがある。たとえば、昭和63年におこなわれた琉球大学の放送による公開講座のなかで、「工学における諸問題」という講座があった。離島に住んでいると、送電線や建物、自動車等が煙害によって被害を受けることが少なくない。伊良部島では宮古テレビの本局から送られてきた映像をアルミ合金製のケーブルによって各家に流しているが、一般には10年もつといわれているものが、伊良部島では塩害によって5年ほどしかもたない。とくにケーブルの分配部分と端末が弱く、突然腐食して切れてしまうのであるが、その理由がよくわからなかった。

公開講座を受けた結果、塩分に含まれているイオンによって腐食が発生し、その部分に電流が流れることによって、さらに腐食を加速するという。そこで送電線に腐食が始まると、すぐにその部分を取り替えるようにしている。以前はケーブル全体を痛めてしまっていたものが、腐食したケーブルの分配部分と端末を取り替えることによって、ケーブル自体の腐食を防ぐことができるようになった。つまり、腐食の原因とそのメカニズムを知ることによって、事前に対策をとれるようになった。

この事例のように、大学公開講座で学んだことを仕事に役立てることが最大の効用であり、私の関心事であるが、このほかに一般的な教養を高めたり、趣味を生かしたりできるので、関心をもっている人は少なくないと思う。しかし現実の問題として、とくに第一次産業に従事している人々はなかなか出席できないのではないか。せっかく産業問題や漁業問題、環境問題などを取り上げてくれているのに、講座に出席している人々の多くは、役場の職員、農協や漁協の職員、そのほかサラリーマンが多いのが現状である。

全般的にみて伊良部島では、まだ大学公開講座の関心は薄いように思う。放送による大学公開講座では、テレビやラジオで聞いている人はあると思うが、スクーリングにでてくる人はほんの僅かである。せっかく琉球大学から先生がきてくれるのに、申し訳ないと思う。40人の応募者があったのにもかかわらず、私一人しか出席しなかったことがあった。おかげで知りたかったことを集中的に質問ができて、たいへん役に立った。

また、テレビでの放送は実際に映像をみて、自分の目で確認ができるので、理解がはやい。たとえば、宮古島周辺の海が汚れているといわれても、なかなか理解できないが、農業構造改善事業のために赤い土が海に流れ込んでいる姿や、肥料の使いすぎ、また農薬や科学物質が海に流れ込んでいるために、海が汚れ、珊瑚が確実に死んでいる姿を映像で見ると、これは大変なことになっているなどと思う。しかし、大方の人々は理解できていない。

しかしながら、海の汚れや珊瑚の死に対して、役場内でも農林関係と漁業関係で異なった意見を持ち、その対策も徹底できないでいるようだ。海を汚しているのは陸上からだけではない。魚を取る場合もセイサンカリや漂白剤などの薬品を使って、魚を仮死常態にしておいて魚を取ることがある。薬品を使うと簡単に取ることができるし、少しでも漁が多い方がいいからである。しかしそれでは漁師自体が体を痛めるし、珊瑚も死んでしまう。そのようなときに、科学的な目をもって映像を作成し、それを多くの人々にみせることによって、住民の意識が高揚していくことができるのではないかと思う。時によって映像は文字や話よりも大きな力を発揮する。

#### 4. 大学公開講座に望むこと（武富進氏・伊良部町役場）

沖縄県では琉球大学をはじめとして、3私立大学が精力的に大学公開講座を実施している。この大学公開講座は、なるべく多くの地域の人々が参加できるような時間帯に設定することが望ましい。個人で受講するのもいいが、グループで受講して、提案された問題に対して討議をする、そしてグループで実践してみることができるからで、その積み重ねが大事なことではないか。それにたいして会場の準備、講師料、研究グループにたいする補助、先進地の見学、製品が流通するための市場の開拓等の予算を組んで、行政がテコ入れをする、というシステムをつくり上げることが望ましい。

大学公開講座はやがては生きてくるように思うが、海の問題について講座があっても、肝心の漁民が聞きにこないのは残念である。漁業関係者は自分の生活に直接かわりのないことについては関心を示さないものである。したがって、講座の内容にもとづいた事例づくりをする。1カ所でも生産に結びついた成果を上げることができれば、漁民の関心が高まっていく。一つの方法として、一定の地域を指定して漁民、漁協、行政が、それぞれ役割分担をして生産をあげていく。

行政は先に述べた仕事をおこない、漁協は研究・実験をおこない、漁民は生産をあげる工夫をする。さらにこのような運動は、一般の生活者、観光業者、その他の生産者を巻き込んでの、トータルな形での研究体制を育てていくことが必要であろう。そして海をきれいにすることは生産に結びつき、利益があがるということを体験として学ぶことができれば、沖縄の良い自然環境づくりができるにちがいないからである。



### 第3章 島の現状と問題点

沖縄県の社会教育、とくに戦後の学習活動の状況をみていくと、各種学級、琉球大学の普及講座、琉米文化会館、各地区の公民館等の活動は、めざましいものがあった。そして、昭和47年に日本復帰を果たすのであるが、この時点でそれぞれの学習活動は、充分とはいえないかも知れないが、それ相当の役割りを果たしたとっていい。戦後の混乱期における治安維持、青少年の学力の向上、小中学校教師の資質の向上、生活改善、そして何といても大きな将来性をもっている若い人々に、生きる力や望みをもてるような場を提供することができたことは大きな成果であった。

そして沖縄県の社会教育（生涯学習）は、日本復帰後第2段階を迎えた。琉球大学の普及講座は本土の大学並の公開講座に切り替わり、沖縄大学、沖縄国際大学、沖縄キリスト教短期大学等の私立大学が、一般市民を対象にした公開講座をはじめ。また地域社会における公民館活動も、地元の行事を大切におこないながらも、市町村の企画した学習計画を取り入れるようになり、琉米文化会館は地域の文化センターや図書館として開放された。

このような戦後の社会教育（生涯学習）の状況について述べてきたが、ここでは本土復帰後の沖縄の島々がかかえている問題について、また島の具体的なすがたについて、話をすすめていく。沖縄県における生涯学習の第2段階は、地域の人々がいかに充実した学習の場をもつことができるかとともに、地域がかかえているむずかしい問題をいかにして理解し、解決していったらいいか、ということが大きな要素になっている。もちろん地元の人々だけでは手におえない問題が少なくなく、そこで地域に根ざした大学との共同研究、共同学習が必要になる。それにはまず、島の現状と問題点を探っていくことが必要である。

このような問題にたいして、本項では竹富町と伊良部町を沖縄県の代表的な事例として取り上げた。沖縄県において、沖縄本島、宮古島、石垣島といったあるまとまりをもった地域では、生涯学習、及び遠隔高等教育に関する問題点は比較的少なく、とくに那覇市を中心にした本島の都市部、また平良市、石垣市等の都市部においては、学習施設や放送設備等の学習環境の整備については、本土並の環境整備が可能な地域である。

そのなかにあって竹富町は、後に述べるように、町域に有人島を9島、無人島を8島抱えており、沖縄県のなかでも、とくに多くの離島で構成されている町である。この調査で沖縄県を対象に選んだ理由は、離島の集合体という自然的、社会的条件のなかでの、生涯学習活動の実態を調査することであったが、沖縄県にあって竹富町はその典型的な事例となる。このような地域を具体的に知ることによって、沖縄県における生涯学習や遠隔高等教育のありようを、検討することができるのではないかと考えたからである。

また、伊良部町は宮古島の西方、約9キロの海上に位置する面積40km<sup>2</sup>ほどの島で、漁業の盛んな島である。県域は周囲を海に囲まれている島々であるが、農業を中心的な生業としている島が多く、漁業を生業にもっている島は以外と少ない。よく知られているところでは、沖縄本島の糸満市、本部町と伊良部島の佐良浜地区等であるが、このうち伊良部町はカツオ漁を中心とした遠洋漁業と、近海の魚を育てることに力を注いでおり、琉球大学など県内諸大学がおこなっている公開講座に、深い関心を寄せている町でもある。

## (1) 竹富町

### 1. 町のすがた

竹富町は沖縄本島に次いで大きな西表島と、竹富島、黒島、新城島、小浜島、上地島、下地島、鳩間島、波照間島の9つの有人島と、鳩離島、ウ離島、嘉弥真島、外離島、内離島、中之御神島、赤離島等8つの無人島で町域を形成している(1)。八重山群島のうち、石垣島と与那国島、そして尖閣列島を除いた離島の集まりである。各島間の海上交通の整備が充分でないために、行政や産業の中心である役場や農協は、それぞれの島からの交通の便のいい石垣市におかれている。八重山群島は石垣市を起点にして海上交通が発達しており、石垣市内に役場をおいた方が便利であったからである。

竹富町は行政区内に役場のない全国でも珍しい町であるが、日本ではこのような町村が4カ所あった。北から青森県の東通村、鹿児島県の三島村と十島村、そして竹富町がそれであるが、東通村は昭和63年に管轄内に役場が移転しているという。

竹富町の成立について、役場発行の『竹富町町制施行四〇周年』をもとにしてその経過をたどっていく。明治41年に島しょ町村制が施行されたのを期に、八重山群島は特例によって八重山村一村として出発した。しかしながら、島によって風俗習慣が異なり、また行政上運用が困難なこともあって、大正2年11月に八重山村から分村に関する申請がだされ、翌大正3年に石垣、大浜、竹富、与那国の四ヵ村に分村されることになった。

竹富村は村役場を竹富島におき、竹富、黒島、新城、小浜、鳩間、西表、波照間の7島を行政区画として新たな出発をする。当時の戸数1057戸、人口3731人であった。第二次世界大戦後の昭和23年になって、軍人や外地からの引き上げ者が続々帰村し、戸数1764戸、人口9387人にふくれあがったので、琉球政府の認可を得て、町に昇格する。この間役場の移転が何度かおこなわれている。

大正14年に、村行政を円滑にすすめていくために、八重山群島の交通の中心地である石垣町登野城に町役場の出張所を設置した。その後石垣町内に何度か移転がおこなわれ、昭和13年に役場そのものを移転した。この時点で竹富町は、行政区内に役場のない全国でも珍しい町になる。第二次世界大戦中戦火を逃れて、役場は一時小浜島に避難移転し、終戦となった昭和20年に再び石垣町大川に復帰、そして昭和52年に石垣市美崎町の現庁舎に移転し、今日に至っている。

### 2. 町の産業（『竹富町町制施行四〇周年』昭和63年度版による）

町の産業は、町域内の島々はそれぞれ立地条件がちがうため、各島の立地条件にあうような産業の振興がはかられてきた。たとえば、竹富島は観光と養蚕、クルマエビの養殖、西表島はサトウキビ、稲作、畜産、観光、波照間島、小浜島はサトウキビ、黒島は畜産などに力を入れている。各島とも農業、もしくは畜産が基幹産業になっているが、その規模は小さく、若い人々は仕事を求めて町外へ流出する傾向にある。

農業、畜産、水産業の振興もさることながら、竹富町は西表島を中心にした西表国立公園をひかえている。西表島は面積284.44平方キロメートルのなかに687戸、人口1703人（昭和63年現在）が居住しているが、島の面積の多くがスダジイ、ウラジロガシ、タブなどの亜熱帯照葉



水田風景（西表島）



肉牛の放牧（西表島）



竹富島の家並



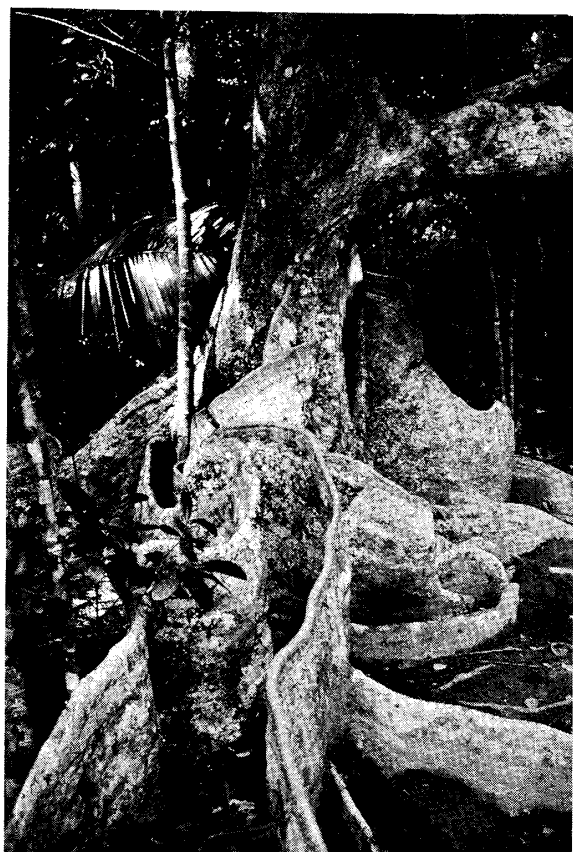
サトウキビの収穫



珊瑚礁の連なる海



内浦川のメヒルギ群落（西表島）



亜熱帯照葉樹林（西表島）

樹林におおわれており、イリオモテヤマネコやセマルハコガメなど貴重な生物が棲息していることでもよく知られている。また、島内を流れる河川の塩沼地や海岸線の一部には、見事なメヒルギの群落が繁茂し、その根元では各種のめずらしい水性動物が棲息している。

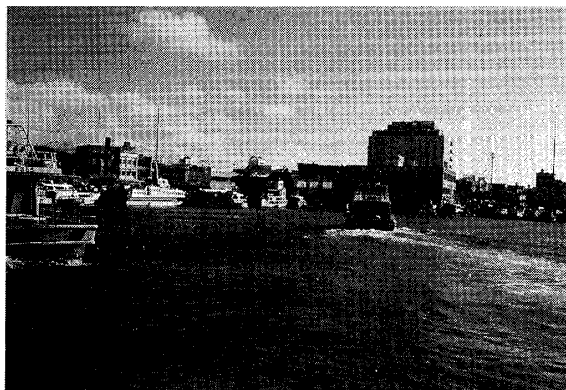
一方、西表島と石垣島を結ぶ八重山海域には、日本最大といわれている珊瑚礁が形成されており、貴重な学術資源となっているが、これらの資源をそのまま残し、保全管理をおこなうことで、日本でも類をみないすぐれた観光資源として活用できる。開発や管理のあり方を誤らないような方策が必要であり、竹富町の基幹産業の一つとして、学術、観光産業の振興も、町の大きな課題でもある。

### 3. 島々間の交通

竹富町域の島々は石灰岩台地と珊瑚礁が発達した地域で、定期船の発着は潮の満ちひきに左右されるため、一日に一航海しかできない島が多かった。このような自然条件のなかで、昭和47年の本土復帰以前は各島々に2～3隻の小さな連絡船があつて、個人経営の定期船業者が営業していた。そのころは各島間を結ぶ海上交通は、けして便利ではなかったが存在していた。

本土復帰後はこの不便さを解消することが大きな課題となった。折から沖縄県の視察に訪れた鹿児島県選出の衆議院議員に対し、離島住民の最大の希望として自然条件に左右されないで運行できる連絡船の就航を陳情した。これが直ちに受け入れられて、三井造船製のホーバークラフトが島々を結ぶ連絡船として昭和47年6月に就航することになった。ホーバークラフトは浅瀬であっても就航できるし、速度も早い。これによって、たとえば2時間あまりかかっていたところが、30分ほどで行くことができるようになり、離島間の距離が大幅に短縮された。また潮の満ちひきに制限されずに船を運行させることができるホーバークラフトの就航によって、竹富町の夜明けがきたといって島が活気づいた。町の実状を理解してくれたこの衆議院議員は、竹富町の名誉町民になっている。

しかしながら、この便利にみえたホーバークラフトも、時がたつにつれていろいろな問題が顕在化してきた。ホーバークラフトはたいへん高価なものであり、維持管理にお金がかかる。そのため運賃は時間短縮に比例して高くなった。このコスト高が各島間の定期船業者の吸収統合を加速させ、第三セクターの八重山観光フェリーが誕生する。またホーバークラフトの欠点



石垣港



宮古港

も明らかになってきた。この船は浮力を利用して走るために、風に弱いことであった。内海を走るときであっても、2メートルほどの風が吹くと、危険であることを理由に運行停止になってしまう。加えてコスト高、企業の採算ベースに合わない、稼働率が悪い、などの理由によって10年後の昭和57年に廃止され、高速船が就航するようになり、順調に今日に至っている。

ホーバークラフトの就航は、別な意味で島の生活を大きく変えていった。先に述べたように、コスト高を解消するために、各島の定期船業者が吸収合併をおこなったことで、きめ細かな島々への運行ができなくなったことである。採算を取るために島と島を結ぶ航路が統合され、八重山群島の中心地である石垣市を起点にして、各島への航路が主流を占めていった。そのため石垣島以外の島に行くときは船をチャーターしなければならず、島と島の交流が希薄になっていった。町民が一同に会することが少なくなり、島単位での催しが多くなった。

そのため町の社会教育課では、町民が一同に会しておこなうスポーツ大会、ゲートボール大会、伝統芸能大会などのイベントを企画し、会場は各島をまわって楽しむ機会を作っている。これには時間と経費がかかるので、財政的な援助をしながら、島民活動の状況を見ているのが現状である。各島文化施設の拠点になっているのが公民館であるが、この地方で公民館と呼ぶようになったのは本土復帰以降のことで、それ以前はヤカタ、ムラヤなどとよんでいたという。

この建物が老朽化していたので、国や県の補助金を得て、復帰後次々と新しい多目的施設を建設していった。竹富島には老人コミュニティーセンター、黒島には農村婦人のいえ、小浜島には農村構造改善センター、波照間島には農村集会センター、鳩間島にはコミュニティーセンター、西表島には東部に離島総合センターが建設され、現在西部に2カ所コミュニティーセンターを計画中であるという。

#### 4. 町の核つくりとコミュニケーション

島と島の交通は連絡船からホーバークラフト、高速船へと変化していったが、基本的問題は解決されていない。それは離島の集合体である竹富町のなかで、行政の中心地をどこに置いたらいいかということ、そして離島相互のコミュニケーションをいかに円滑におこない、さらに、町の主要産業の一つである農業、および観光産業をいかに進展させていくか、ということである。そこでつよく望まれているのが海上航路の設置である。

先に述べたように、竹富町域は石灰岩台地と珊瑚礁が発達した地域で、干潮時には船底が珊瑚礁にあたるため、定期船の運行が潮の干満に左右されている。海上航路を設置するためには海底の掘削をしなければならない。しかし西表は国立公園に指定されており、また他の島でも海底公園の指定があるので、すんなりといかない面がある。しかし、島々へ通じる航路が完成すると、24時間自由に船の航行ができるようになり、離島島民の不便な生活が解消される。また、レジャー船の大型化、スピード化等に対応でき、観光産業にも一役買ってくれる。自然保護と産業開発とをいかに両立させていくかという、むずかしい選択である。

もう一つの問題点は町民の拠点になる地域がないことである。行政の中心である役場が石垣市にあるために、現状では住民に対して十分なサービスができないということで、役場の移転が大きな課題になっている。すでに町議会では3回も移転をすべく全員一致で議決しているが、種々の問題が解決されていないために、現在なお役場移転審議会が審議をおこなっている。

問題点の一つは、八重山群島が石垣市を中心にして経済圏ができあがっていることが、役場移転を躊躇させている大きな要因である。役場移転に賛成ではない人々の意見として、

- ①なぜこの時期に移転しなければならないのか
- ②役場移転をせずに石垣市と合併したらどうか。
- ③石垣市に出張所をおいて役場移転をすべきである。

というもので、あくまでも石垣市に執着していることがわかる。

役場の窓口では住民登録、印鑑証明等の発行をするが、印鑑証明を取ってどこで使用するかと、石垣市でないと活用できないのが現状である。また、島の子供たちは義務教育を終えると、ほとんどが石垣市にでて、高等学校に入学する。さらに大学に行くためには沖縄本島か本土にでなければならぬ。また、石垣市と竹富町では人的交流が活発であった。石垣市の行政、政治、産業、教育界等で活躍する人々のなかで、竹富町出身者が少なくない。現在石垣市の人口43000人のうち、15000人ほどが竹富町出身者であるという。このような状況の中で、なぜ役場を移転しなければならないのか、時期早尚ではないのか、というのが積極的に賛成しない人の意見である。

一方、役場移転に賛成する人は、ふるさとである竹富町を大切にしたいという人が多い。石垣市に安易に合併しても、生活はよくなるという意識がある。人口43000人を擁する石垣市では市内の生活環境の整備がまだ充分ではなく、竹富町まで行き届かないから、合併すべきでないという意見である。また住み慣れた土地を離れたくないし、ふるさとをより豊かな土地にするために、それぞれの島で頑張りたいという。このような意見が町民の間ででていて、役場移転の是非が問われているのである。

役場移転については、西表島の大原が候補地に上がっている。大原は西表の東部にある町で、港が整備されており、ここに他の島からやってくる船が集中するからである。しかしながら役場を移転するためには、道路の整備、航空路の造成、公共施設や住宅の建設、産業の育成等、移転候補地の環境整備が必要であり、竹富町の中心地としての町作りからはじめなければならない。そのため大変なノウハウと資金を必要とする。

## 5. 情報網の整備

次に、島単位でどれほどの行政サービスができるかが、この町の現状での大きな課題になっているが、現在、町で積極的におこなっている教育、通信関係の事業がいくつかある。情報無線システムがそれで、親局から各島々に電波を飛ばして防災に関する情報や、農家には農林業に関する情報を流している。各島の各家々には無線の受信装置が設置されており、役場からの連絡がスムーズに届くようになっている。また町の広報は月に一度発行されており、他の市町村でおこなっているように、行政に関する情報伝達は支障がないようにつとめている。

また、各島々に区長制度が整っており、地域でまとまっておこなう行事や仕事、行政連絡等は、区長あてに文書を流している。区長はそれを受け取ると、地域の人々に伝達するか、もしくは集会を開いて区民と話し合いをおこなう。また毎年4月には各島の区長に石垣市まででていき、区長会議を開いて、その年度の計画について話し合いをすることになっている。区長会議だけでなく、町議会、農業委員会、教育委員会、選挙管理委員会など、町の行政に深くかか

わっている会議は、石垣市に集まっておこなうことになっている。このように一般の市町村ではあたりまえのことが、竹富町ではあたりまえではなく、一般の市町村並に行政サービスをおこなうために、大きな労力と予算を費やさなければならないのが現状である。

このような町のおかれた状況のなかで、町の行政を円滑にすすめ、また生涯学習事業をすすめていくには困難な点が少なくない。一つの方法として通信・放送システムを有効に使う工夫が必要であり、竹富町のような町でこそ通信・放送システムが大きな力を発揮することになる。

石垣市には石垣ケーブルテレビが営業しているが、その放送範囲は主として石垣島、なかでも石垣市、およびその周辺に限られており、八重山群島をカバーしているわけではない。今日の放送通信システム技術をもってすれば、さまざまな方法が考えられるであろうが、現状では石垣ケーブルテレビの協力を得て、そのノウハウや施設を町の行政のために活用することを考えるのも、一つの方法であろう。

いずれにせよ、離島の集合体である竹富町のなかで、島民同士のコミュニケーションをいかに円滑におこない、いかにして町民が合意の形成をしていくかということは、大きなテーマである。幸いなことに竹富町、とくに竹富島や西表島では観光産業に力を入れており、外から毎年多くの観光客が訪れている。島々は孤立しているのではなく、外との交流も円滑におこなわれているのである。ここでは具体例を示している余裕はないが、島内には島の現状や将来を真剣に考えている人々が少なくなく、学術と観光、そして地場産業振興を軸にした町民による生涯学習が実践されている。

## (2) 伊良部町

### 1. 町のすがた

伊良部町は、沖縄本島から南へ約330キロメートル離れた宮古群島の一つで、宮古島の平良港から西に約9キロの海上にある。町は伊良部島と下地島の2島からなり、面積は約40平方キロメートルで、宮古本島に次いで大きな島である。平良港からは1日10往復する定期船が通っており、所用時間は約20分である。

戸数は2434戸、人口は8704人（昭和63年現在）で、昭和45年まで人口流出が続いたが、遠洋漁業の開発や、下地島のパイロット訓練飛行場の開設事業等が導入され、人口減少にブレーキがかかった。しかし、近年では昭和57年の9817人をピークにして、再び年々減少の一途をたどっている。若年層の就業のための転出が人口減少の主な理由である。

町内には7つの字があるが、そのうち南方カツオ漁業の基地である佐良浜港をひかえた池間添と前里添地区で約1300戸を数え、そのうち約800戸が漁業従事者である。そのほかは商人、大工、左官などの職人、サラリーマン、公務員等で、漁業従事者のうち200戸が南方カツオ漁業、そのほかは近海、沿岸の漁業に携わっている。町内経済の3分の2は漁業収入で占めており、まさに漁業の島とっていい。漁業にくらべて農業は、台風、干ばつ等の被害に見舞われることが多く、不利な自然条件のなかでおこなわれている。農家の経営耕地面積の平均は100アール前後が多いが、主生産物はサトウキビで、そのほかメロン、スイカ、ピーマン、サヤインゲンなど、換金度の高いハウス栽培に力をいれはじめている。

## 2. 伊良部町佐良浜の漁業

伊良部町佐良浜地区は、沖縄本島の糸満、本部、宮古群島の池間島とともに、漁業のさかんな地域である。佐良浜地区の漁業は沿岸漁業と南方基地カツオ漁業とにわかれる。沿岸漁業はカツオ一本釣り、マグロ延縄、追込漁、曳縄を主力として、そのほかに刺網、突き棒、イカ釣り、敷網等がある。

カツオ一本釣りは宮古・八重山周辺、尖閣諸島海域で、4月から10月を漁期として、日帰り操業でおこなわれる。カツオ船の乗組員は15人ほどで、一本釣り漁の漁期が終わるとマグロ延縄船に乗り込むほか、農業に従事する人も多い。漁獲したカツオは鮮魚として流通するほか、漁協が経営する鯉節工場にまわされる。カツオの一本釣りは安定した漁獲を得るためには餌が重要な役割をする。従来は一本釣りの経営者が餌の漁獲もおこなっていたが、今日では分業体制をとるようになった。カツオの餌は宮古、池間、伊良部の各島の周辺の珊瑚礁に棲息するタカサゴの幼魚やテンジクロダイが使われている。これらの魚は後に述べる追い込み漁によってとられている。

マグロ延縄は年間操業する19トン型の船を主体にして、佐良浜には5～7船団あり、そのほかカツオ一本釣りの裏作として操業する。漁場は沖縄近海からフィリピン近海までで、水揚げは那覇港でおこなわれ、主として日本本土に送られる。一本釣り、曳網、イカ釣り等の漁は、1トンから3トンほどの小型の船が主力で、一本釣りは宮古沿岸海域で、夏場を最盛期として周年操業をおこなう。魚種はハタ類を中心に、タイ類、マチ類などがその対象となる。曳網は4月から9月を漁期としておこない、対象魚はカツオを主として、そのほかシビ、サワラ等がとられている。イカは一本釣り漁で、10月から3月までの冬期間におこなわれる。これらの漁を組み合わせる年間操業する漁家が少なくない。

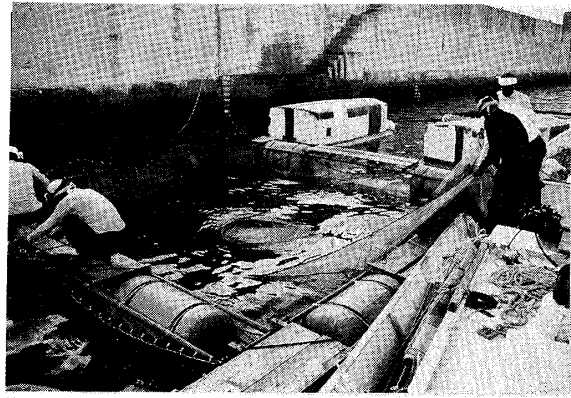


佐良浜港（伊良部町）





出漁風景（佐良浜港）



タカサゴ（カツオのエサ）の生簀

追込漁は魚群をみつけると潮の流れの下手に大きな敷網を張り、潮の上手から漁師が海に飛び込んで網のなかに魚を追っていくという、この地方で従来からおこなわれていた伝統的な漁である。大がかりな追い込み漁は現在佐良浜でおこなわれているが、1つの船団で漁船が8隻ほど、70人から90人が加わっている。佐良浜にはこのような船団が2組操業している。小規模のものは2～3人でおこなうものもあり、宮古群島では狩俣地区や池間島でおこなわれていたが、大正時代後期以降カツオ漁に切り替わっている。

追い込み漁は、佐良浜における沿岸漁業の漁獲量の約30%を占めており、大きな比重を占めている。漁期は周年であるが、6月から10月まではカツオ一本釣り用の餌であるタカサゴの稚魚をとり、10月から翌年の春までタカサゴを中心として、タイ、アイゴ、イカ、イワシ等の漁がある。タカサゴは珊瑚礁の浅いところにも多く棲息していて、魚を追い込む人々は裸で海に飛び込んでいたものであったが、近年珊瑚礁が汚れ死ぬものも増えてきたので、20年ほど前から潜水服に酸素ボンベをつけ、深い海での漁にかわっている。

一方、佐良浜における南方カツオ漁は昭和6年に2隻の漁船がパラオに出漁したのが始まりで、この頃はすでに静岡、宮崎、高知、鹿児島、長崎、佐賀、岩手の各県からの漁師が操業をおこなっていたという。その後南方に出漁する船団も増えていき、漁業者のみならず、漁業者を相手にした商人の移住も相次いだという。しかしながら、昭和16年に第二次世界大戦がはじまって操業が困難となり、戦後は現地で築いた財産を捨てて続々と引き揚げてくる。

南方カツオ漁が再開されるのは昭和45年になってからで、昭和44年に締結された日豪協定に基づき、パプア・ニューギニアの漁業振興をはかるために、パラオ、ソロモン諸島の海域で操業を開始し、今日に至っている。少々古いデータであるが、昭和60年には24隻のソロモン・大洋社の漁船に、合計158名の伊良部町出身者が乗り組んでいる。操業形態は1隻のカツオ船に6人の伊良部町出身者と24人の現地採用者が乗り組み、合計30人で操業をおこなう。このようにしてカツオ漁の技術をはじめ、加工、流通等の技術定着をはかってきた。

### 3. 島の問題点

伊良部町では毎年100名くらいの若い人々が島をでていくので、農業や漁業に携わる人が年々減っているのが現状である。今までは島の外へでていくことにたいして、不安感が先にたっていたが、現在は情報のやりとりが簡単なので、先に都市部へでていった先輩と連絡

を取り合って、簡単に島を離れることができるようになった。出先では仲間同士が集団で働いているから、そこで仕事を見つけて生活ができる。

たとえば左官屋など職人の場合は、季節的な出稼ぎではなく、年間をとおして働く場が確保しやすい。次に稼ぎ先での生活になれ、暮らしていけるようになると、妻子を呼びよせる。したがって島には子供が少なくなり、学校では児童数が減っていく。年寄りのいる家では、年寄りを残してでいてしまう。だから島は世帯数はさほど減らないけれど、人口が大幅に減り、しかも平均年齢があがっていく。どんどん高齢化しているのである。

このような現象は沖縄県の地方自治体にとって大きな問題になっている。ちょうど高度経済成長時代の本土と、同じような現象がおこっているのである。島をでていく人々は住民票を移していない場合が多いから、世帯数は減っていないけれど、実際は島に住んでいない。したがって町の行政コストが次第に高くなっており、それが自己財源を圧迫している。現状では町で計画している各種事業費は、国の補助が7割、自己財源が3割、もしくはそれ以下になっている。それでもなお、公共事業をやろうとしても負担金がだせないで、これからの沖縄の地方自治体はどんどん苦しくなっていくことが予想される。

これは沖縄県の離島全体の問題であると思われるが、まず若い人が島に残ることができるように、そして若い人が自分の能力を発揮できるような、雇用の場を確保することが大きな問題であろう。それを急がなければ、商工業、農業、漁業など、島の産業はどんどん衰退していく。その対策として、1.5産業の創出をかんがえることが、現状に即した無理のない方向であると島のリーダーは考えている。1.5産業とは、農産物や海産物の加工業である。第一次産品をそのまま流通ルートに流すのではなく、一次加工、もしくは二次加工まで島でおこなって、付加価値を高くして販売するのである。皆で頭を使って特産物をつくりだすこと、また原料を無駄にしないように副産物にも目を向けることも重要な視点である。それにともなって第一次産業も力をつけていく。

本来であれば地域の農協や漁協が、製品加工の開発や販売ルートの確保などの役割を果たすべきであろうが、その力がなくなっているのが現状であるという。農協も漁協も赤字が続いており、指導者たちも自分自身の経営で精いっぱいであって、組合員にたいしての対応ができていないという。したがって個人単位で市場開拓をしなければならぬのが現状である。しかしながら、この産業創出に関しては、若い人々の知恵と力、そして地域に根ざしている研究者との共同作業が期待できる。

沖縄県の製造業は本土復帰以前は、全産業の26%を占めていたが、復帰後は10%以下になっているという。産業形態としては復帰以前の方が正常であって、残念ながら今日では、沖縄は製造業者が育たない県となり、消費県になってしまった。その理由は本土から大手の業者が入ってきて事業をはじめ、沖縄県であげた利益は本土に持ち帰ってしまう。これにたいして地元資本では太刀打ちができないのである。いきおい地方自治体は国からの補助金を消費するだけとなり、生活用品の多くは本土から入ってきたものを消費する県になっていく。繰り返しているが、高度経済成長時代の本土における中央と地方の関係と、復帰後の沖縄と本土の関係が非常に似てきている。

島の現状は決していい状態ではない。それは目の前のハエを追うことで精いっぱいであり、

長期計画のなかで島の将来を考える余裕がなくなっているからである。第一次産業が停滞していることについて、さまざまな問題が議論されているが、第一次産業に投資をしても、資本が回収できないという現実がある。農業や漁業は親の代からやっているのだから、苦しいながらもそのまま継続し、新たに投資しようという人はいない。また企業かがこれらの産業に投資することもない。いきおい資本回収が可能な土木、建設業に資本が流れ込んでいく。

伊良部島の南の方の地区では農業から土木に目を向けており、現在ではかなり裕福な家が多くなっている。一方島の北側にある佐良浜は、カツオ漁を主体にして南太平洋に進出していった。これが成功してたいへん景気のいい時期があり、大型の船をもっている船主がたくさんいる。しかし現在は南の土木の景気の方が良く、資本投下の比率は逆転した様相を見せている。仕事として割のいい公共事業にたいする投資は、これからもさらに拍車がかかり、土木、建築関係の仕事に従事している人が増加している。したがって、工事による海の汚れ、それにとともなう珊瑚礁の消滅にたいして、関心を示す人が少なくなったという。

### (3) 生涯学習活動の実験

竹富島では主として生活環境について、また伊良部島では漁業を中心とした産業についての現状と問題点を述べてきた。先に「沖縄県における生涯学習の第2段階は、地域の人々がいかに充実した学習の場をもつことができるかとともに、地域がかかえているむずかしい問題をいかにして理解し、解決していったらいいか、ということが大きな要素になっている。もちろん地元の人々だけでは手におえない問題が少なくなく、そこで地域に根ざした大学との共同研究、共同学習が必要になる。それにはまず、島の現状と問題点を探っていくことが必要である」ことを述べた。

ここではその代表的な一例を述べたにすぎないが、このほかにも観光問題、石垣島の白保地区で問題になっている自然保護と空港問題、また沖縄の人々にとって重大な関心事である戦後処理の問題等、我々も学習していかなければならないことは多い。そのためには具体的な実態を調査・研究し、その結果をわかりやすい形で表現して、どこにどのような問題が潜んでいるのかを探っていくことが必要であろう。その一つの方法としてテレビ、ラジオ等のメディアを有効に利用すること、つまり映像や音を使って、問題の所在を明らかにしていくことができるのではないかということである。

#### 1. パヤオの研究

先に伊良部町佐良浜の漁業について述べたが、宮古群島の漁業関係者は昭和58年度からパヤオと呼ばれる人口浮き漁礁を設置して、魚類を集めることに成功し、大きな成果を納めている。パヤオの周辺を回遊するのはカツオやマグロであるが、その水揚量が前年の2倍を記録し、水揚高も1.6倍に増えたことが当時の宮古新報で報道されている。

「南方カツオ漁業、沿岸漁業とも順調に発展を続けてきた宮古の水産業であるが、第一次石油ショックでの燃料費の高騰、それに沿岸諸国の二百カイリの経済水域設定等で、遠洋船は沿岸近海漁業へと転身を迫られた。沿岸漁業が次第に苦しくなってきたところに、南方カツオ漁の出漁中止は、宮古の水産業のみならず県内の水産業界に大きなショックとなった。

日本復帰を一つの境として、漁業生産基盤となる漁港整備が急ピッチで進むなかでの大きな情勢の変化ただけに、関係者は対策に西奔東走した。こうしたなかで問題になったのは、亜熱帯海域に属する沖縄の地理的特殊性を生かしながら、生産性の高い漁獲経営をいかにして確立するかということだった。本土のアジ、サバ、イワシに匹敵するような多獲性魚種は少ないが、底魚のグルクンは周年漁獲が可能、そして南方から黒潮にのって回遊してくるマグロやカツオの漁場がたくさんある。

このような海洋資源等を加味して、水産関係者が思いついたのが「パヤオ」の導入であった。これは、パプア・ニューギニア、ソロモンなどの南方カツオ漁へ出漁したカツオ船団からの報告で、フィリピンのカツオ船団がパヤオを使って、大量の漁獲をあげていることにヒントを得たものだった。

流木の付近に魚が群れ、集うことは、漁民の古くからの経験で知られていた。パヤオはこの原理を応用したもので、わが国では大手合繊メーカーがいち早く製品化した。同社のパヤオは、これまでの底魚を対象にした海底沈設型のコンクリート漁礁と異なり、海面の表層、中層、深層に宙ぶらりんの形で設置、主に回遊魚の集魚、定着に大きな力を発揮するのが特色。

—中略—

伊良部町では昭和51年度から伊良部町西方から東平安名岬沖に11基のパヤオを設置したが、予想を上回る集魚効果を発揮、平良市も4月に池間島北西海域に8基のパヤオを設置、同海域でのカツオ漁は豊漁を続けている。

宮古支庁の調べによると昨年の沿岸漁業の水揚げは1622トンで、そのうちパヤオでの水揚げは799トン（49.3%）と大きな成果をあげている。金額にして3億7000万円、そのうちパヤオは1億8000万円という。」

この新聞報道にあるように、パヤオは昭和51年に伊良部町で実験的におこなってきたが、最初から成功したわけではなく、何度かの試行錯誤を繰り返した後に大きな成果をあげられるようになったのである。度重なる実験の結果、伊良部町の漁業関係者が得たものは次のような条件であった。回遊魚がパヤオに集まるようにするには、黒潮の流れからはずれないことはもちろんであるが、海の深さが1000メートル以上あること、大陸棚が切れて急激に深くなっているところ、潮の流れが毎時5マイルほどあること、などの設置条件が必要であった。また、パヤオは1カ所に最低3基必要であり、その距離は約1000メートルが適当であることなどがわかってきた。500メートルほどの距離であると一度ついた魚が離れていくが、1000メートル離すと3基のパヤオの間を回遊するようになるという。

このような半育成的な漁業ができることによって、計画的な漁業、及び鮮魚として輸送が可能になった。カツオの群れは3カ所のどこかのパヤオについている可能性が高いので、群れをさがす時間が大きく短縮された。そして漁船は早朝の2時、ないし3時に出航すれば、漁を済ませて午後1時までには港に帰ることができる、という計算ができるようになった。午後1時に帰港できれば、宮古発の2時の飛行機を使い、その日のうちに築地の市場に送り込むことができる。また那覇まで持っていった場合であっても、翌朝のセリに間に合わせることもできる。漁獲した魚は新鮮であればあるほど高い値段がつくので、計画的な漁ができることは、漁業関

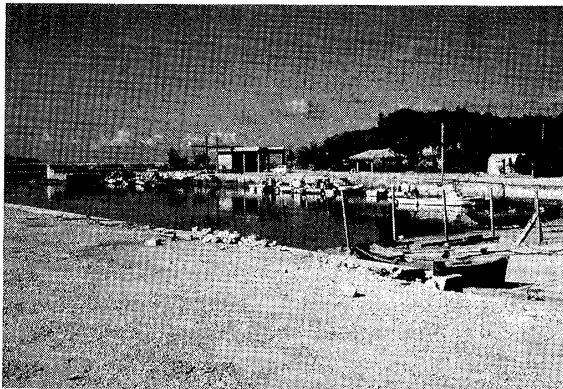
係者にとってたいへん有利なことであった。

## 2. 地域における生涯学習のあり方

このように伊良部町の漁業関係者は、南方への出漁やパヤオの設置などをおして、何度も危機を乗り越えてきた。その基本的な考え方は目の前に広がる海を知り、海とともに生きるということであった。ところが、海を知りつくしていると思われたその当事者が語るところによると、まだまだ知らないことが多すぎるという。そして海の生態をより深く知ることによって、さらに生活を高めていくことができるという。自然の力を利用しながら生産力をあげ、地域の生活に役立てていくという考え方が求められているのである。海に関する問題は単に漁業関係者だけの問題でなく、我々一般の生活者にとってもかかわりの深い問題であるので、学習活動の視点からもう少しこの問題を掘り下げてみたい。

私たちが旅行にでかけたとき、その地域の印象が強烈に残ることがしばしばある。観光ポスターなどで沖縄の海が象徴的に描かれるのは、どこまでも続く南国的な青い海と美しい珊瑚礁、そして色鮮やかな魚の群れである。それは旅行者にとって魅力的であり、印象に残る風景である。と同時に、沖縄の人々にとってはそれ以上に貴重な財産であり、海を生産の場としている人々は、なおさらのことその財産に深い関心をいできてきた。

事実、伊良部島の漁業関係者の話をうかがっていると、沖縄の海の特徴は沿岸であり入り江であるという。珊瑚礁に生息する魚介類は、ごく簡単な道具を使って捕獲することができるし、それが調理されて日常の食卓にあがる。そして何よりもありがたいことは、毎年その時期になると魚が当然のこととして沿岸にやってきて、人々もまた当然のこととしてそれを捕獲していたことである。これが沿岸や入り江での漁撈の特色で、毎年繰り返されてきた。



入江を利用した港（宮古）



カニ漁の準備（宮古・久松港）

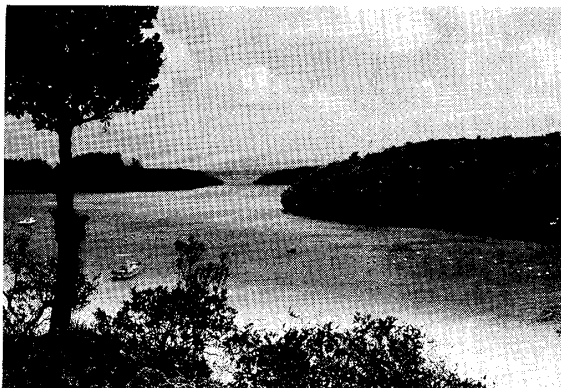
たとえば、伊良部では初夏のころになるとスフという小魚が珊瑚礁にやってくるという。珊瑚礁にはいってしまうと藻を食べるために臭みがでてくるので、その直前に網ですくいをとるという簡単な漁である。漁期は6月1日ころで、この漁が解禁になるのは1日間だけであるという。人々はその日に一斉に海に入り、スフを捕ってきて、酢醤油で食べたり塩辛にして保存する。ちょうどコンビニエンスストアが目の前に広がっているようなもので、必要な量だけ捕って、あまったものは保存するか捕れなかった人に分配する。高級な魚介類であれば、高い値段

で販売することもできる。漁期が1日しかないということは、資源を枯渇させないようにという配慮である。

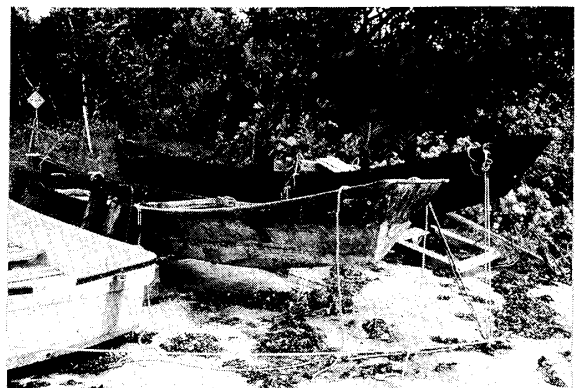
かつて伊良部町佐良浜の追い込み漁は、珊瑚礁から少し離れた沿岸で漁をしていたことは前述した。それが珊瑚礁が汚れ、さらに沿岸が汚れていったために魚が寄りつかなくなり、さらに沖まででていかなければならなくなった。そのため潜水服と酸素ボンベが必要になり、船団も大きくなった。しかしそれだけ資本を必要とし、悪いことに潜水病にかかる人が増えたという。遠洋漁業や大規模な漁法による漁業は、一見派手にみえ、勇壮にみえ、利益があがっているようにみえるが、実はマイナス面も少なくない。できるだけ安全で、豊かな生活は誰もが望んでいることである。



魚垣・潮の干満を利用して魚をとる古くからの漁法（伊良部町）



川平港 養殖・漁・観光に活用されている（石垣島）



沖縄の代表的漁船サパニ（竹富町）

そこで、目の前に広がっている海をいかにしたらきれいに保つことができるか、そして沿岸や入り江にやってくる魚や、そこに生息している魚介類をいかにしたら絶やさずに、長いサイクルにわたって漁獲できるようにするか、ということが大きな課題になるのである。亜熱帯海域に属する沖縄の海の特性を生かしながら、生産性の高い漁獲経営を目指したのがパヤオの実験であり、事業であった。同じようなことを沿岸や入り江で実験してみる価値は充分ある。

### 3. 研究開発の方法

この報告書の冒頭で、総合科学の対象として地域社会をとらえるという考え方が重要であることを述べた。沖縄の海をテーマにした場合、自然環境、歴史、社会、経済、文化、生活環境等の問題を、多角的な側面から分析していくことであり、それは地域住民と研究者との共同作業が実現しなければ不可能に近いといっている。この種の研究は、フィールドワーク（野外調査）が大きなウエイトを占めるからで、基本的には地域の自然環境や、地域住民が体験的に獲得してきた知識や知恵、また地域の人々の生活の立て方、ものの考え方などを追っていくことが重要なことであるからである。

そこで地域に根ざした大学との共同研究、および共同作業をおこなう場合は、地域で生活を立ててきた人々が体験的に獲得してきた知識や知恵にたいして、いかに科学的な、また合理的な裏付けができるかが、一つの試金石になるように思う。それは研究者が研究室や実験室で構築した理論（仮説）が、地域の実態にたいしていかに科学的な裏付けをもって応えることができるか試される機会でもある。また研究室での理論が、地域の人々から得た知識や現地調査によって、より現実的なものへと練り上げられていく機会でもある。

研究室においてより現実的になった成果を、また地域に持ち帰って地域の人々に報告をする。その成果に基づいて地域で実験を繰り返しながら、新しい産業に結びつけていく。地域の人々はそれを望んでいるのである。伊良部町の漁業関係者のリーダーたち、および行政担当者の話を伺っていると、実に具体的な目的意識をもっていることがわかる。それはパヤオの成功が大きな自信になっていると思われるが、一つの事業を成し遂げていくための考え方や方法論を獲得した自信であり、次の問題に立ち向かっていくために、どのような方法論を組み立てていったらいいのか、頭に描けるようになっている。

その具体的な事例をあげる。沿岸や入り江で生産を上げるとともに、海をきれいに保っていくためには、どのような方法が考えられるか、伊良部町の漁業関係者の考え方、問題点をたどり、対策について考えてみる。

#### <その1>入り江の魚介類を育てる

(1) 沖縄の海が美しくみえるのは、海に栄養分が少ないということと関係が深いのではないか。

沖縄の海は一般にプランクトンが少ないことで知られており、本土のアジ、サバ、イワシに匹敵するような、比較的沿岸漁業での多獲性魚種が少ないのは、そのような理由によるものではないか。

(2) 生活用水やし尿を流すと、プランクトンや藻が発生する。これが赤潮の発生等海を汚す原因の一つになるのであるが、生活用水やし尿を何らかの形で栄養分に変え、適当な量を海

に流すことによって、ある程度栄養分を含む海に変えていくことができないか。栄養源の研究、およびその方向づけが欲しい。実践は地域の人々がおこなう準備はできる。

- (3) 海に栄養を与えて海草をつくる工夫をすると、小魚、貝、ウニなどが発生する。それを採集して、藻が適度に発生しているところへ移してやる。さらに何年か観察を続けて、その成長の度合いを調べる。科学的な研究のできるチームの編成ができれば、このような実験は可能である。

#### <その2>養殖に関する試行錯誤

- (1) 現在宮古圏地域で水産物の栽培センターをもっており、クロダイ、クルマエビ、シャコガイなどの養殖に力を入れている。しかしながら、実験場はもっているが、海上の施設をもっていないので、種苗の段階で漁協へおろしてくる。漁協でも海上施設をもっていないので、中間育成ができず稚魚のまま放流せざるをえない。そのためほかの魚の餌になってしまうものが多くて、成果があがっていないのが現状である。
- (2) 入り江を利用してシャコガイ、タカセガイ、アワビなどの稚貝の放流もおこなっているが、その歩留まりがよくない。その原因は熱帯魚のなかに稚貝を食べる魚がいること、海が汚染されていることなどがいわれているが、正確な理由はわかっていない。
- (3) これらの問題は、研究、実験、そして生産化という役割分担がきちんとできていないためにおこる問題であるが、漁業関係者が海の生態を科学的に分析できておらず、したがって漁場や資源の管理がうまくできていないことも大きな問題である。人々は身近かに海に接しているのにもかかわらず、亜熱帯の海についてわからないことが多い。生産に直結する研究も必要であるが、生産基盤をつくるための基礎的な研究がもっと必要である。

#### <その3>自然の生態を観察する

- (1) 養殖も悪くはないが、自然のものをもっと生かすことを考えたほうがいい。昔はたくさんいたから、いくらとってもまた次の年にはまた魚は来るであろうという考えではなく、どのようにしたら魚を増やしていけるか考えたい。1年間とらなければどのような増え方をするかみてみることも必要であろう。
- (2) 海が汚れたら資源はなくなる。しかし海の被害は目に見えにくいために、なかなか一般人にはわかりにくい。漁業関係者にとって一番恐ろしいことは、気がついたときには貝や魚がいなくなっていた、ということである。現状では海へでかけていけば、何らかの漁があるので、生活を脅かすようなことはない。そのため漁民の間でも関心が薄い。現状では海に行きさえすれば、ある程度の漁獲が望めるために、海の汚染についてはさほど関心を示さない。
- (3) 自然の力をよく観察して、その力を生産に生かしていく。たとえば台風は被害を与えるばかりでなく、海を浄化させる働きがある。魚や貝は砂や藻に卵を産みつける。海底がヘドロになっているとそれができないために資源の枯渇を招く。しかしながら、台風が過ぎたあとは海底がきれいになっており、魚が湧いてくるという現象がみられる。



#### 4. 映像を活用した科学的な観察・実験

このような具体的なテーマが提案され、研究目的がはっきりしてくれば、ある方向性が定まってくる。まずやるべきことは実態を明らかにしていくことであろう。何らかの方法で沖縄の海の沿岸や入り江の実態を具体的に明らかにしていくことができれば、問題解決の道が開けるであろうし、現代の科学技術をもってすれば、さほどむずかしいことではない。たとえば、海の生態を映像記録におさめることが一つの方法である。

四季をとおして潮の流れ方のちがいや温度差の記録、沖合いと沿岸、入り江の潮の流れ方のちがい、生活用水やし尿、陸上の開発による土砂の流入によって海が汚れていく様子、海が汚染していくことによって生ずる魚介類や珊瑚礁の変化、珊瑚礁や海底の生態、台風や大雨が襲来したあとの海底の変化、それによって魚介類がどのような形で増えていくかなど、研究課題によってテーマを決め、計画的に記録を続けるのである。

この実験研究は、地方自治体と地元の大学、研究機関、漁業関係者、観光関係者、テレビ局等がプロジェクトチームをつくり、協力体制を整えれば、研究目的に耐えうる緻密な映像が撮れるのではないかと思う。その映像を各機関が共有の資料にして、研究、実験、開発、実践といったそれぞれの役割を果たすための道具として使用する。それによって、今まで漁業関係者が体験的に獲得してきた知識や知恵にたいして、科学的な裏付けをおこない、新たな自然保護対策や生産体制を構築していくための基礎資料となりうるように思う。

さらに、この映像資料を公開講座、教養講座等の機会に一般に公開して、漁業関係者をはじめ、多くの人々に沖縄の海の実態を認識してもらおう。さらに多くの人を対象にする場合は、テレビ放送することが有効であろう。このような作業をすることによって、漁場や資源の管理、珊瑚礁の管理と有効活用、プランクトンや藻の研究、それにつく小魚、貝、ウニなどの生態研究、稚貝の放流等に大きな力を発揮するであろう。そして、気がついたときには海の汚染が進み、貝や魚がいなくなっていた、ということは避けることができる。そのための手段として、映像は大きな役割を果たすものと思う。

沖縄の海が美しく、豊かであることは、ただ景色がいいだけではなく、海洋資源を豊かなものに育てていくことでもある。それには多大は知恵の集積と労力が必要であり、そのような事業は若い人々を惹きつける。若者は自分の能力を発揮できる場があれば、地元に戻り定着する傾向があるからである。それが、自分が生まれ育った地域を豊かにしていく事業であれば、なおさらのことである。そして沖縄を訪れる観光客も良質な人々が増えていくものと思う。観光の本質は、地域の活力（光）を観ることである。沖縄の豊かな海に触れ、地元の豊かな生活に触れることは、訪れる旅行者にとってもたいへん喜ばしいことでもある。

#### (4) 離島地域の放送事情

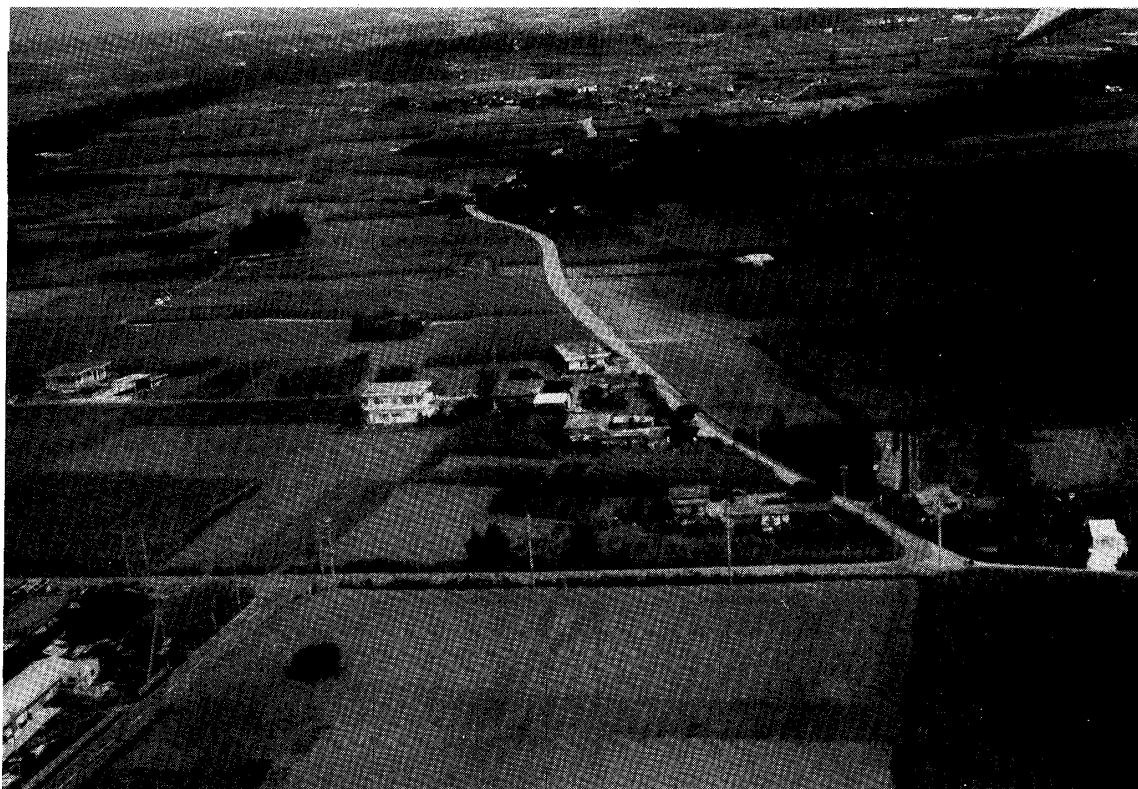
##### 1. 地域放送局の役割—宮古テレビの事例—

###### ①宮古群島の概観

沖縄本島から285キロほどの西南の海上に連なる島々を宮古群島と呼んでいる。宮古群島は宮古島を主島として、伊良部島、池間島、多良間など、大小8つの島々でなっている。宮古群島の中心地は平良市で、市域は宮古島の北部と、その北端に位置する池間島と大神島を含めた

範囲で、人口は3万3000人ほどを数える。平良市は沖縄本島をはじめ、八重山群島への空と海の交通、また島内、及び群島内の交通の中心であり、県の出先機関や行政、教育関係の諸機関が集中しており、文字どおり宮古群島の中心地として機能している。

宮古島には平良市のほか、城辺町、上野町、下地町の3町がある。いずれも農村地帯で、農家人口は総人口の40%ほどを占め、サトウキビが全耕地の70%ほどを占め、そのほか甘藷、蔬菜、葉煙草、大豆等の作物がつくられている。また近年は豚、牛、鶏などの畜産にも力が注がれており、海に囲まれた島であるにもかかわらず農業を基幹産業にしてきた地域である。



宮古島上空から見たサトウキビ畑



サトウキビ畑（宮古島）



宮古製糖（株）

水産業はカツオ漁の池間島と伊良部町佐良浜がよく知られているが、そのほか久松、狩俣、西原などでは雑魚、貝類、モズクなどの魚介類の採集がおこなわれている。しかしながら、近年は漁業から離れていく傾向がよくなる傾向があり、その対策が望まれている。

宮古テレビの放送エリアは宮古島の平良市（世帯数10791戸、人口32686人）、下地町（世帯数980戸、人口2917人）、城辺町（世帯数2592戸、人口8241人）、上の村（世帯数894戸、人口3145人）と、伊良部島の伊良部町（世帯数2279戸、人口7579人）、そして多良間島の多良間村（世帯数462戸、人口1336人）の合計17998戸（いずれも平成5年11月現在）である。このうちケーブルが設置され、受信可能な世帯は15500戸、そして加入契約世帯数は10940戸で、約70%の加入率である。ここでは、民間のテレビ局が設立されたことによって、島がどのように変わっていったのか、そして離島地域におけるテレビ局の役割について考えてみたい。

## ②地元放送局の誕生

宮古群島のテレビ放送の拠点である宮古テレビ株式会社は、宮古群島唯一の民間ケーブルテレビの放送局として昭和52年6月に設立され、昭和53年5月に放送を開始した。宮古テレビが開局する以前はNHKの放送しか見ることができなかった島民は、民放各局の放送にも接することができるようになった。このテレビ局ができて、島に入ってくる情報量は数倍に増加するとともに、人々の生活に大きな変化をもたらしたように思う。

まずリアルタイムでの放送が可能になったことである。開局以前のNHK放送（復帰以前はOHK）は、那覇の放送局からテープが送られてきて、宮古にテープが届いてから放送に流すことになるので、各家には朝のニュースがお昼に流れるという状態であった。それが那覇のNHKからNTTの海底ケーブルを使って送られてきたものを、宮古テレビの鉄塔にたち上げて、リアルタイムで全島に放映できるようになった。島内の放送はケーブルを使うために映像がクリアになって、それまではテレビの画面がちらついていても、映るだけで満足していた島民は、くっきりとした映像を見ることができるようになった。

次に民放各局の放送が見られるようになったことである。民放は2チャンネルが用意されていて、1つのチャンネルで日本テレビ、テレビ朝日、テレビ東京（昭和53年5月放送開始）、もう1つのチャンネルでTBSとフジテレビ（昭和61年12月放送開始）用に使っている。しかしながら、民放の番組はリアルタイムではなく、放送局からテープを空輸したものを宮古テレビのケーブルを使って流している。そのため2週間遅れの放送になる。台風などの自然災害で飛行機が飛ばないことがあり、それに備えて1週間分の番組はストックしておかなければならないので、必然的に2週間遅れになるという。平成5年度からTBSとフジ系の2局が乗り入れたことによって、沖縄本島で流れている番組が、宮古、八重山地方でも見られることになった。

昭和62年には衛星放送がスタートして、さらにチャンネル選択の幅が広がった。離島地域にとって、衛星放送はその地理的条件を取り払ってくれると思いがちであるが、ここでも実は本土との格差があった。基本的に電波を海外にださないようにしているために、日本の周辺部にいくほど電波が弱くなる。そのため宮古地方で衛星放送を見るためには、弱い電波をキャッチするために大きなパラボアンテナをとりつけなければならない。そこで宮古テレビでは直径1.8メートルのアンテナを社屋の屋上に設置し、そこで電波をキャッチしたものをケーブルで各世帯に送っている。したがって、各家では大きなアンテナをつけなくとも、クリアな映像を見ることが出来る。一方、宮古テレビ側でも、テープの輸送、管理、等の心配がなくなるの

で、都合がいいという。衛星放送を含めて、現在放送されている番組は参考資料(1)のとおりである。

宮古テレビの放送エリアも年を経るにしたがって着々と拡大していった。放送開始後2年間は、宮古島の中心部である平良地区周辺に限られていたものが、昭和55年に久松、西辺地区へ拡張し、昭和56年と57年に県営、および市営団地、次いで昭和61年には伊良部町全域がサービスエリアにはいり、昭和63年に下地町、平成元年に上野村と城辺町の一部、平成2年に多良間島、3年に城辺町全域がサービスを受けられるようになった。

### ③放送局の事業

宮古テレビのスタッフは社員が26名で、その内訳は報道部6名、放送部8名、営業部4名、総務部4名、工事部7名で構成されている。このスタッフで先に述べた事業のほかに、宮古テレビ独自の番組制作もおこない、放映している。

その一つは地域に出かけていって、地元に着した日々のニュースを取材して、朝と夕方に放送している。宮古に滞在している間は極力このニュースを見ることにしていたが、その内容は伊良部町長の選挙速報、城辺町長選挙の説明会、畜産振興会の品評会、下地町の漁港整備等、政治、行政関係や産業振興にかかわるニュース、また、多良間村の文化財保護審議会、手話講習会等、図書館主催のサマースクール、会英語の教師が2名が宮古に到着、高校総体に宮古から選手が出場、といった文化、教育関係のニュース、そして平良市にできた墓地団地、子供たちの海水浴など生活関連のニュースが流れていた。

独自の番組としては地元高校生の野球大会や、地元でおこなわれる各種スポーツ大会の中継をはじめ、特殊な事例では、伊良部営業所で独自に撮影をして放映した佐良浜漁民の出稼ぎ漁などは好評を博したという。すでに述べたように、伊良部町佐良浜は南方漁業の基地として知られており、南方での生活の様子を長期間にわたって取材して、留守家族を対象にして放映したものである。このほか宮古の農業や漁業を考えるシンポジウム、快適な道路利用に関する討論会などの番組も作っている。

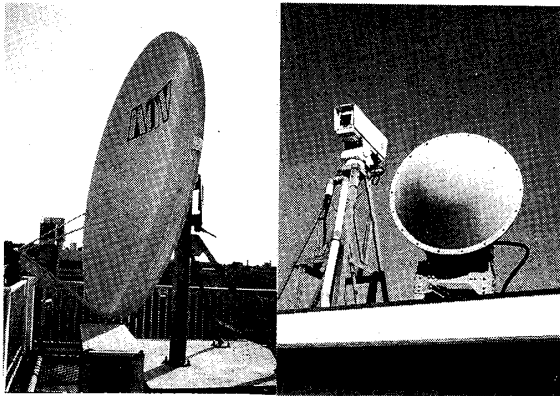
このように地元のテレビ局は、規模は小さいけれども、地元でおこなわれている小さなニュースをこまめに取材し、また地元が抱えている問題について、突っ込んだ取材をして、それを各家庭に流すことによって大きな支持を受けている。月並みなことばでいえば、こまわりのきく取材をおこなうことによって、NHKではできないものを制作するという、互いに役割分担をすることで、その存在を主張しているように見える。

一方八重山地方においても、石垣ケーブルテレビ（ICT）という地元放送局が昭和55年に設立されており、放送のシステムは宮古テレビとほぼ同様である。NHKの番組はやはり那覇の放送局から、海底ケーブルで宮古まできているので、宮古からの電波を石垣島の尾本山で受信して、そこから各離島へ流している。各家庭はテレビのアンテナを立てておけば受信ができるが、石垣ケーブルテレビのサービスエリアでは、ケーブルをとおして流しているのも、加入者はさらに鮮明な映像をみることができる。

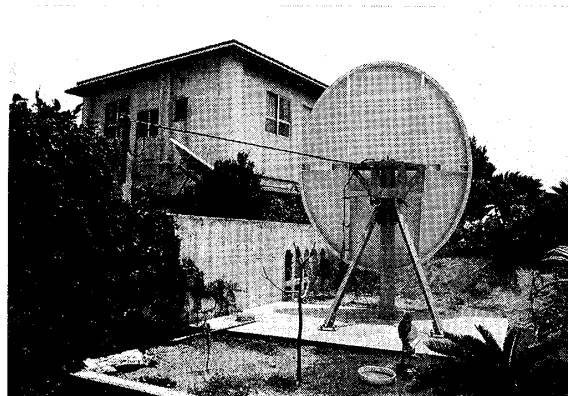
一方民放は、テープを空輸して、ICTのケーブルをとおして各家庭に流している。そのほか、自前のニュース番組や自主番組を製作して放送し、地域の人々に親しまれていることも宮

古テレビと同様である。ケーブルは放送局が独自に設置している。電柱は自前のものもあるが、その多くはNTTと沖縄電力からの借用であり、使用本数に応じて使用料を支払っているという。

石垣ケーブルテレビの放送エリアは、人口の80%が集中している石垣市の新川、石垣、大川、登野城、平得、真栄里、大浜、磯部、宮良、白保がそのサービスエリアになっている。前述したように竹富町や与那国町への送信はまだおこなわれていないが、地理的に不利な条件を背負っている離島への情報提供は重要であり、その実現が望まれる。



宮古テレビ送受信アンテナ



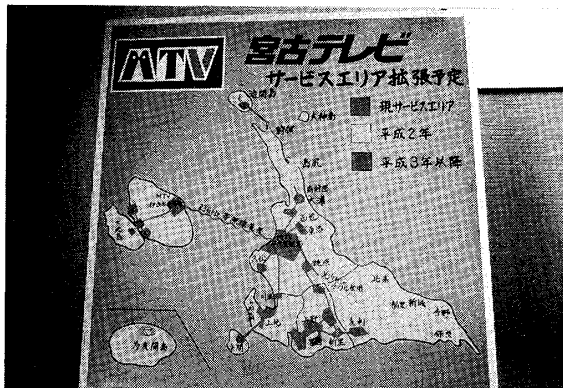
宮古テレビ伊良部営業所



調整室（石垣ケーブルテレビ）



ニュースライナースタジオ（宮古テレビ）



宮古テレビのサービスエリア



琉球大学放送公開講座のお知らせ

#### ④地元放送局の役割

放送や通信を使うことによって、地理的に不利な条件をのりこえ、種々の情報を得る機会や、生涯学習の機会をもつことは可能であり、それは放送や通信が本来もっている機能を生かすことにもつながる。地元で放送局ができ、スタッフがそろっていれば、自前の番組をつくることができる。「島の現状と問題点」の項で述べたように、地域の産業振興や自然保護に関する科学的な視点にたった番組の製作が可能である。ただし、番組の内容に誤りがないように、そして中身の濃い番組をつくるためには専門の研究者との協力は欠かせない。また受益者負担という立場をとるにしても、資金面において相応の補助が必要になる。

宮古テレビにしても石垣ケーブルテレビにしても、現状では娯楽番組が大半を占めており、地域の産業振興や生活改善につなげていくことができるであろう。科学、教育、文化的番組はきわめて少ない。そのような番組は地域に定着していないのが実状である。地域住民の興味が娯楽中心になっていることが大きな理由であろうが、放送を流す側から積極的に、また忍耐強く推し進めていくことが必要であろう。地域の防災、また健康管理に関する情報提供も同様である。

琉球大学がおこなっている放送による大学公開講座は、上記2社のテレビ局の協力によって宮古、石垣でも放送されている。それがどのくらいの視聴率を占めているのかはわからないが、放送時間が一定していなかったり、単発的であったりすると、地域に定着することはむずかしい。地域の人々が関心をもてるようなテーマを中心にして、年間をとおして、しかも一定した時間に放送を続けていくことで人々の興味をひき、大きな力を発揮することになるのではないだろうか。

もとより最初から多くの人々が関心をもつとは思わないが、宮古や八重山でお会いした人々のなかで、地域と深いかわりをもつ教育的、文化的番組に関心を示す人は少なくなかった。そのような人々が中心になって、運動体として多くの人を巻き込んでいくことができれば、時間はかかるであろうが、「生涯学習の町づくり」運動が展開されていくのも決して夢ではない。その牽引者の1人として、地元の放送局が力を発揮する要素を多分にもっている。

#### <参考文献、及び参考資料>

- (1) 宮古テレビのチャンネル案内
- (2) 宮古テレビ基本番組表

資料(1)

宮古テレビのチャンネル案内  
基本チャンネル

(基本料 ¥3,500)

①チャンネル	沖 縄 テ レ ビ	富士テレビ系列
②チャンネル	ス ポ ー ツ ・ ア イ	Jリーグを完全放送のスポーツ専門チャンネル
③チャンネル	琉 球 放 送	TBS系列
④チャンネル	N H K 教 育	
⑤チャンネル	C S N (CS)	アメリカのテレビドラマ、邦画を放送 放送時間 AM08:00～AM12:00
⑥チャンネル	スーパーチャンネル (CS)	洋画、邦画、海外テレビドラマを放送 大人から子供まで楽しめます。 放送時間 AM07:00～AM04:00
⑦チャンネル	N H K 総 合	
⑨チャンネル	宮 古 テ レ ビ	日本テレビ、テレビ東京、朝日テレビ 本局より2週間遅れの放送となります。
⑩チャンネル	宮 古 テ レ ビ	文字放送及びイベント、議会中継等
⑪チャンネル	朝日ニュースター (CS)	ニュース、情報の専門チャンネル 世界の情報をリアルタイムでお送りします。 放送時間 AM07:00～AM01:00
⑫チャンネル	GAORA (CS)	お笑い番組、スポーツ番組等楽しさいっぱいの チャンネルです。

有料チャンネル (コンバーター使用)

13コンバーターチャンネル	無 料	スペースシャワー	洋楽、邦楽専門チャンネル
15コンバーターチャンネル	視 聴 料 月 940	NHK衛星第一放送 (BS)	世界の最新情報が24時間お 茶の間に
18コンバーターチャンネル		NHK衛星第二放送 (BS)	世界名画劇場、世界ヒット アーティストなどをお茶の間に
19コンバーターチャンネル	1,540	衛星映画劇場	松竹、日活等日本映画
21コンバーターチャンネル	月2,060	スターチャンネル (CS)	<映画専用チャンネル> 最新の洋画、邦画を月35本 ノーカット、ノーCMで放送 放送時間AM8:00～AM6:00 22時間放送
23コンバーターチャンネル	3カ月分 6,180	WOWOW チャンネル (BS)	洋画、邦画、音楽、プロス ポーツ、スリル満点のチャ ンネルです。
25コンバーターチャンネル	無 料	ミュージックTV	洋楽専門のチャンネルです。

有料チャンネルは上記料金にコンバーターリース料¥310加算されます。

# 9 CH MTV基本番組表

'93 12月	'94 1月	2月	3月	4月
月火水木金土日 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31	月火水木金土日 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31	月火水木金土日 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28	月火水木金土日 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31	月火水木金土日 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30



	月	火	水	木	金	土	日			
B	7 30	平成イヌ物語パウ	ジャングルの王者ターちゃん	それいけ! アンパンマン	セーラームーン/ハローキティ	モグモグゴンボ	ドラえもん/ワイロータウン	アイアンリーガー	30 7 B	
特	8	トランタン白書	医食同源 共に生きる世界	クイズ ところ変われば	TVコロンブス	渡る世間の裏話表話	特撮ロボ ジャンパーソン	ダイレンジャー/ ミラクルガール	8	
		クイズ世界はSHOW BY ショーバイ	知ってるつもり	食キングクイズ 地球まるかじり	いつみても 波瀾万丈	ドキュメンタリー 人間劇場	浅草橋 ヤング洋品店	邦子・徹の あんたが主役 みんなの県営		30 9 特
		スーパーマリオクラブ	ゴウザウラー	クレヨンしんちゃん スラムダンク	Y A I B A	ガンダム あしたP-KAN気分	ドラマ もうひとつのJリーグ	姉ちゃんのリボン		15 10 B
B	10 30	M T V モーニング(再)					皇室グラフィティ	歌謡びんびんハウス	11	
B	11 50	暴れん坊将軍/ 闇を斬る	ドラマ 愛してるよ	噂屋 石近	同窓会	木曜ドラマ	料理大好き キッチン倶楽部	所さんの目がテン	11	
特	12 30	見たい知りたい ネオ・バラエティ お茶とクナン	クイズ どんなMONだい ネオ・バラエティ タプロイドTV	笑ってヨロシク ネオ・バラエティ 福ぶくろ	薬師将軍ダウンタウン ネオ・バラエティ KISS♥KISS	爆笑王決定戦 ごちそうさま	おまかせ 山田商会	日曜ビッグ スペシャル	12 A	
		1 30	追跡					なんだろう大情報	笑点	40 13
		2	邦子・徹の あんたが主役	華麗にAh! So	ダブルゲンガー/ ゴルフ尾崎に挑戦	美佐子の科学館	料理パンザイ	ミュージック ステーション	スーパー ジョッキー	14
B	3 57	土曜ワイド劇場	月曜特集 日本名作ドラマ 45	さんまの なんでもダービー	TVおじゃマンボウ	木曜スペシャル 3:27	土曜グランド劇場	M T V	15 特	
B	4 53	浅草橋 ヤング洋品店	世界とんでもヒストリー	い気旅分 地球知りたい気分	タモリの 音楽は世界だ おしらせ	桜っ子クラブ 4:23	全日本 プロレス中継	映画劇場	16 B	
特	5 30	平成イヌ物語パウ	ジャングルの王者ターちゃん	それいけ! アンパンマン	セーラームーン/ハローキティ	モグモグゴンボ	ドラえもん/ワイロータウン	アイアンリーガー	30 17	
		スーパーマリオクラブ	ゴウザウラー	クレヨンしんちゃん スラムダンク	Y A I B A	ガンダム あしたP-KAN気分	特撮ロボ ジャンパーソン	ダイレンジャー/ ミラクルガール		
		TVチャンピオン	笑撃的電影箱	美佐子の科学館	料理パンザイ	はなさんデータランド	週間テレビ あがんにゃ	マジカル 頭脳パワー		18
A	7	おしらせ	クイズ ヒントでピント	おしらせ	おしらせ	たけしの 元気になるTV	愛ラブSMAP	スターの晩ごはん	30 19	
		8	ワールド プロレスリング	噂屋 石近	全日本プロレス中継	スーパーテレビ 情報最前線	さすらい刑事/ ミステーション	暴れん坊将軍/ 闇を斬る		さんまの なんでもダービー
		9 10	月曜特集 日本名作ドラマ マフリン	火曜サスペンス	タモリの 音楽は世界だ	木曜スペシャル	M T V 映画劇場	とんねるずの 生でダラダラ いかせて!!		ドラマ 愛してる
B	10 40	ドキュメント33	同窓会	演歌の花道	40	映画劇場	土曜ワイド劇場	世界とんでもヒストリー	10 22	
B	11 20	M T V ニュースライナー					0:10	タモリ倶楽部	55 23 特	
B	0 15	いい旅 夢気分	地球知りたい気分	50 Enka TV おしらせ 30:30	木曜ドラマ	水着でKiss me 11:50	華麗にAh! So	カーグラTV	25 24	
B	1 55	M T V ニュースライナー(再)					ウィークエンドライブ 「週間地球TV」	釣りロマンを求めて	MTVサンデートピック (再)	55 25 B
		トウナイト					1:15 ニュースライナー (再)	ギルガメッシュないと	25 25	
		1:50					1:55 2:25	ダブルゲンガー/ ゴルフ尾崎に挑戦	ニュースウィークリー宮古 (再)	

CM放送基本料金表

スポット			
秒数	区分	A タイム	特B タイム
15秒		3,500	2,500
30秒		7,000	5,000
インフォーマーシャル			
分数	区分	A タイム	特B タイム
1分		12,000	8,000
5分		50,000	30,000
電波料金			
分数	区分	A タイム	特B タイム
15分		150,000	90,000
30分		300,000	130,000
60分		600,000	360,000

広告主名	放送期間	年 月 日 ~ 年 月 日	広告代理店名					
放送期間	年 月 日 ~ 年 月 日	素材名						
内訳	秒数	区分	A タイム	特B タイム	B タイム	放	A	計
本数						送	B	
総本数						料	B	
番組名						制作費		担
						契約総額		当

(消費税は別途申し受けます。)



## 調査協力者一覧（平成2年～4年）

### [沖縄県]

蔵 根 芳 雄（沖縄県教育庁社会教育課副参事）  
屋比久 盛 徳（沖縄県教育庁社会教育課主任社会教育主事）  
比 嘉 伝 福（沖縄県教育庁社会教育課社会教育主事）  
高 嶺 朝 勇（沖縄県教育庁社会教育課社会教育主事）  
濱 比 嘉 勝（沖縄県教育庁社会教育課長補佐）  
大 城 精 徳（沖縄県文化財保護審議会専門委員）  
瑞 慶 山 昇（沖縄県立博物館学芸員）  
川 端 昇（沖縄県宮古支庁総務係長）  
瑞 慶 覧久雄（沖縄県教育庁宮古教育事務所指導課長）  
比 嘉 正 行（沖縄県宮古支庁農林水産課課長補佐）  
比 嘉 武 信（沖縄県農林水産部宮古農業改良普及所）  
内 原 英 忠（沖縄県教育庁八重山教育事務所）

### [大学関係]

奥 田 佳 朗（琉球大学医学部教授・学生部長）  
向 江 俊 行（琉球大学学生部学生課長）  
砂 川 寛 昭（琉球大学学生部学生課長補佐）  
具志堅 サワ子（琉球大学学生部学生課教務係長）  
上 原 博（琉球大学学生部学生課）  
垣 花 勝 行（琉球大学庶務部庶務課）  
近 藤 武（琉球大学学生課長）  
儀 保 博 信（琉球大学学生部学生課長補佐）  
真志喜 得 永（琉球大学経理部経理課）  
具志堅 朗（沖縄大学広報室長）  
山 根 光 正（沖縄国際大学広報課）  
比 嘉 健次郎（沖縄キリスト教大学教授）  
漢 那 憲 治（沖縄キリスト教大学教授）  
西 銘 純 子（沖縄キリスト教大学企画課）  
東 江 康 治（放送大学沖縄ビデオ学習センター長）  
真栄城 潔（放送大学沖縄ビデオ学習センター事務室長）  
新 垣 政 雄（放送大学沖縄ビデオ学習センター）  
大 井 尚（放送大学沖縄ビデオ学習センター）

### [沖縄本島]

宮 城 元 信（読谷村村立美術館長）

比 嘉 盛 加 (県立石川中学校校長)  
石 嶺 伝 実 (読谷村教育委員会公民館主事)  
仲宗根 盛 和 (読谷村教育委員会社会教育主事)  
島 袋 正 敏 (名護市教育委員会社会教育課長)  
照 屋 秀 裕 (名護市教育委員会社会教育主事)  
宮 城 竹 秀 (名護市在住・大宜味村文化財専門委員)  
松 本 太 一 (大宜味村在住・田港区長)  
当 山 全 信 (大宜味村在住・祭事実行委員長)  
崎 浜 秀 安 (国頭村在住・村会議員)

[宮古群島]

根 間 玄 洋 (平良市教育委員会社会教育課長)  
池 村 廣 光 (平良市中央公民館社会教育主事)  
久 貝 克 博 (平良市役所企画室)  
島 尻 英 樹 (平良市老人福祉センター)  
与那覇 金一郎 (平良市在住)  
仲宗根 將 二 (平良市総合博物館館長)  
佐渡山 正 吉 (平良市在住・郷土史家)  
松 川 澄 夫 (平良市在住・農業)  
寄 川 功 一 (宮古広域圏事務組合総務課長)  
翁 長 靖 夫 (宮古広域圏事務組合振興課長)  
平 良 一 夫 (宮古郡農業協同組合組合長)  
友 利 治 (宮古郡農業協同組合営農指導部)  
下 地 哲 男 (県立宮古高等学校教頭)  
嶽 原 安 雄 (県立宮古農林高等学校教頭)  
平 良 亮 (県立宮古水産高等学校長)  
粟 国 和 伸 (宮古テレビ(株)総務課長)  
池 間 道 安 (宮古テレビ(株)放送課長)  
池 間 作 一 (宮古テレビ(株)伊良部営業所長)  
佐久田 重 彦 (下地町役場総務課長)  
砂 川 隆 夫 (下地町役場総務課企画係)  
下 地 恵 好 (下地町在住・農業)  
砂 川 正 幸 (城辺町在住・農業)  
池 間 勇 吉 (城辺町在住・農業)  
久 高 義 雄 (伊良部長教育委員会教育長)  
新 川 文二郎 (伊良部町漁業協同組合理事)  
福 里 弘 行 (伊良部長教育委員会社会教育主事)  
仲 間 義 彦 (伊良部町役場水産課長)

武 富 進 (伊良部町役場税務課長)  
喜久川 豊 一 (伊良部町役場佐良浜支所)  
長 間 静 夫 (伊良部町在住・漁業)  
普天間 武 (伊良部町在住・漁業)  
国 吉 正 男 (伊良部町在住・漁業)  
浜 元 直 助 (伊良部町在住・漁業)  
前 泊 英 雄 (伊良部町在住・漁業)  
福 里 良 成 (伊良部町在住・漁業)  
池 間 光 雄 (伊良部町在住・漁業)  
具志堅 貞 芳 (伊良部町在住・漁業)  
浜 川 文 一 (伊良部町在住・漁業)

[八重山群島]

仲 本 英 清 (石垣市教育委員会教育長)  
石 垣 博 孝 (石垣市教育委員会社会教育課長)  
仲 本 正 貴 (石垣市在住)  
玻名城 泰 雄 (石垣市立八重山博物館長)  
藤 村 千 寿 (石垣市役所総務部企画室)  
野 底 良 佑 (石垣市中央放送社)  
宮 良 操 (石垣市立文化会館)  
大 浜 安 倉 (石垣市立視聴覚ライブラリー)  
黒 島 剛 (石垣ケーブルテレビ(株)編成部)  
大 盛 武 (竹富町役場企画課長)  
前鹿川 勇 (竹富長企画課企画係長)  
東 田 正 祥 (竹富町教育委員会教育課)  
上勢頭 芳 徳 (竹富町喜宝院蒐集館)  
上勢頭 英 元 (竹富町在住)  
安 里 淳 (竹富町在住)  
桃 原 方 英 (竹富町在住)